宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第１９０集

前ノ田村遺跡

まえ　の　だ　むら

Maenodamura Site

国営尾鈴農業水利事業西光原調圧水槽工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１０

宮崎県埋蔵文化財センター

調査区遠景

赤色顔料を塗布した縄文土器（遺物番号２２（左），２３（右）の裏面）

調査区全景

序

宮崎県教育委員会では、平成２０年度に国営尾鈴農業水利事業西光原調圧水槽工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査報告書です。

本書に掲載した前ノ田村遺跡は、尖頭器や細石刃をはじめとする後期旧石器時代の石器や、縄文時代早期の集石遺構や炉穴などの遺構、貝殻条痕文土器や無文土器、敲石などの遺物を確認しました。さらに弥生時代終末期頃の竪穴住居跡６軒と、櫛描き文様の二重口縁壺や甕、円形透かしをもつ高坏、方形石庖丁などを確認しました。これらは当該期の地域交流の様相を知る良好な資料を蓄積することができました。ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関・地元の方々に対して、厚くお礼申し上げます。

平成２２年　２月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長　　福永　展幸

例　言

1　本書は平成２０年度国営尾鈴農業水利事業西光原調圧水槽工事に伴い、宮崎県教育委員会が実施した宮崎県児湯郡川南町大字川南字西国光所在の前ノ田村遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は農林水産省九州農政局尾鈴農業水利事業所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査は平成２０年７月２９日から平成２０年１０月１６日まで行った。

4　現地での実測・写真撮影などの記録は、黒木俊彦、松田博幸が発掘作業員の協力を得て作成した。なお、空中写真撮影は有限会社スカイサーベイ九州、基準杭設置は有限会社進藤測量設計事務所に委託した。

5　整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面作成・実測・トレースは黒木が整理作業員の協力を得て行った。なお、石器の石材同定については当センター調査第一課調査第一担当藤木聡主任主事の協力を得た。

6　本書で使用した第１図「遺跡位置図」は国土地理院発行の２万５千分の１図、第２図「周辺地形図」は国土地理院の承認助言を得て川南町役場が作成した１万分の１図を使用した。

7　本書で使用した土層断面図及び遺物の色調等は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」による。

8　本書で使用した方位は座標北（座標第Ⅱ系）で、レベルの表示は海抜絶対高である。

9　本書で使用した遺構の略号は次の通りである。

ＳＡ‥‥竪穴住居跡　　ＳＣ‥‥土坑　　ＳＩ‥‥集石遺構　　ＳＰ‥‥炉穴

10　本書の執筆は第１章第１節を文化財課日髙広人が、その他の執筆・編集を黒木俊彦が行った。

11　出土遺物・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに
　第１節　調査に至る経緯・・・１
　第２節　調査の組織・・・１
第Ⅱ章　調査の概要
　第１節　遺跡の位置と環境・・・２
　第２節　調査の経過・・・５
　第３節　基本層序・・７
第Ⅲ章　調査の記録
　第１節　旧石器時代の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７～８
　第２節　縄文時代の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９～１７
　第３節　弥生時代の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８～５０
第Ⅳ章　自然科学分析
　第１節　放射性炭素年代測定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６３～６４
　第２節　蛍光Ｘ線分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６５～６６
第Ⅴ章　まとめ・・・６７～６９

挿図目次

第１図　遺跡位置図（Ｓ＝１／５０,０００）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
第２図　周辺地形図（Ｓ＝１／５,０００）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
第３図　グリッド配置図（Ｓ＝１／４００）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
第４図　遺構分布図（Ｓ＝１／２５０）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
第５図　基本層序・・・７
第６図　旧石器時代石器実測図Ｓ＝２／３（１～４）Ｓ＝１／１（５～７）・・・・・・・・・・・・・・・８
第７図　１号集石遺構（左）２号集石遺構実測図　Ｓ＝１／２０・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９
第８図　１号炉穴実測図　Ｓ＝１／４０　１号炉穴出土遺物実測図　Ｓ＝１／３・・・・・・・・・・・１０
第９図　縄文時代土器実測図①　Ｓ＝１／３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
第10図　縄文時代土器実測図②　Ｓ＝１／３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
第11図　縄文時代土器実測図③　Ｓ＝１／３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５
第12図　縄文時代石器実測図①　Ｓ＝２／３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６
第13図　縄文時代石器実測図②　Ｓ＝２／３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７
第14図　１号竪穴住居跡実測図　Ｓ＝１／４０・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８
第15図　１号竪穴住居跡出土遺物実測図①　Ｓ＝１／３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１９
第16図　１号竪穴住居跡出土遺物実測図②　Ｓ＝１／３（７６～８１）Ｓ＝２／３（８２）・・・・・・２０
第17図　２号竪穴住居跡実測図　Ｓ＝１／４０・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２１
第18図　２号竪穴住居跡出土遺物実測図　Ｓ＝１／３（８３～１００）Ｓ＝２／３（１０１）・・・・・２２

第19図　３号竪穴住居跡実測図 Ｓ＝１／４０ 出土遺物実測図 Ｓ＝１／３（１０２　１０３）
Ｓ＝２／３（１０４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２４
第20図　４号竪穴住居跡実測図　Ｓ＝１／４０・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２５
第21図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図①　Ｓ＝１／３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７
第22図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図②　Ｓ＝１／３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２９
第23図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図③　Ｓ＝１／３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３１
第24図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図④　Ｓ＝１／３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３２
第25図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図⑤　Ｓ＝１／３（１５９～１６８）Ｓ＝２／３（１６９　１７２）・・３３
第26図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図⑥　Ｓ＝２／３（１７０～１７４）　Ｓ＝１／２（１７５）・・３４
第27図　５号竪穴住居跡実測図　Ｓ＝１／４０・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３５
第28図　５号竪穴住居跡出土遺物実測図①　Ｓ＝１／３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３８
第29図　５号竪穴住居跡出土遺物実測図②　Ｓ＝１／３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３９
第30図　５号竪穴住居跡出土遺物実測図③　Ｓ＝１／３（２２４　２２５）Ｓ＝１／２（２２６）・・・４０
第31図　６号竪穴住居跡実測図　Ｓ＝１／４０・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４１
第32図　６号竪穴住居跡出土遺物実測図①　Ｓ＝１／３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４３
第33図　６号竪穴住居跡出土遺物実測図②　２号土坑出土遺物実測図　Ｓ＝１／３・・・・・・・・・・・４４
第34図　１号土坑実測図　Ｓ＝１／４０・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４５
第35図　２号土坑実測図　Ｓ＝１／４０・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４６
第36図　３号土坑実測図　Ｓ＝１／２０・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４６
第37図　第Ⅱ層出土遺物①　Ｓ＝１／３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４９
第38図　第Ⅱ層出土遺物②　Ｓ＝１／３（２８５～２９３）Ｓ＝１／２（２９４）・・・・・・・・・・５０

表目次

第１表　土器観察表①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５１
第２表　土器観察表②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５２
第３表　土器観察表③・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５３
第４表　土器観察表④・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５４
第５表　土器観察表⑤・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５５
第６表　土器観察表⑥・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５６
第７表　土器観察表⑦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５７
第８表　土器観察表⑧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５８
第９表　土器観察表⑨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５９
第10表　土器観察表⑩・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６０
第11表　土器観察表⑪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６１
第12表　石器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６２

図版

巻頭１　調査区遠景・・・巻頭１
巻頭２　赤色顔料を塗布した縄文土器（遺物番号２２（左），２３（右）の裏面）調査区全景　・・・・巻頭２
図版３　土器内面付着の赤色顔料　赤色顔料の顕微鏡写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６６
図版４　１号炉穴（南西より）　１号集石遺構（東より）　２号集石遺構半裁（南より）・・・・・・・・７１
図版５　１号竪穴住居跡（南より）　２号竪穴住居跡（南より）　３号竪穴住居跡（北東より）・・・・７２
図版６　４号竪穴住居跡（北より）　５号竪穴住居跡（北より）　６号竪穴住居跡（東より）・・・・・７３
図版７　１号土坑（南より）　２号土坑（南東より）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７４
図版８　旧石器時代石器　縄文時代土器①　②　③　縄文時代石器　・・・・・・・・・・・・・・・・・７５
図版９　ＳＡ１出土遺物①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７６
図版10　ＳＡ１出土遺物②　ＳＡ２出土遺物①　②　③　ＳＡ３出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・７７
図版11　ＳＡ４出土遺物①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７８
図版12　ＳＡ４出土遺物②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７９
図版13　ＳＡ４出土遺物③・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８０
図版14　ＳＡ４出土遺物④・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８１
図版15　ＳＡ４出土遺物⑤　ＳＡ５出土遺物①　ＳＡ５出土遺物②・・・・・・・・・・・・・・・・・８２
図版16　ＳＡ５出土遺物③　ＳＡ５出土遺物④　ＳＡ６出土遺物①　ＳＡ６出土遺物②・・・・・・・・８３
図版17　ＳＡ６出土遺物③　ＳＡ６　ＳＣ２出土遺物　第Ⅱ層出土遺物①　②・・・・・・・・・・・・・８４
図版18　第Ⅱ層出土遺物③・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８５

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

農林水産省九州農政局尾鈴農業水利事業所では、川南町尾鈴地区の農業生産性の向上と農業経営の安定を目的とし、畑台地への水源確保のために、切原ダムの新設及び既存の青鹿ダムとの計画的な利用と併せて、県営畑地帯総合整備事業による末端灌漑施設の整備を行う「国営尾鈴土地改良事業」を平成８年から展開している。

県文化財課では、この事業計画を受けて計画予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、平成７年度より同事業所と協議を開始し、これまでに平成１１年度の銀座第２ファームポンド建設工事に伴う藏座村遺跡をはじめ、平成１８年度には銀座第１ファームポンド建設工事に伴う明野遺跡、平成１９年度の大内ファームポンド建設工事に伴う住吉Ｂ遺跡及び赤石・鵜戸ノ本調整水槽建設工事に伴う赤石遺跡の発掘調査を実施している。

そうしたなかで、同事業所より照会を受けた平成２０年度事業のうち、西光原調圧水槽及びパイプライン建設予定地（同町大字川南字西国光）については、前ノ田村遺跡の隣接地にあたり、地形的にも遺跡が立地する可能性が高いことから、平成２０年４月２３日から２５日にかけて同課による試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、縄文時代早期及び弥生時代の遺構・遺物などを確認したことから同遺跡の範囲を拡大し、引き続き、遺跡の取り扱いについて、両者間で工事計画変更等の埋蔵文化財保護の方策についての協議を重ねたが、工事予定地の全区域において現状保存は困難であるという結論に至り、発掘調査による記録保存の措置をとることになった。

同年７月１日付で「埋蔵文化財発掘調査負担契約書」を締結し、県埋蔵文化財センターが発掘調査を同年７月２９日から１０月１６日まで実施した。

第２節　調査の組織

前ノ田村遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成は下記の組織で実施した。

調査主体　宮崎県教育委員会

平成２０年度　発掘調査・整理作業

平成２１年度　整理作業

調査機関　宮崎県埋蔵文化財センター

所　　長	福永　展幸
副所長	長友　英詞
総務課総務担当主幹	高山　正信
調査第二課長	石川　悦雄
調査第四担当主幹	近藤　協
調査第四担当主査（調査担当）	黒木　俊彦（報告書担当）
調査第三担当主査（調査担当）	松田　博幸
文化財課埋蔵文化財担当主査	日髙　広人

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　遺跡の位置と環境

前ノ田村遺跡は宮崎県児湯郡川南町大字川南字西国光２５４０６に所在する。遺跡の位置する川南町は、日向灘に面した宮崎県の中部に位置し、上面木山（１,０４０ｍ）から派生する山地及び丘陵面とその東麓から海岸にかけて広がる段丘面からなる。段丘面は、一連の平坦面ではなく、青鹿面・茶臼原面・国光原面・唐瀬原面・川南原面などの計１４面から構成される。本遺跡は、川南町市街地から南西へ約４ｋｍ、町中央部を東流する綿内川(平田川支流)の南側に形成されている標高約１００ｍの丘陵地に位置する。丘陵の北側及び西側は急崖を呈し、東側は緩やかに傾斜しながら国光原台地へと続いている。

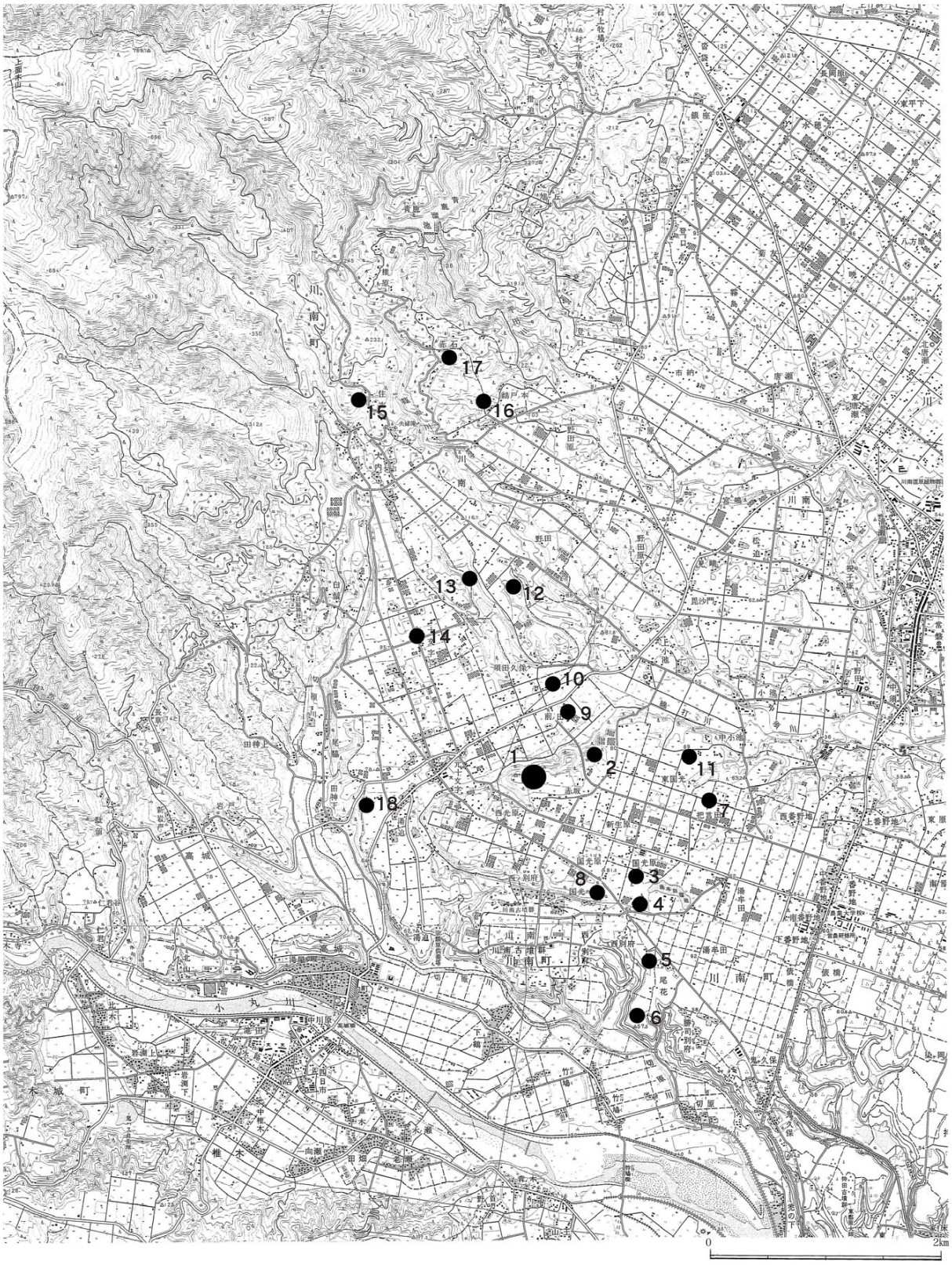
旧石器時代の遺跡は、分布調査や個人踏査、東九州自動車道建設に伴う発掘調査等により、多数確認されてきている。本遺跡の周辺では、剥片尖頭器やナイフ形石器、細石刃等を確認した前ノ田村上第２遺跡、台形石器、彫器等を確認した前ノ田村上第１遺跡や姶良・丹沢火山灰層下の調査により台形石器や石斧、掻器等を確認した国光原遺跡などがある。このほかにも礫群等の遺構を伴う遺跡として、中ノ迫第１遺跡(礫群４４基)、中ノ迫第３遺跡(礫群７基)などがあげられる。

縄文時代の遺跡調査例も、川南町教育委員会の分布調査や東九州自動車道建設に伴う発掘調査等により多数の遺跡が確認されている。本遺跡周辺では、国光原遺跡（集石遺構６３基、炉穴４１基等)、前ノ田村上第２遺跡（集石遺構５基、炉穴１基等）をはじめ、湯牟田遺跡（集石遺構２３基等）や中ノ迫第３遺跡（集石遺構３２基、炉穴２１基等）など早期の遺構を伴う遺跡が確認されている。また、やや北方に離れるが、草創期の隆帯文土器が出土し、後・晩期の竪穴住居跡を確認した赤石・天神本遺跡などもある。

弥生時代の遺跡は、本遺跡周辺では、竪穴住居跡７軒、周溝状遺構１基等を確認した国光原遺跡、検出例の少ない周溝墓を１基確認した赤坂遺跡（ほかに竪穴住居跡２３軒、周溝状遺構３基等)、湯牟田遺跡（竪穴住居跡２４軒、掘立柱建物跡６棟等）では、焼失住居跡が確認されるとともに、炭化鋤も発見されている。これら竪穴住居跡を伴う遺跡は多数確認され、時期としては、後期から終末期にかけてのものが多い。

古墳時代の遺跡は、前述した湯牟田遺跡や伯戴鏡が出土し中央との関わりが推定される西ノ別府遺跡などをはじめとして多数の調査が行われており、この時代の代表的な川南古墳群へと続く。

歴史時代では、奈良～平安にかけての上垂門火葬墓や戦国期の宗麟原供養塔が知られる。中世から近代にかけての遺跡調査例として、前ノ田村上第１遺跡(掘立柱建物跡５２棟、石組遺構１基等)、湯牟田遺跡（掘建柱建物跡２３棟）など当該期の調査例も増加してきている。



1前ノ田村遺跡　2赤坂遺跡　3国光原遺跡　4湯牟田遺跡　5西ノ別府遺跡
6尾花Ａ遺跡　7把言田遺跡　8上ノ原遺跡　9前ノ田村上第１遺跡　10前ノ田村上第２遺跡
11東国光遺跡　12中ノ迫Ａ遺跡　13大迫遺跡　14大久保遺跡　15住吉Ｂ遺跡
16赤石・天神本遺跡　18前原Ｂ遺

【第１図　遺跡位置図　Ｓ＝１／５０.０００】

0　250m

【第２図　周辺地形図　Ｓ＝１／５.０００】

第２節　調査の経過

調査区は、段丘の北西縁辺部で丘陵の頂上付近にあり、北側が最上部で標高約１００ｍ、南東側にむけて傾斜していくが、南に向かうにつれてやや急な斜面を形成している。最下部との標高差は、約６ｍである。なお、西側には、川南町の管理する第５配水池が隣接している。

調査は、平成２０年７月２９日から平成２０年１０月１６日にかけて行い、６１２㎡が調査対象面積である。

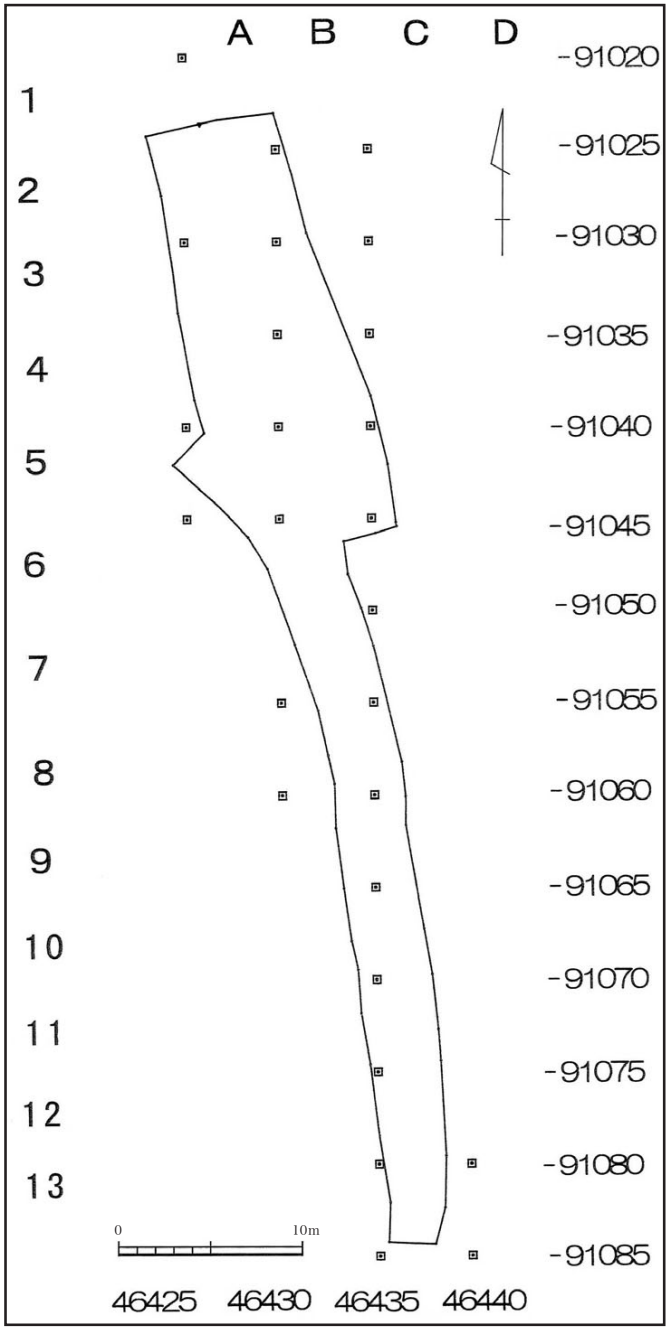
記念植樹された桜などをはじめとする樹高約２～３ｍほどの低木やクマザサが生い茂っていたことから、重機を使って第Ⅰ層、第Ⅱ層の表土剥ぎから開始した。また、第Ⅲ層が約７，３００年前に降灰した鬼界アカホヤ火山灰層であることから、この層上面で遺構検出を行うこととした。さらに、樹痕や風倒木などの影響を受けたと考えられる土層の撹乱範囲も数カ所確認され、自然堆積層の範囲はきわめて狭小であった。

また、調査区の北側に遺構や遺物が比較的密にみられたことから北側の調査に重点を置き、南側は表土剥ぎの段階で基底礫が出現していたため、一部調査から除外した。

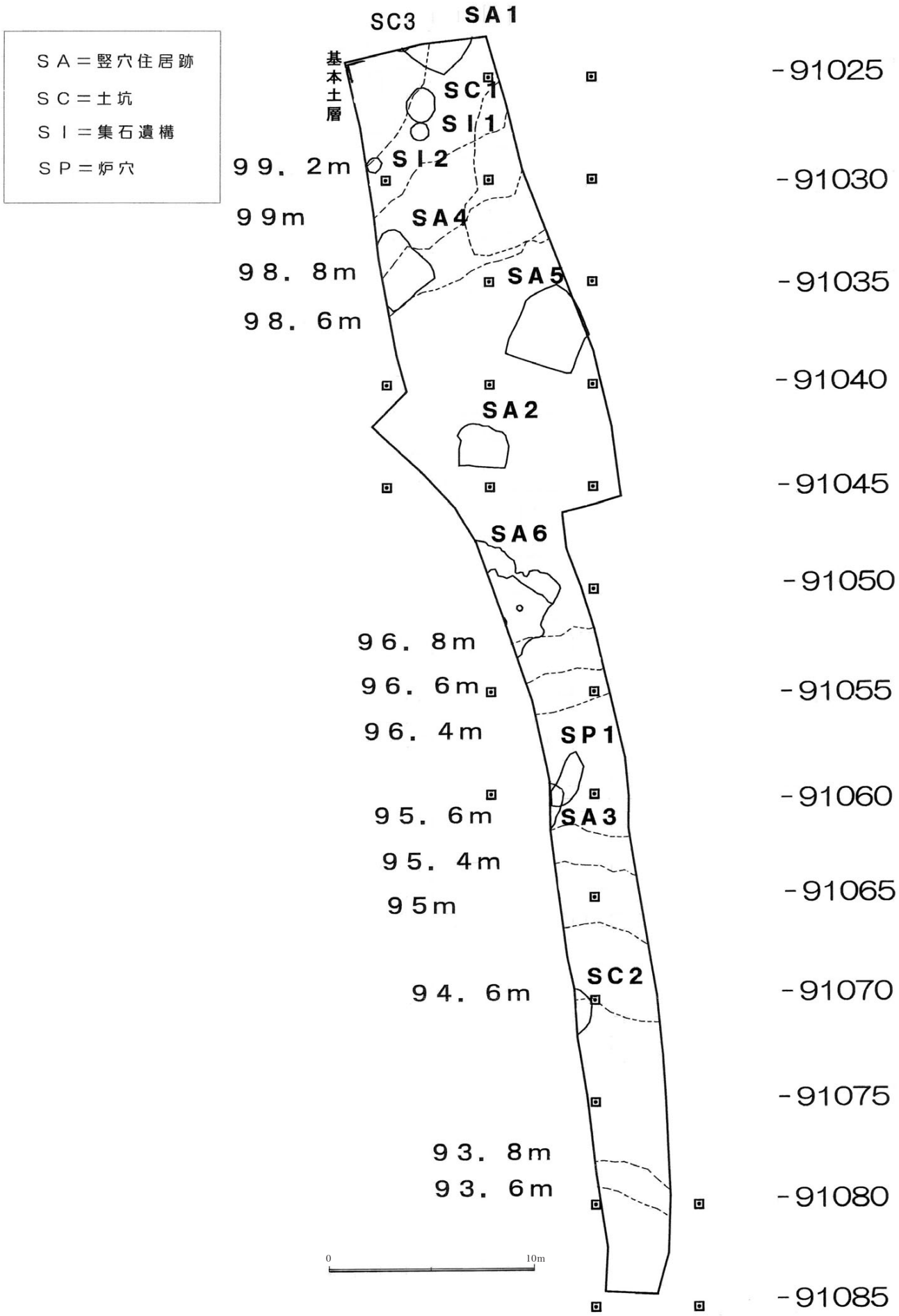
遺構精査によって、第Ⅱ層（包含層）より弥生時代終末期頃と考えられる二重口縁壺や高坏の口縁部、竪穴住居跡を確認した。これら弥生時代の発掘調査を９月上旬まで行ったあと、第Ⅳ層、第Ⅴ層の調査をすすめた。

第Ⅳ～第Ⅴ層にかけては、後期旧石器時代の遺物として剥片尖頭器やナイフ型石器、縄文時代早期の遺構として調査区北側で集石遺構２基を、南側で炉穴１基を確認した。また打製石鏃や敲石や土器（押型文、無文、貝殻条痕文）などの遺物を確認できた。

なお、調査は、記録図面作成のため、国土座標（ＸＹ座標）に乗じた５ｍ単位のグリッドを設定し、南北方向は北から南へ１～１３、東西方向は西から東へＡ～Ｄに区画し、調査区を設定した。以後の文章でこの区画を用いることとする。



【第３図　グリッド配置図　Ｓ＝１／４００　】



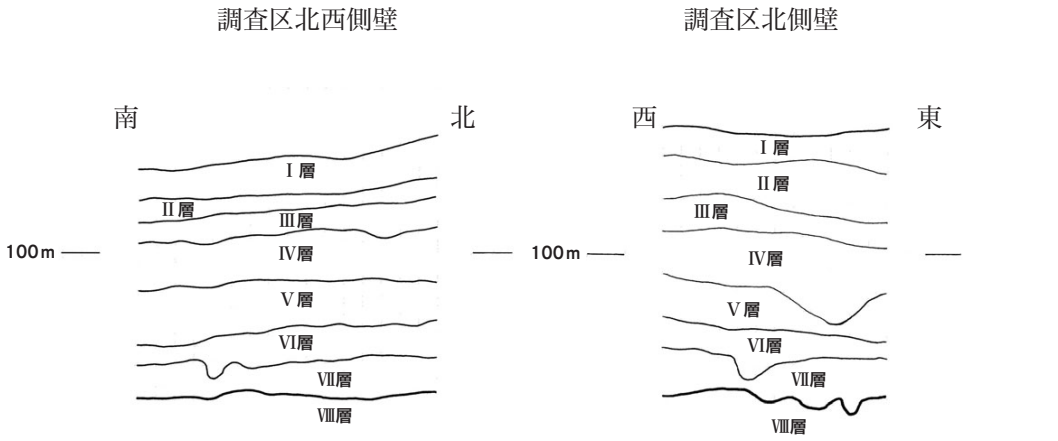
【第４図　遺構分布図 Ｓ＝１／２５０】

第３節　基本層序

前ノ田村遺跡は調査区北側の標高が高く、南に向かうにつれて傾斜していく比高差約６ｍの斜面地形である。また、東西をみると、西から東へ向けてわずかに傾斜する地形でもある。土層堆積状況は、風倒木や撹乱の影響を受けている箇所が数カ所みられ、住居跡等の遺構を除くと、自然堆積の残る箇所は、北側のＡ２グリッド周辺一帯であった。

基本的な堆積については、年代測定の目安となる第Ⅲ層：鬼界アカホヤ火山灰層、第Ⅵ層：姶良・丹沢火山灰層（通称ＡＴ。以後この標記とする）の２種類の火山灰層を確認できた。第Ⅲ層は、調査区の南側の一部を除くほぼ全域で、層厚約１５ｃｍの値で確認できた。第Ⅵ層もほぼ全域で確認できたが、北側は層厚約１０ｃｍで南に向かうにつれてやや厚くなっていた。

遺物は主に後期旧石器時代、縄文時代早期が第Ⅳ、Ⅴ層から、弥生時代が第Ⅱ層から出土した。基本層序は次の通りである。



【基本土層】

Ⅰ	表土	
Ⅱ	黒褐色土	黒褐色（Hue10YR 3／1）ややしまりがあるが、崩れやすい。粘性弱い。
Ⅲ	鬼界アカホヤ火山灰層	にぶい赤褐色（Hue 5YR 4／4）粘性ややあり、かわくともろくくずれやすい。
Ⅳ	黒褐色土	黒褐色（Hue 10YR 2／3）粘性強く、硬くしまっている。
Ⅴ	褐色土	褐色（Hue7. 5YR 4／3）粘性強く、硬くしまる。
Ⅵ	姶良・丹沢火山灰層	明黄褐色（Hue 10YR 6／8）しまりがあるが、かわくとくずれやすい。
Ⅶ	黒色土	黒褐色（Hue 10YR 2／3）非常に硬く、しまりがある。
Ⅷ	礫層	

【第５図　基本層序】

第Ⅲ章　調査の記録

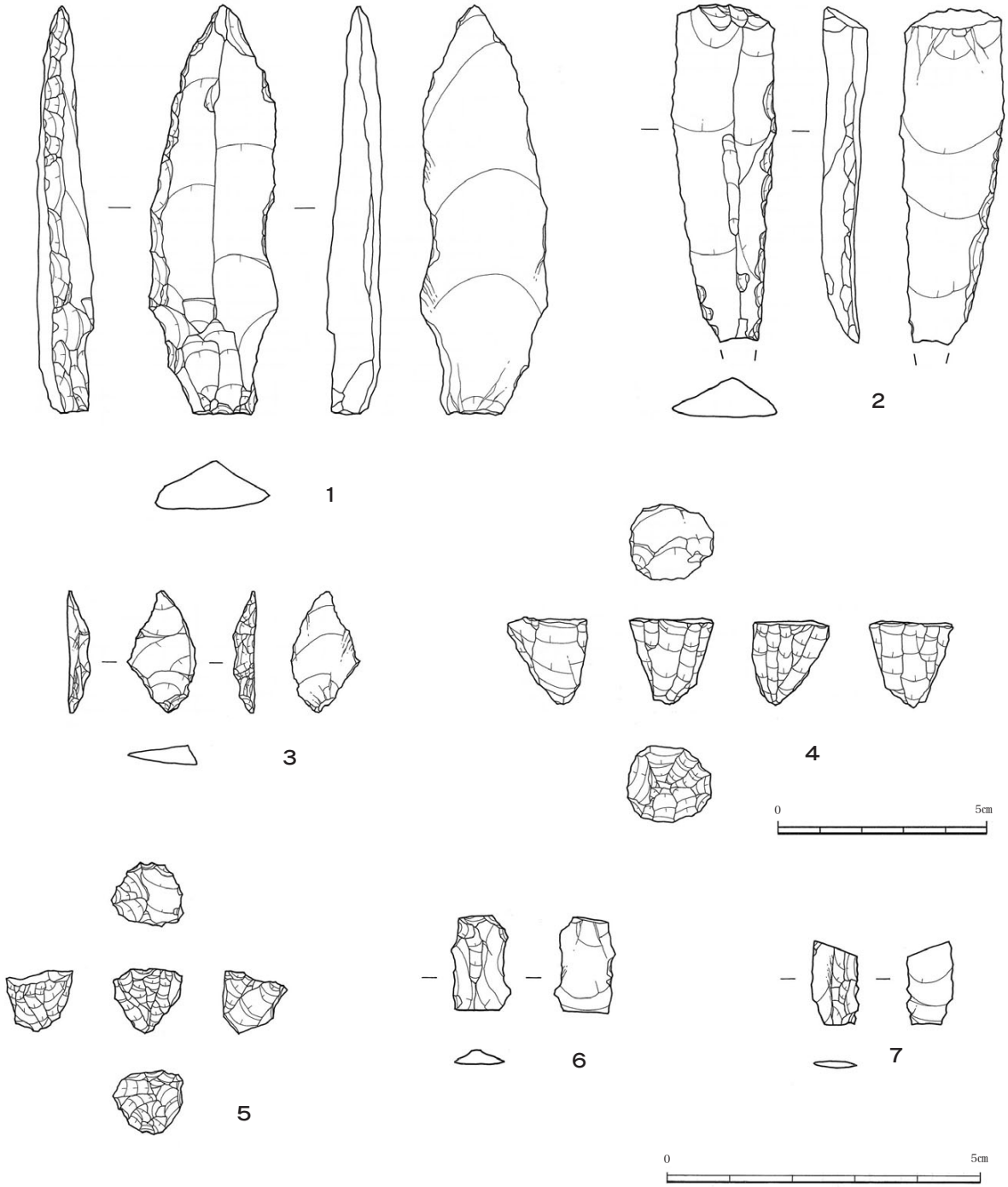
第１節　旧石器時代の調査

第Ⅶ層についての調査は、上位層の遺構や遺物の出土状況、撹乱範囲の状況などを考慮し、Ａ２グリッド周辺を中心に５ｍ四方の掘り下げ作業により、遺物確認を行った。その結果、第Ⅶ層の遺物は全く出土せず、遺構も確認できなかった。これにより、Ａ・Ｔ上位層までの調査を行うこととした。

本遺跡の調査において、後期旧石器時代の遺構はなく、石器が数点出土した。

１は剥片尖頭器である。右側辺上半部、左側辺先端に刃部を施しているが、風化が著しく刃部は明確には判別しがたい。左側辺は先端を除いてブランディングを施している。２は縦長剥片である。両側辺とも

かすかに刃部を施したあとがみられるが、１同様風化が著しい。剥片尖頭器の製作途中または使用後と想定される。先端（下部）は欠損している。３はナイフ形石器である。右側辺下部を敲打し基部を作る。左側辺上部は刃部となり、右側辺は全面にブランディングを施している。宮崎編年第７段階〔参23〕に相当する。４はホルンフェルス製の円錐状を呈する細石刃核で、全周の２／３に細石刃作出のあとがみられる。５も円錐状を呈する細石刃核で黒曜石製である。ほぼ全周にわたって細石刃作出のあとがのこる。４同様に各方向からの細石刃採取のあとがみられる。６、７はホルンフェルス製の細石刃である。７は折損したと考えられる。



【第６図　旧石器時代石器実測図　Ｓ＝２／３（１～４）　Ｓ＝１／１（５～７）】

第２節　縄文時代の調査

本遺跡の調査では、第Ⅳ層～第Ⅴ層において、縄文時代草創期の遺物が９点出土するとともに、縄文時代早期の遺構として集石遺構２基、炉穴１基が検出され、遺物も多数出土した。

１　遺構および遺物

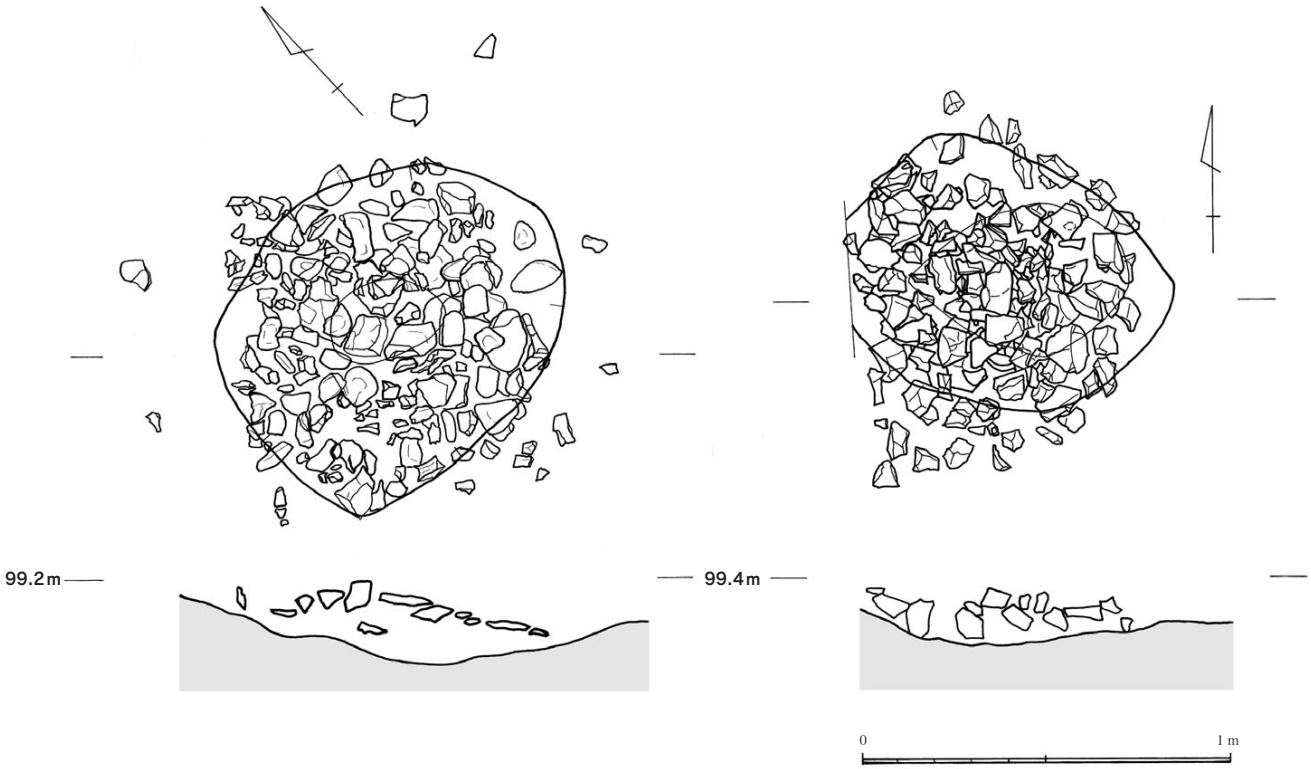
（１）集石遺構

１号集石遺構

この遺構は、調査区北側Ａ２グリッド内の第､層で確認した。１号土坑とわずかに接する。長径約１００ｃｍ、短径約８０ｃｍで、５～１０ｃｍ大の尾鈴山酸性岩類、砂岩などで構成される。北西から南東にかけてわずかに傾斜しながら、約１５ｃｍ堀り込まれていた。配石はなかった。

２号集石遺構

この遺構は、調査区北側Ａ１グリッド内の第Ⅳ層で確認した。調査区の西側壁に一部接する。長径９０ｃｍ、短径７０ｃｍで拳大の尾鈴山酸性岩類、砂岩などで構成される。堀込みは約１０ｃｍと浅く、配石もなかった。

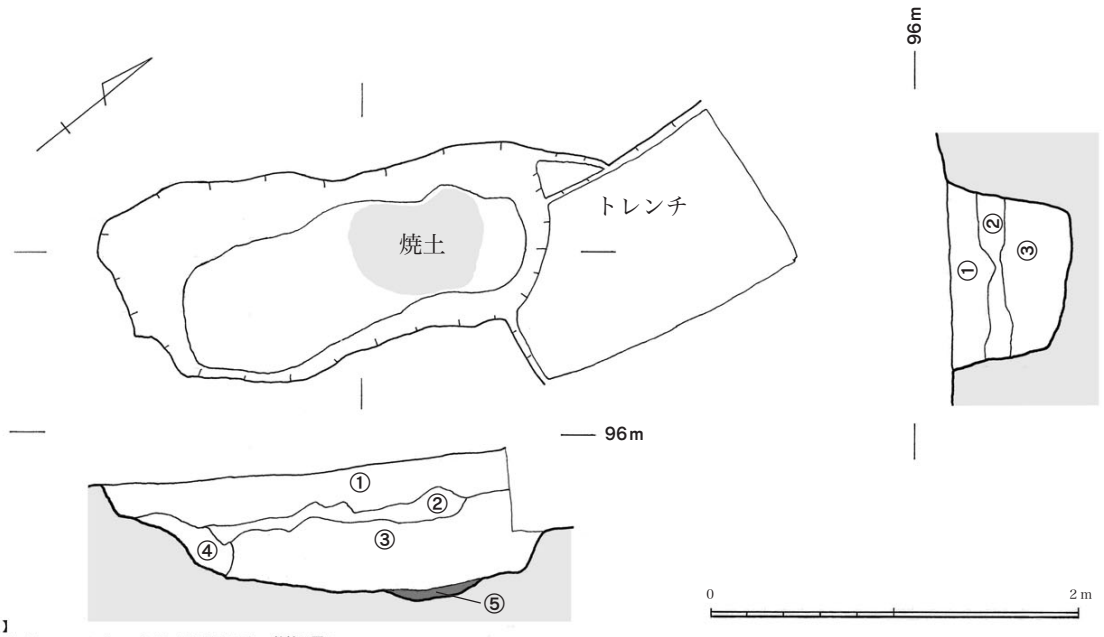


【第７図　１号集石遺構（左）２号集石遺構実測図　Ｓ＝１／２０】

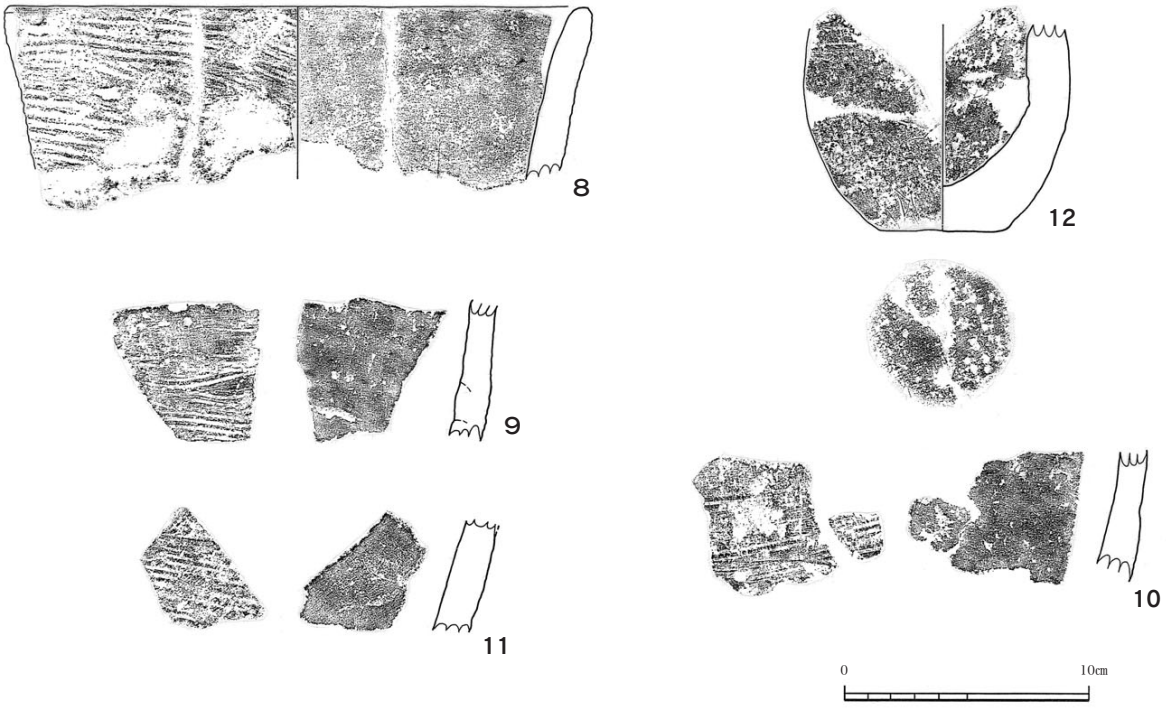
（２）炉穴

１号炉穴

この遺構は、調査区南側Ｂ８グリッドで確認した。長軸径約２１０ｃｍ、短軸径約４０ｃｍ、第Ⅳ層上面からの深さは約６０ｃｍである。長軸は南西から北東にかけて延びるが、北東端はトレンチにより、一部切られる。また、北東床面には、長径３０ｃｍ×短径２０ｃｍ、深さ１～５ｃｍ程度の焼土がみられた。なお、遺物は遺物番号８、９、１０などの貝殻条痕文土器が８点出土している。



【SP1】
①暗褐色土（10YR3／3）　ややしまりがあり、硬い。粘性は弱い。
②　〃　　〃　　①よりもかなり硬くしまっている。粘性は①と同じ。
③黒褐色土（7．5YR2／2）　②と同程度の硬さ。
④褐色土（7．5YR4／4）　③よりは硬くはないが、粘性が強く、黒褐色土がブロック状に混じる。
⑤明赤褐色土（2．5YR5／6）焼土と考えられる。暗褐色土をブロック状に含む。



【第８図　１号炉穴実測図　Ｓ＝１／４０　１号炉穴出土遺物実測図　Ｓ＝１／３】

１号炉穴出土遺物

１号炉穴出土遺物土器を５点図化した。なお、石器はなく、礫が数点確認できた程度である。

８は、深鉢の口縁部である。外面はナデ調整のあと、横位もしくは斜位に貝殻条痕文を施す。内面は丁寧なナデ調整である。器壁はやや厚く、わずかに外反する。口唇部は丁寧なナデ調整により丸みを帯

びる。内面はナデ調整のみで、文様はない。内外面ともに風化気味である。９は深鉢の胴部～底部付近である。外面は丁寧なナデ調整のあと横位の貝殻条痕文を施している。指頭痕や風化の影響で一部文様が摩耗している。内面は丁寧なナデ調整である。１０は深鉢の胴部から底部付近である。外面は丁寧なナデ調整のあと横位の貝殻条痕文を施している。内面も丁寧なナデ調整である。１１は深鉢の胴部である。内外面ともナデ調整であるが、風化が著しい。外面は横位もしくは斜位の貝殻条痕文を施している。１２は小型の鉢形土器の胴部から底部である。器壁は厚く、平底を呈する。底径は約５.２ｃｍを測る。外内面ともにナデ調整と思われるが、風化が著しい。

（３）第Ⅳ層、第Ⅴ層出土遺物

ア　縄文土器

本遺跡での縄文土器については、早期の遺物が大半を占め、草創期の遺物は９点であった。復元作業の結果、完形に近い状態の個体は全くなく、接合できた土器片も限られ少数であった。また、遺物の取り上げについては、斜面上の地形であることや層位の不明朗な箇所があることなどからⅣ層とⅤ層との明確な班別には困難を要した。したがって第Ⅳ層、第Ⅴ層の遺物をまとめて掲載する。草創期の土器を①とし、早期の土器は②とするが、口縁部の形状、文様等によりＡ類　貝殻条痕文土器、Ｂ類　無文土器、Ｃ類　押型文土器に大別した。さらに、口縁部、口唇部の形状、文様などにより、Ａ類については４種、Ｃ類については２種に細別した。

①　草創期の土器　：隆帯文土器（１３～２１）

１３～２１は草創期から早期はじめにかけての土器である。１３～１６は内外面とも粗い調整である。外面には突帯を貼り付けるが、下方に垂れる。指頭痕もみられる。１７は口縁下に屈曲部をもうける。内外面とも粗い調整で口唇部は丸みを帯びる。１８は深鉢の口縁部である。口唇部は丸みを帯びる。口縁下部に屈曲部を設ける。内外面ともに調整は粗い。外面にはススの付着もみられる。１９は内外面とも粗い調整で、指頭痕が残る。１８は１７と同一個体の可能性も考えられる。２０は深鉢の口縁部である。口唇部は丸みを帯びる。内外面とも粗い調整である。２１は内外面ともやや粗い調整であるが、他の隆帯と比して、それほど下垂しない。

②　早期の土器

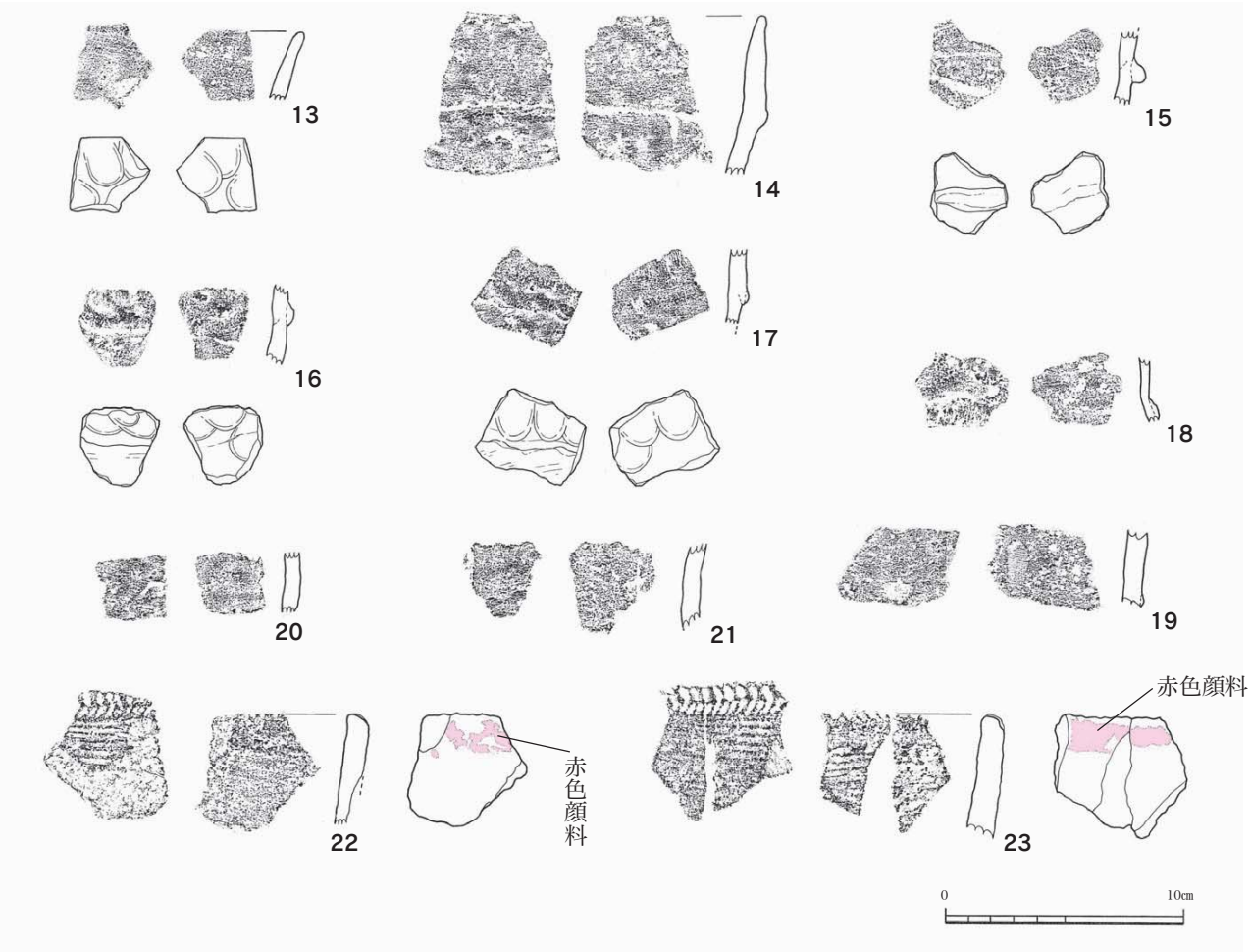
Ａ類　貝殻条痕文土器（２２～４３）

Ａ－ａ　（２２・２３）

口縁部が直行する形態である。口唇部を平らに仕上げ、貝殻による刻みを入れるものである。２２、２３は、口縁直下及び口唇部に刺突文を、刺突文下部に横位の貝殻条痕文を施している。また、内面上部には赤彩を施している。前平式土器に相当すると考えられる。

Ａ－ｂ（２４～２８）

口縁部が直行し、口唇部を平らに仕上げるものである。２４は口縁直下、貝殻腹縁刺突文を施しているが、風化が著しい。内面はナデ調整が施されるが、風化が激しい。２５の外面は丁寧なナデ調整のあと、横位の貝殻条痕文を施し、さらに、縦位の貝殻腹縁刺突文を施すが、風化が著しい。内面は丁寧なナデ調整を施す。２６の外面は横位の貝殻条痕文のあと、口縁直下に貝殻刺突文を施す。やや風化気味であり、指頭痕もみられる。内面は丁寧なナデ調整を施す。２７は内外面とも風化が著しく、外面の文



【第９図　縄文時代土器実測図①　Ｓ＝１／３】

様は定かではないが、胎土、形状などからこの類とした。２８は内外面とも風化が激しく、ごく一部の外面に横位の貝殻条痕文を確認できる。

Ａ－ｃ（２９・３０）

口縁部が外反し、口唇部が丸みを帯びるものである。２９の外面は風化もしくは剥落が著しく、外面の文様は定かではないが、胎土や形状などからこの類とした。内面はナデ調整を施す。３０の外面は丁寧なナデ調整のあと、横位もしくは斜位の貝殻条痕文を施している。内面はナデ調整であるが、風化気味である。

Ａ－ｄ（３１～４３）

口縁部が外反し、口唇部を平らに仕上げるものである。３１は口唇部の一部がややふくらみがあるがこの類とした。外面はナデ調整のあと横位に貝殻条痕文を施しているが、風化が著しい。内面も風化が著しいが、ナデ調整と考えられる。３２は外面は横位の貝殻条痕文を施している。内面は丁寧なナデ調整であるが、風化気味である。３３は外面は横位に貝殻条痕文を施しているが、指頭痕により一部消滅している。内面も丁寧なナデ調整が施され、一部風化気味であるが、指頭痕も残る。

ここからは、貝殻条痕文を有する深鉢の胴部片をまとめて記載する。３４は内外面ともナデ調整が施されるが、風化が著しく、外面は特に顕著である。土器片下部にかろうじて貝殻条痕文を確認できる。

３５は内外面ともナデ調整が施されるが外面はやや風化気味である。文様はかろうじて確認できる。３６は内外面とも丁寧なナデ調整が施され、外面は横位に貝殻条痕文が施される。３７は内外面ともナデ調整が施され、外面は横位・斜位に貝殻条痕文が施される。指頭痕が内外面ともに残る。３８の外面はナデ調整のあと、貝殻条痕文が横位に施されるが、風化が著しく、条痕文が摩耗している。内面は丁寧なナデ調整が施される。３９、４０の外面はナデ調整のあと、横位もしくは斜位に貝殻条痕文が施されるが、風化のためごく一部にしか痕跡は残っていない。内面は丁寧なナデ調整である。４１は外面はナデ調整が施されるが、風化気味である。文様はごく一部に確認できる。内面は丁寧なナデ調整が施される。４２は外面はほとんどが剥落しており、残存部分にわずかに貝殻条痕文がみられる。内面は丁寧なナデ調整が施され、指頭痕も残る。４３は外面は風化が著しいため判然としない面が多いが、わずかに残存する所から判断するとナデ調整のあと貝殻条痕文を施すと考えられる。内面は丁寧ナデ調整が施されている。

Ｂ類　無文土器（４４～４６）

口縁部が直行し、口唇部が丸みを帯びるものである。無文で器壁は薄い。

４４は内外面とも丁寧なナデ調整が施されている。器壁は約４～６ｍｍである。４５は内外面ともナデ調整が施されているが、風化気味である。器壁は約４～７ｍｍである。４６は深鉢の口縁部である。内外面とも丁寧なナデ調整が施され、外面には未穿孔が残る。

４７～５４は、深鉢の胴部～底部または底部である。土器の一部のため、有文か無文かの判別は困難であるが、実見で無文なものを、ここでの扱いとした。４７、４９は内外面ともナデ調整が施されるが、風化気味である。尖底と考えられる。４８は内外面ともナデ調整が施されるが、やや風化している。安定した平底を呈し、ふくらみながら立ち上がる。５０は内外面ともナデ調整を施すが、風化気味である。平底を呈し、外方へ緩やかにふくらみながら立ち上がる。５１は内外面ともナデ調整を施すが、風化気味である。平底を呈する。５２の内外面は丁寧なナデ調整を施すが、内面は風化がややみられる。平底で、立ち上がりがやや丸みを帯びる。５３は底部付近で、内外面は丁寧なナデ調整であるが、内面は風化気味である。５４は内外面とも丁寧なナデ調整が施されるが、風化が著しい。底部は欠損しているが、平底であると考えられる。

Ｃ類　押型文土器　（５５　５６）

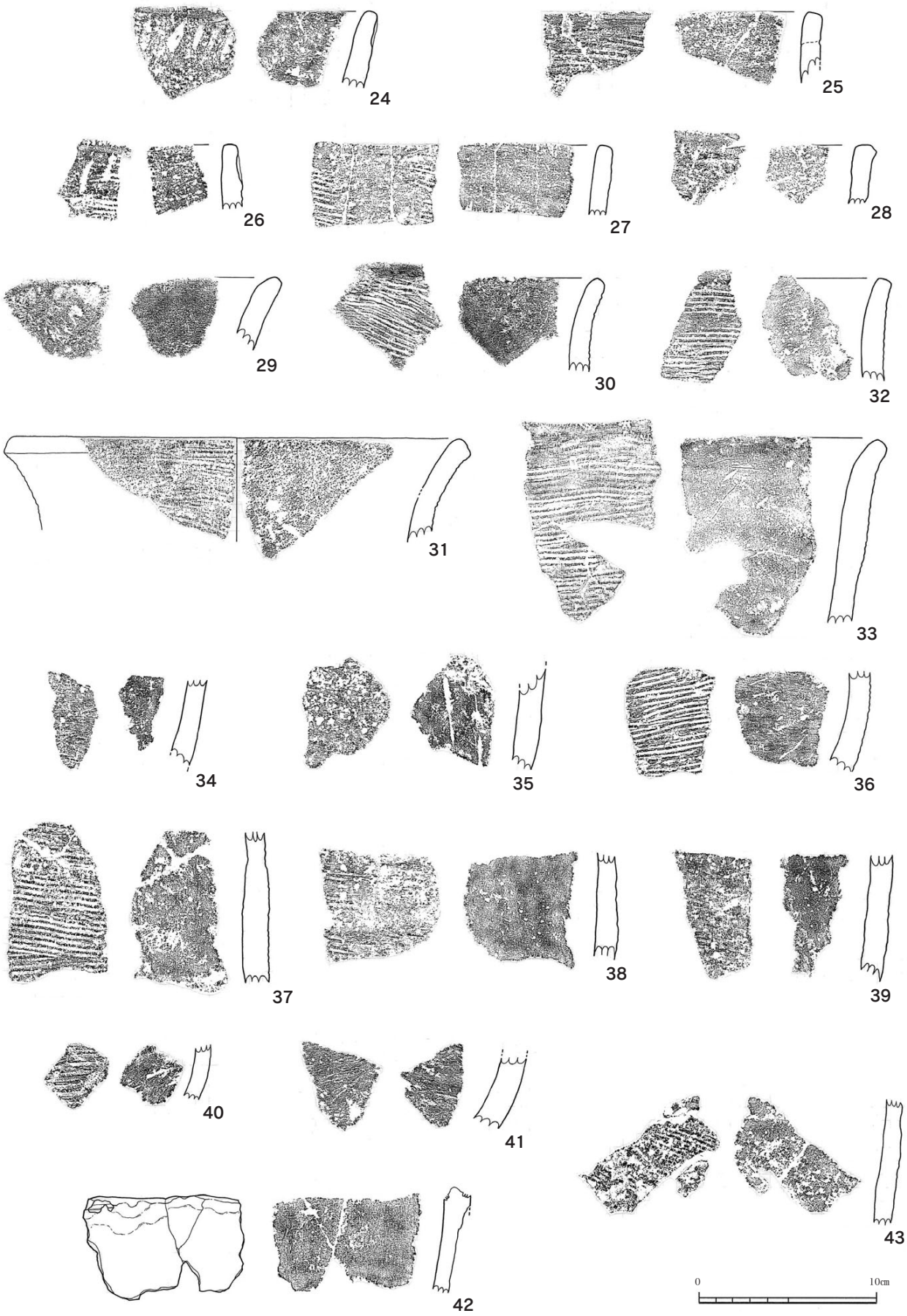
本遺跡においては、押型文土器はわずかに２点のみの出土である。文様により２種に分けた。

Ｃ－ａ　楕円押型文

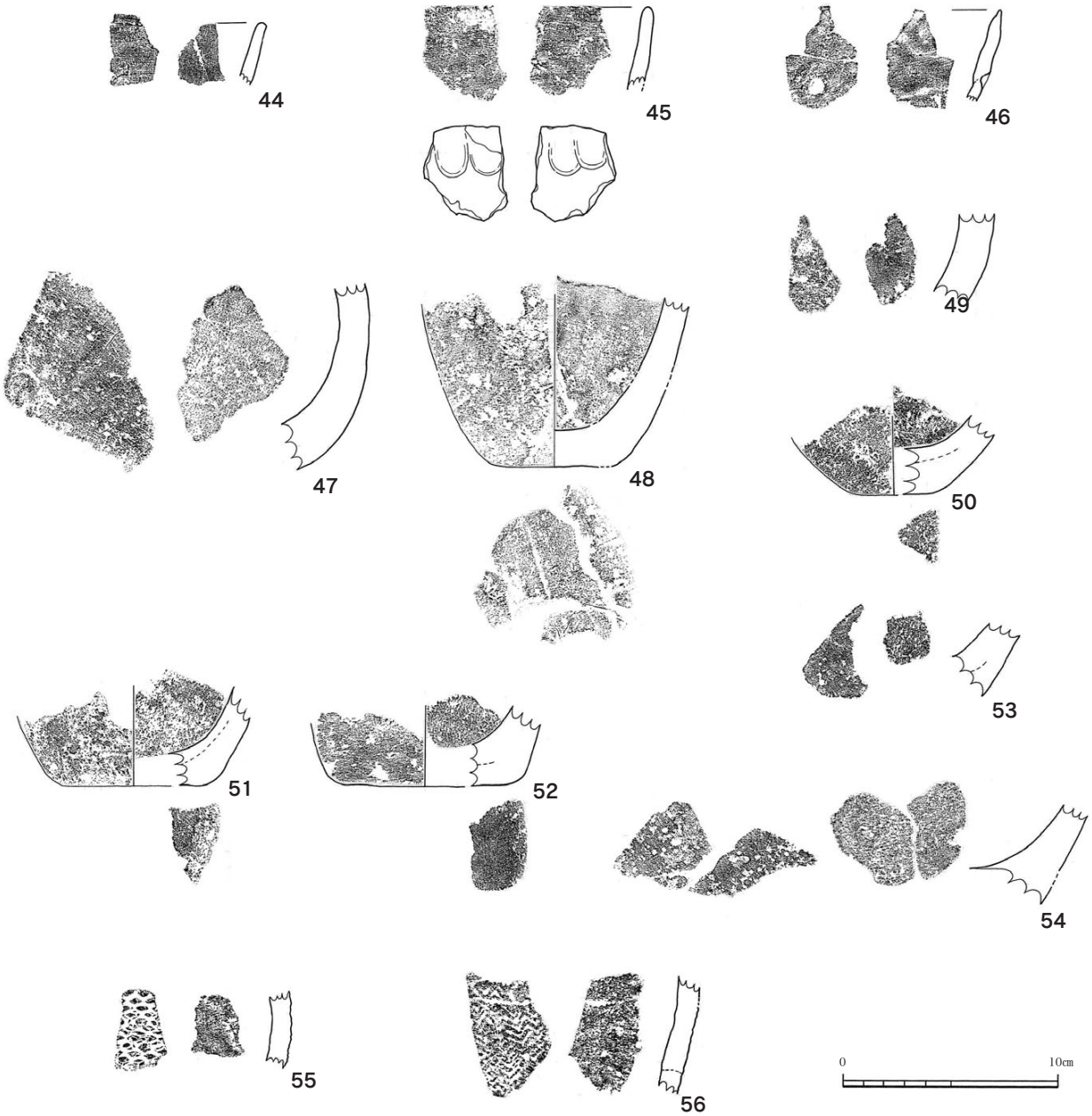
５５は深鉢の胴部である。長径５ｍｍ程度の楕円の押型文を横位に施している。内面はナデ調整を施しているが、風化気味である。

Ｃ－ｂ　山形押型文

５６は深鉢の胴部である。内外面ともナデ調整で、外面には横位の山形文を施しているが、風化している。



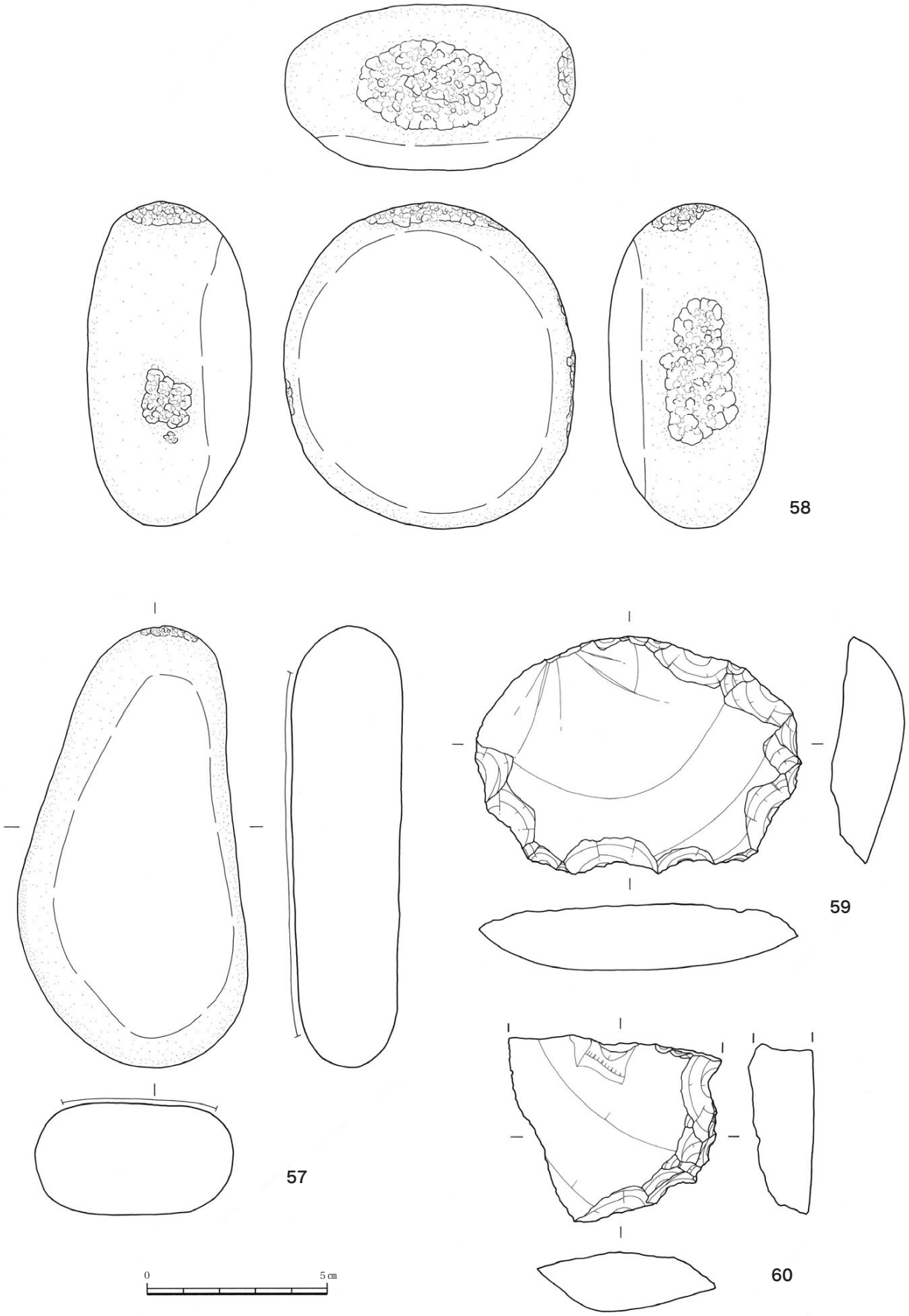
【第１０図　縄文時代土器実測図②　Ｓ＝１／３】



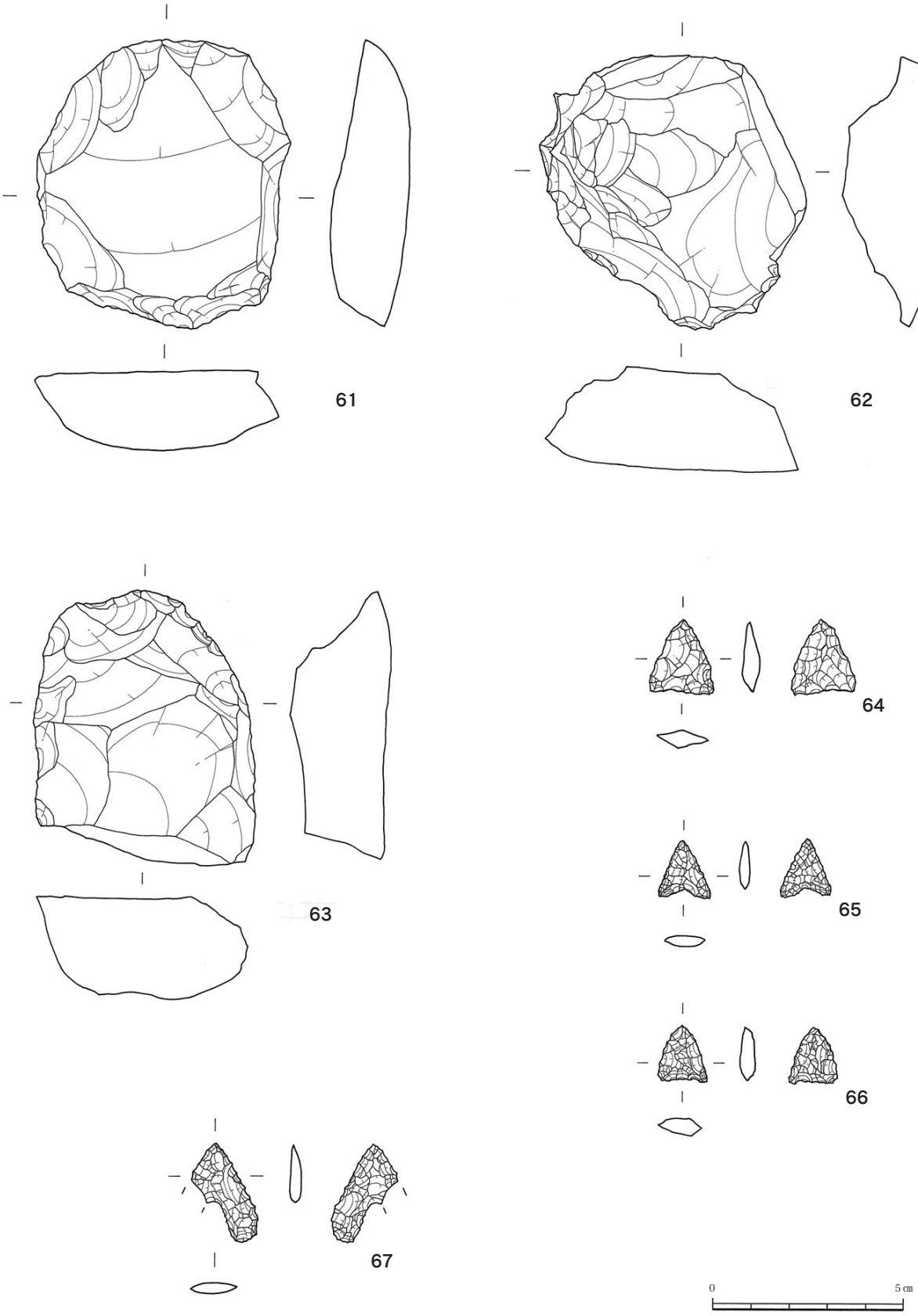
【第１１図　縄文時代土器実測図③　Ｓ＝１／３】

イ　石器【第１２、１３図】

５７、５８は砂岩製の敲石である。５７は上下部にわずかに敲打痕を残す。５８は上部と右側辺部に敲打痕を残す。５９、６０はともに尾鈴山酸性岩類のスクレイパーである。５９は片面に自然面も残し、両側辺下部、下部に刃部加工を施す。６０も片面が自然面であり、右側辺、下部に刃部加工を施す。６１～６３はホルンフェルス製の石核である。６１は下部および側辺に、６２は左側辺にそれぞれ加工痕を残す。６３は右上半部および左側縁に加工痕を残す。６４～６７は打製石鏃である。６４は風化が著しく刃部は識別困難である。６５は抉りが入り、両側辺は細かく刃部を施す。６６は桑ノ木津留産黒曜石製で左側辺は中央に比較的大きめの打痕を入れたあと、こまめに調整が行われている。左下は欠損。６７は腰岳産黒曜石製で右側辺の約２／３を欠損している。左側辺は約５mm間隔で丁寧に刃部を施している。基部には大きな抉りが入る。



【第１２図　縄文時代石器実測図①　Ｓ＝２／３】



【第１３図　縄文時代石器実測図②　Ｓ＝２／３】

第３節　弥生時代の調査

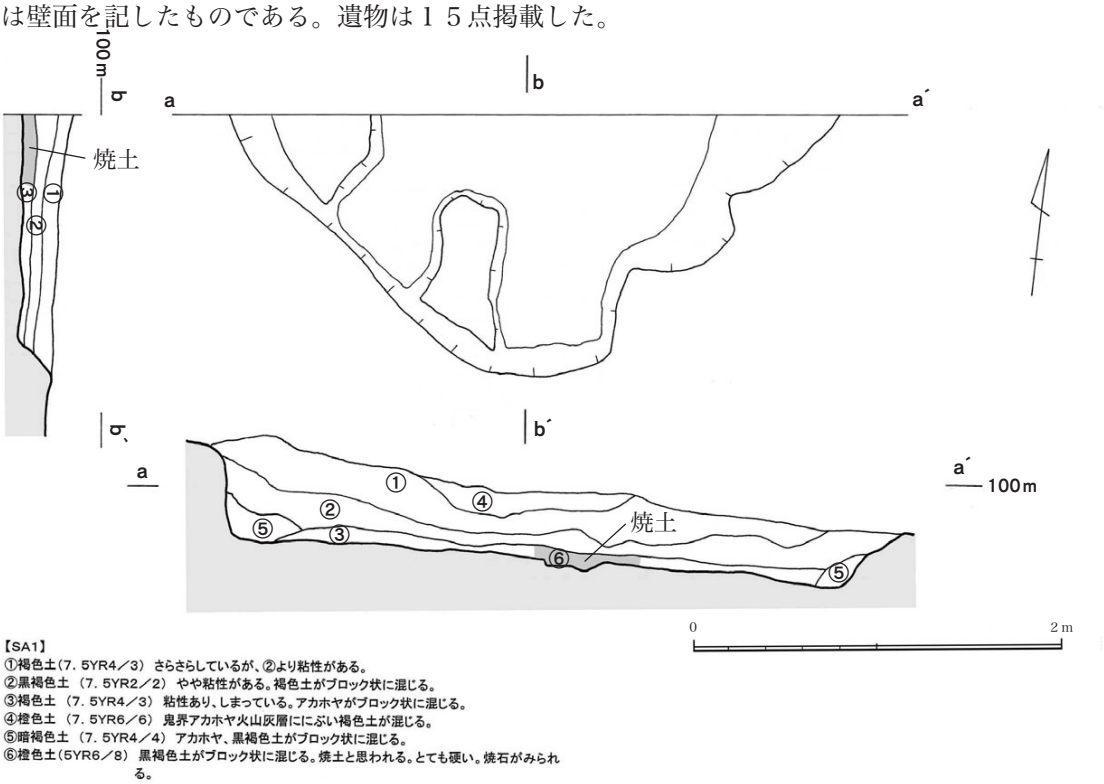
第Ⅲ層アカホヤ火山灰層上面での検出により、弥生時代の６軒の竪穴住居跡と３基の土坑を確認した。

１　遺構および遺物

（１）竪穴住居跡

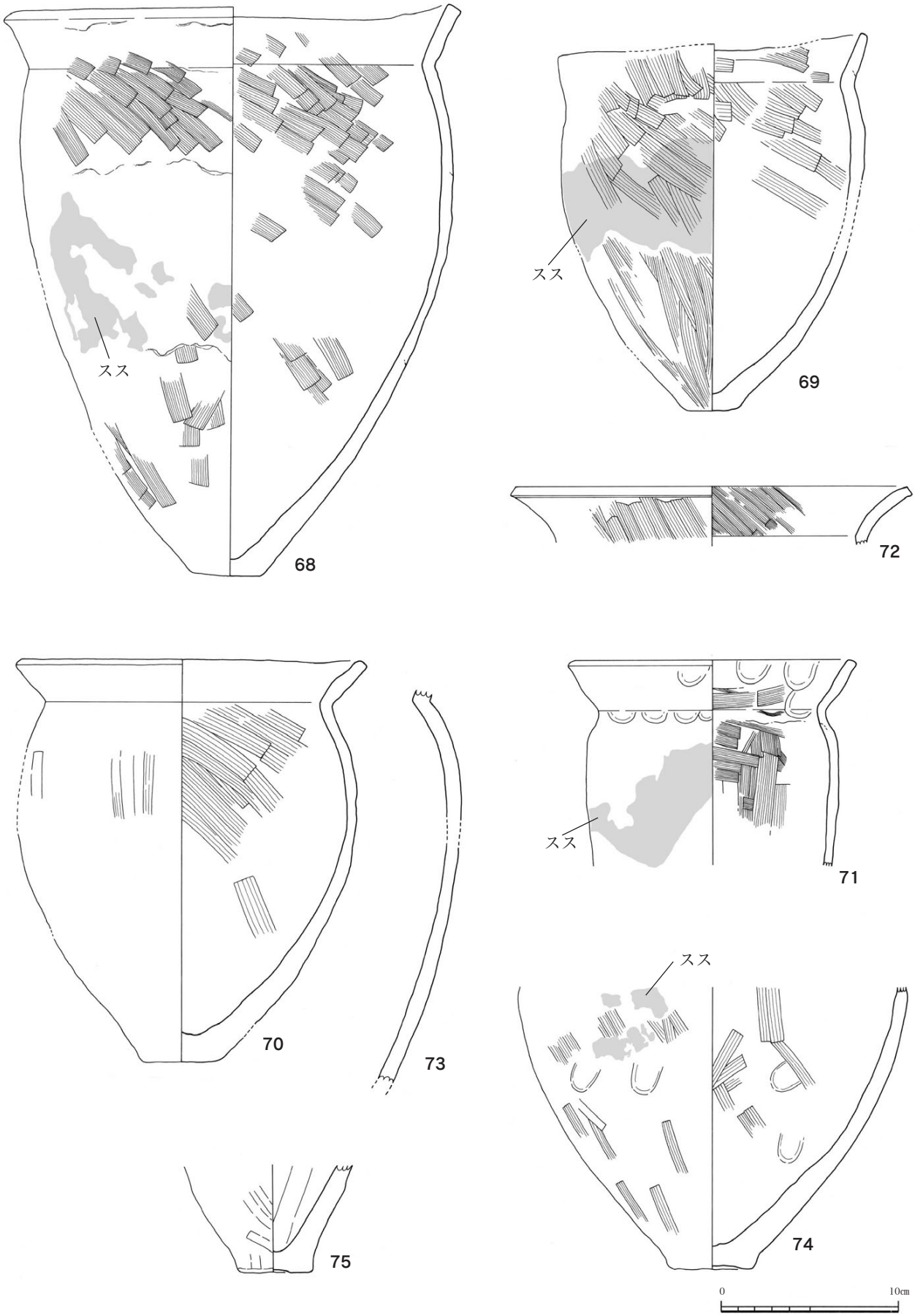
１号竪穴住居跡と出土遺物

この住居跡は、調査区北側Ａ３グリッドの壁際にて一部を検出した。全容は不明だが、一辺約２.５ｍの方形プランを基調とする。竹根、重機の削平などによって検出面から床面までの深さは約６ｃｍであるが、壁面から推察すると、少なくとも３０ｃｍ～４０ｃｍの深さが考えられる。柱穴は確認できなかった。検出された床面の面積は約２㎡である。また、南側と西側に突出部が検出された。南側は北に向けて突出する。西側は調査区壁によって切られるが、面積約０.２㎡で東に向けて突出する。なお、土層断面は壁面を記したものである。遺物は１５点掲載した。

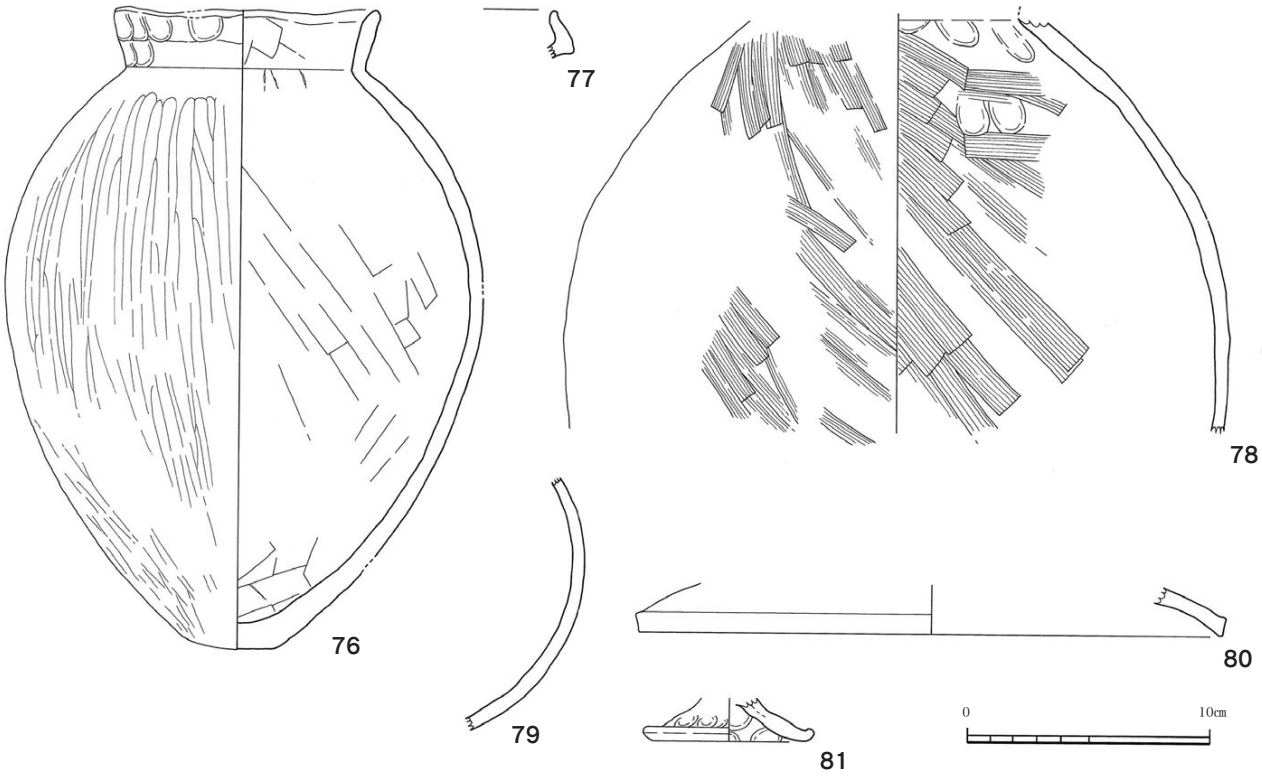


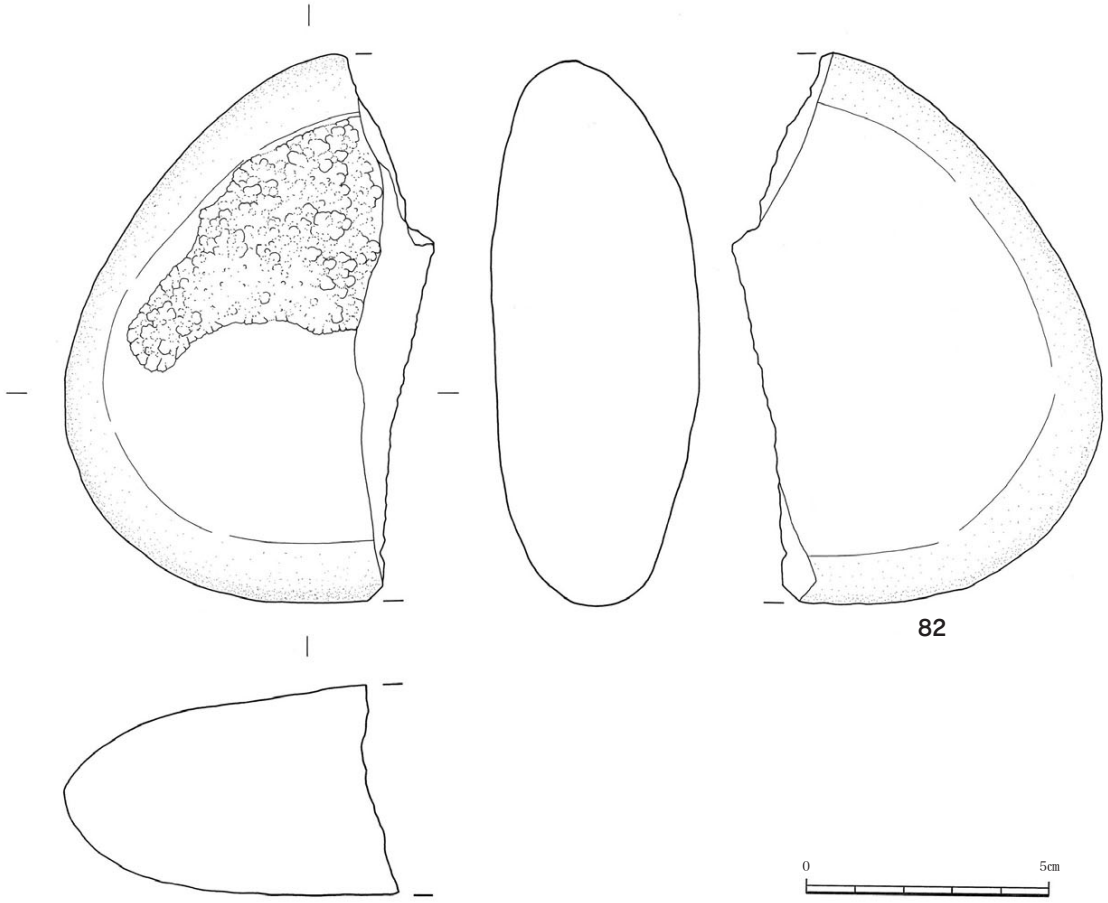
【第１４図　１号竪穴住居跡実測図　Ｓ＝１／４０】

６８～７５は甕である。６８は器高約３２ｃｍ、口径と胴部最大径はほぼ同じ径（約２４.３ｃｍ）である。口縁部は「く」の字口縁で内面に明確な稜をなす。底部は平底で、緩やかに立ち上がる。内外面とも主に斜め方向にハケ目調整を施す。外面にはススも付着する。ＳＡ４の土器片と接合している。６９は器高約２１ｃｍ、推定口径約１７ｃｍを測る。口縁部は「く」の字口縁でゆるやかに外反し、口唇部は面を成形する。胴部はあまり張らない。底部は平底で、ゆるやかに立ち上がる。調整は、内外面とも口縁部から胴部中位にかけて斜め方向のハケ目を、胴部中位から底部までは縦方向のハケ目を施す。７０は器高約２２.５ｃｍ、推定口径約１９ｃｍである。口縁部は「く」の字口縁で胴部はやや張りをもつ。口唇部は面を成形する。調整は外面が縦方向にハケ目、内面は斜め方向にハケ目を施しているが、風化が著しい。口縁部から胴部下位に至るまでススが付着する。７１は推定口径が約１５ｃｍ、口縁部はゆるやかな「く」の字口縁で、張りのない胴部へと続く。胴部は径約１４ｃｍで口径がやや広くなる。



【第１５図　１号竪穴住居跡出土遺物実測図①　Ｓ＝１／３】



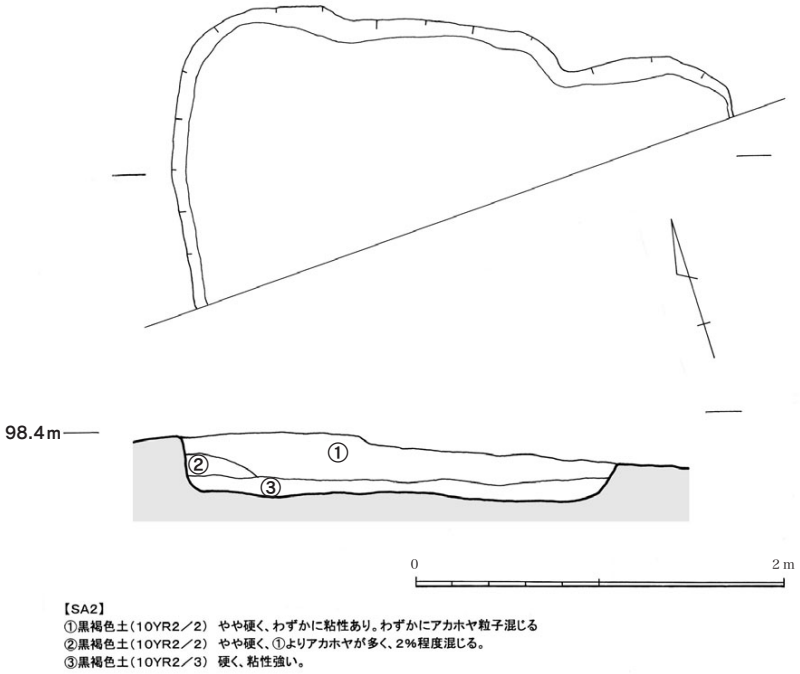


【第１６図　１号竪穴住居跡出土遺物実測図②　Ｓ＝１／３（７６～８１）　Ｓ＝２／３（８２)】

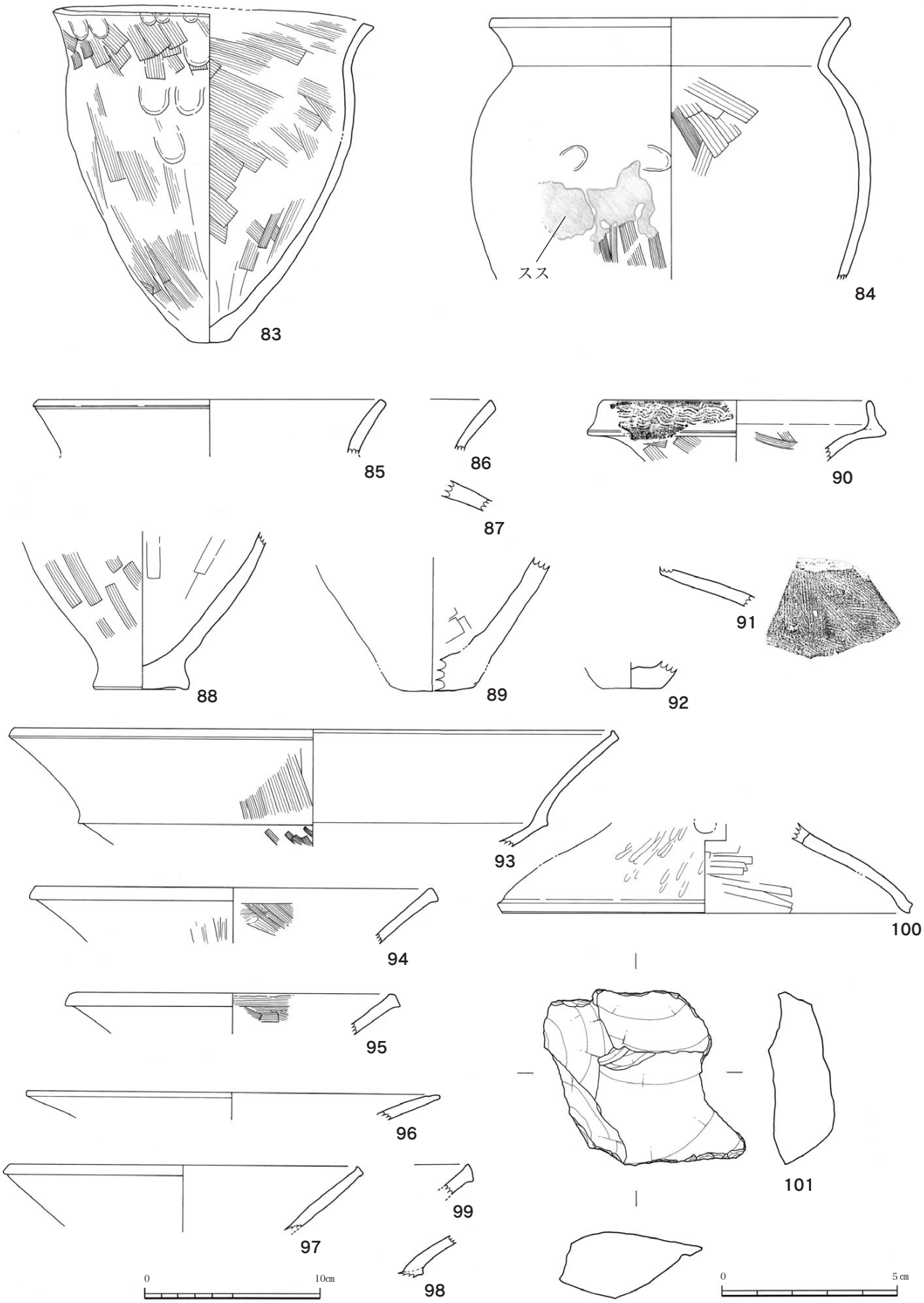
口唇部は面を成形する。内外面ともナデ調整を施し、指押さえの痕も明瞭である。７２は口縁部破片で、推定口径約２２ｃｍで大きく外反する。口唇部は面を成形する。内外面とも斜め方向にハケ目調整を施す。７３は頸部～胴部付近の破片である。調整は、外面が胴部上位は斜め方向に、底部付近は縦方向にハケ目を施し、内面は丁寧なナデを施す。胴部中位から下位にかけてススが付着する。７４は胴部～底部の破片。胴部上位は欠損するが、中位はやや張るようである。底部はわずかに上げ底となる。内外面は縦、斜め方向のハケ目調整を施す。ススの付着がみられる。７５は底部片である。内外面とも調整は明らかではないが、工具痕が認められる。平底を呈する。７６～７９は壺。７６は器高約２６ｃｍ、推定口径約１０.７ｃｍ、胴部最大径は胴部中位のやや上方にあり、約１９.５ｃｍである。口縁部はわずかに外反し、口唇部は丸みを帯びる。指押さえの痕が明瞭である。調整は外面が斜め方向のナデ、縦方向のミガキが施され、内面は斜め方向のナデが施される。底部はミガキもしくは丁寧なナデ調整でゆるやかに立ち上がる。７７は口縁部破片で、複合口縁をもつ。外面には櫛描波状文を施す。７８は頸部～胴部の破片である。胴部の最大径は中位にあり、約２７ｃｍを測る。内外面とも斜め方向にハケ目調整を施す。外面にはススも付着する。７９は小型の壺の胴部片である。外面は横、斜め方向にハケ目を施し、内面は丁寧なナデ調整を施す。８０は高坏の脚・裾部片である。推定裾部径は約２４ｃｍを測る。外面は丁寧なナデ、内面はハケ目調整を施す。端部は横方向のナデ調整を施して面を成形する。８１は小型手づくね土器の脚部である。内外面とも指押さえの痕が残る。８２は砂岩製の敲石で、上位半分を作業面として使用している。

２号竪穴住居跡と出土遺物

この住居跡は、調査区の中央部付近に位置する。重機や竹根等の削平を受けており、南側半分は検出不可能であった。住居跡北側のみの確認だが、一辺約３ｍで、検出面からの深さは約３０ｃｍである。



【第１７図　２号竪穴住居跡実測図　Ｓ＝１／４０】



【第１８図　２号竪穴住居跡出土遺物実測図　Ｓ＝１／３（８３～１００）Ｓ＝２／３（１０１）】

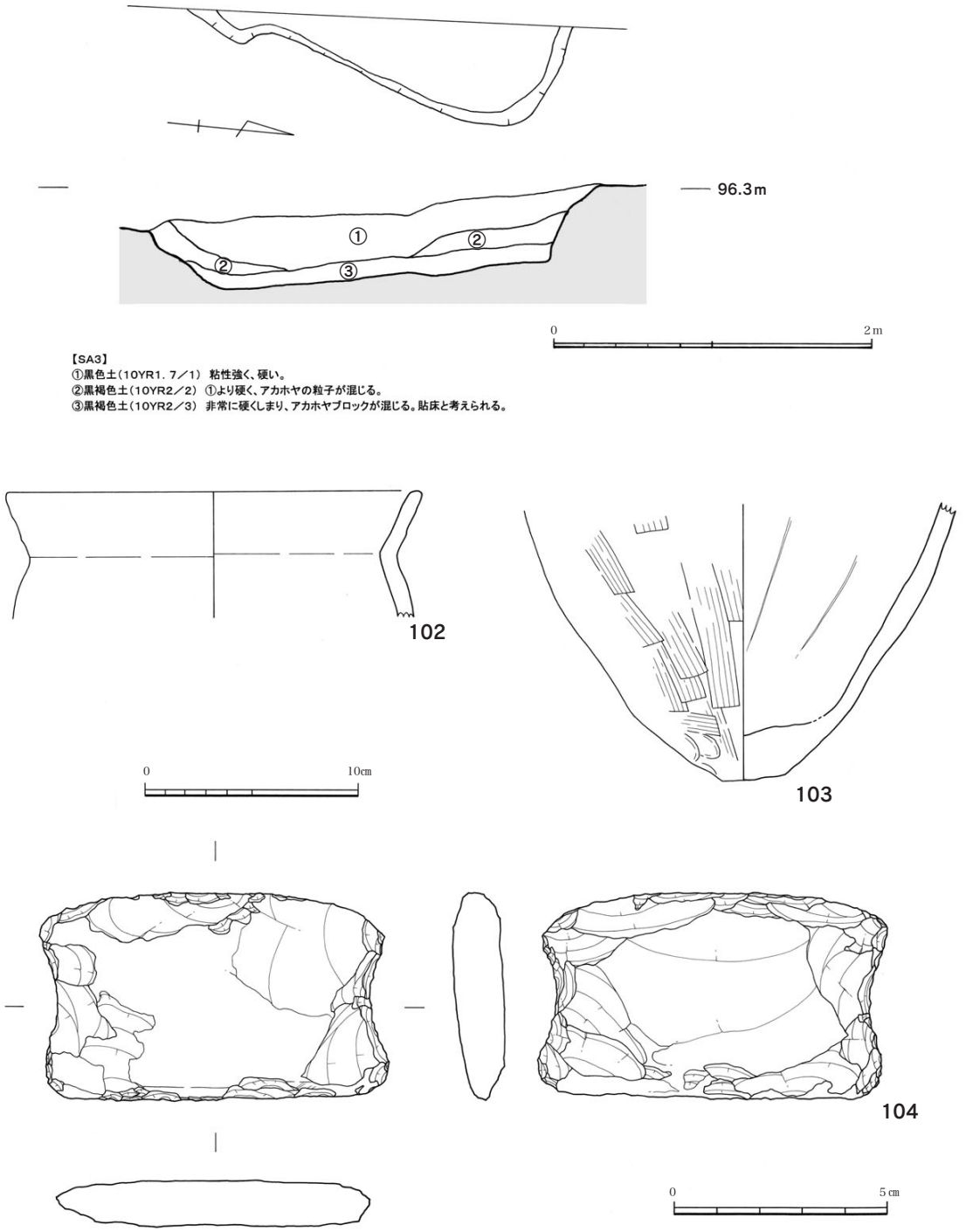
検出した部分の床面積は約２.５㎡である。遺物は１９点を掲載した。

８３～８９は甕。８３は器高約１９ｃｍ、口径約１７.３ｃｍである。ほぼ完形となった。口縁部はゆるやかに外反し、口唇部は面を成形するものの、外方をつまみ上げている。胴部はわずかに張る。底部径は約２.４ｃｍで平底である。内外面とも斜め方向にハケ目調整を施す。外面にはススも付着する。８４は口縁部～胴部の破片で、推定口径は約２０.４ｃｍを測る。口縁部は「く」の字口縁を呈し、口唇部はやや丸みを帯びる。胴部が最大径となり、約２３ｃｍを測る。内外面とも縦、斜め、横方向にハケ目調整を施す。胴部外面はススも付着する。８５はゆるやかに外反する口縁部の破片である。推定口径は約１９.４ｃｍを測る。口唇部は面を成形し、内外面とも丁寧なナデまたはハケ目調整を施す。８６もゆるやかに外反する口縁部の破片である。口唇部は面を成形する。外面は斜め方向に内面は横方向にハケ目調整を施す。８７は胴部破片である。外面に縦方向のハケ目、内面にはナデ調整を施しているが、風化が著しい。８８は胴部～底部の破片で、推定底部径は約５.３ｃｍを測る。底端部は丸みを帯びて外方に向かう。わずかに上げ底気味である。外面は縦方向のハケ目、内面は縦方向のナデ調整がみられるが、風化が著しい。８９は底部の破片である。推定底部径は４.７ｃｍを測り、平底である。端部はやや丸みを帯びる。内外面とも工具痕が認められるが、風化が著しく調整は不明である。９０は複合口縁壺の口縁部である。推定口径は１５ｃｍを測る。大きく外反したあと、逆「く」の字状に内傾する。口唇端部は丸みを帯び、外面には櫛描波状文を施す。内面は横方向のナデ調整である。９１は壺の頸部～胴部の破片である。外面は縦、斜め方向にハケ目を、内面には丁寧なナデ調整を施す。指押さえの痕も残る。９２は壺の底部破片である。底径は約３.２ｃｍを測る。内面はナデ調整を施し、指押さえの痕も残るが、外面は風化が著しく調整は不明である。９３～９９は高坏の坏部破片である。９３の破片は推定口径が約３４ｃｍを測り、大きく外反しながら開く口縁部で、口唇部はハケ目調整を施して面を成形する。端部内面側を内側につまみ出す。外面は縦、横、斜め方向にハケ目調整を施すが、屈折部から上部は丁寧なナデ調整となる。内面は丁寧なナデ調整を施す。９４の破片は推定口径約２２.６ｃｍを測り、口唇部にハケ目、外面は縦方向のハケ目、内面は丁寧な横方向のナデ、斜め方向のハケ目調整を施す。９５の破片は推定口径約１８.５ｃｍを測り、口唇部は斜め方向のハケ目調整を施して面を成形する。外面は丁寧なナデ、内面は横方向のハケ目調整である。９６の破片は推定口径約２３.４ｃｍで、口縁端部が丸みを帯びる。内外面ともナデ調整を施す。９７の破片は推定口径約１９.８ｃｍを測る。口唇部は丁寧なナデ調整を施して面をなす。外面は縦、横、斜め方向にハケ目を内面には縦方向にハケ目調整を施す。９８は屈曲部分で、外内面ともハケ目調整を施す。９９の破片は屈折部分で、内外面ともハケ目調整を施す。１００は高坏の脚裾部である。推定底径は約２３.１ｃｍを測り、径約１ｃｍの円形透かしが入る。外面は縦方向のミガキ、内面はハケ目調整を施す。１０１はホルンフェルス製の剥片である。住居埋土中からの出土であるが、下層の遺物とも考えられる。

３号竪穴住居跡と出土遺物

この住居跡は調査区南側（Ｃ８グリッド）に位置する。ほとんどが調査区外に存在し、一部のみ検出した。壁面の土層から、約４０ｃｍの深さをもつ方形プランを基調とする住居跡であると推察される。検出した部分の床面積は０.７㎡である。

遺物は３点を掲載した。１０２は甕の口縁～頸部の破片で、口径が約１９.２ｃｍ、ゆるやかな「く」

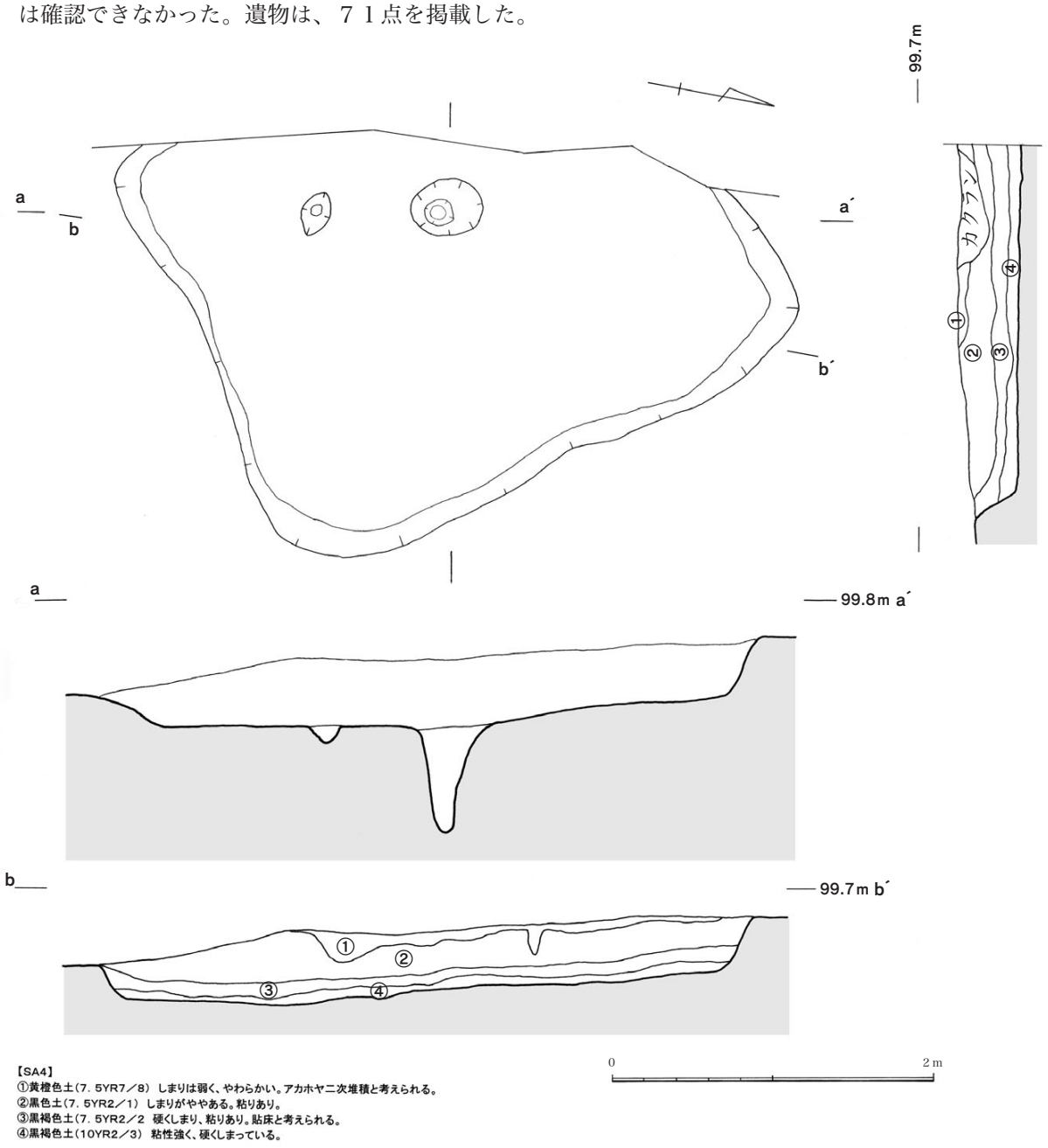


【第１９図　３号竪穴住居跡実測図　Ｓ＝１／４０　出土遺物実測図　Ｓ＝１／３（１０２　１０３）Ｓ＝２／３（１０４）】

の字口縁で、口唇部は横方向のナデ調整を施して面を形成する。内面は横方向のハケ目、斜め方向のナデ調整を施す。１０３は甕の胴部～底部の破片である。１０２と同一個体と考えられる。底径約３ｃｍの平底だがやや粗い作りで安定性を欠く。外面は縦方向のハケ目、内面はナデ調整のあとに縦方向の工具痕が残る。１０４はホルンフェルス製の石庖丁である。両端部に抉りが入る。刃部は片刃で、背部はわずかに湾曲する。

４号竪穴住居跡と出土遺物

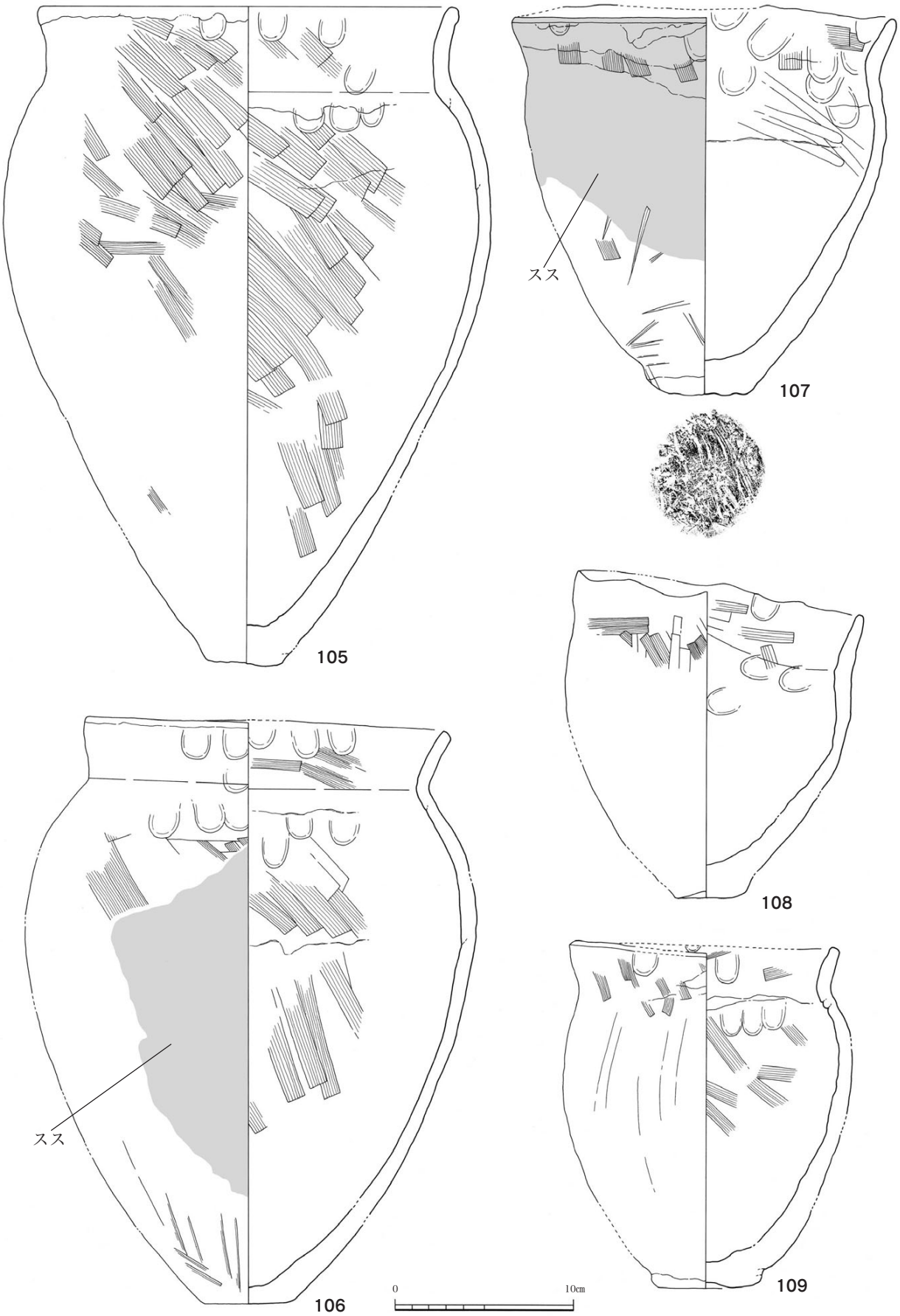
この住居跡は調査区北側Ｂ１グリッド付近に位置し、一部が調査区外に存在する。長辺約３.６ｍ、短辺約３ｍの方形プランを基調とする。検出された床面の面積は約６.６㎡である。検出面からの深さは約３０ｃｍを測る。柱穴は２個確認できたが、径約３０～５０ｃｍ、深さは約２０～６０ｃｍで、その他は確認できなかった。遺物は、７１点を掲載した。



【第２０図　４号竪穴住居跡実測図　Ｓ＝１／４０】

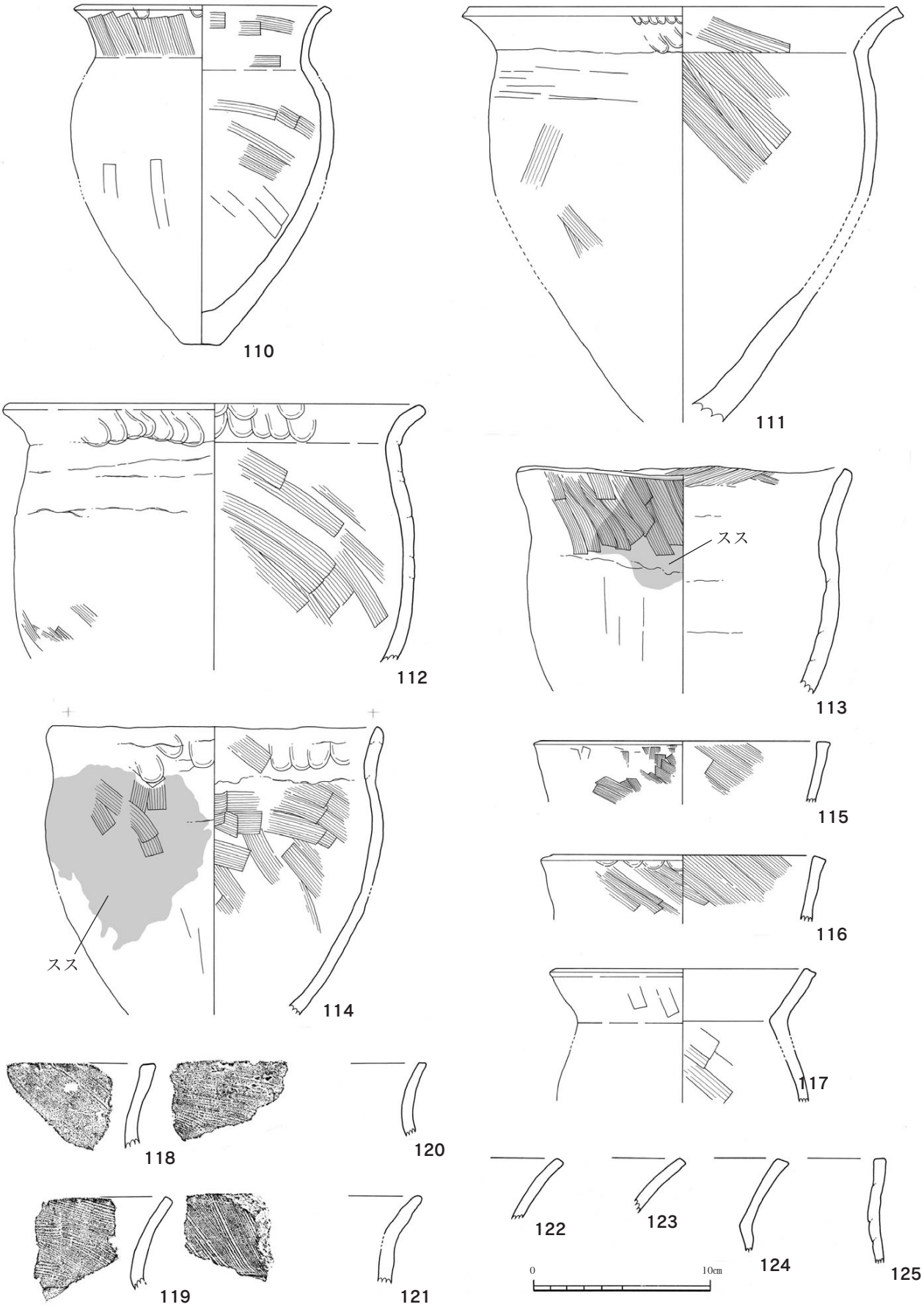
１０５～１３９は甕である。１０５はほぼ完形である。器高約３６.６ｃｍ、推定口径約２２.６ｃｍ、底径約４.２ｃｍを測る。口縁部はわずかに外反し、口唇部は丸みを帯びる。内外面とも斜め方向のハケ目調整を施すが、風化により不鮮明である。胴部はやや張りをもち、胴部上位に最大径を測る。底部は平底を呈する。１０６は器高約３２.７ｃｍ、口径約１９.８ｃｍ、底径約５.１ｃｍを測る。口縁部はゆ

るやかに外反する「く」の字口縁で、口唇部はやや丸みを帯びる。内外面とも斜め方向のハケ目調整を施す。口縁部、頸部には指押さえの痕も認められる。外面にはススが付着する。底部は平底を呈する。１０７は器高約２１.６ｃｍ、口径約２１ｃｍ、底径約５.５ｃｍを測る。口縁部はゆるやかに外反し、口唇部はすぼまる。内外面ともハケ目調整を施す。口縁部には指押さえの痕、胴部には工具の痕などが認められる。口縁部から胴部中位にかけてススが付着する。底部は基本的に平底と考えられるが、指押さえの痕が明瞭で、粗い仕上げとなっている。１０８は器高約１８.２ｃｍ、口径約１５.６ｃｍ、底径約３.９ｃｍを測る。口縁部はほぼ直行し、口唇部はすぼまる。内外面ともに、指押さえの痕が残り、横、斜め方向のハケ目調整を施すが、風化気味である。底部は平底を呈するが、底部を据えてみると、口縁部から胴部にかけて傾いた形状を呈する。１０９は器高約１９.２ｃｍ、口径約１４.３ｃｍ、底径約５.７ｃｍを測る。口縁部はわずかに外反し、口唇部は面を成形する。外面は縦方向にナデ、内面はハケ目調整を施す。指押さえの痕も認められる。底部はやや脚台状であるが、粗い仕上げのため凹凸が著しい。１１０は器高約１８.９ｃｍ、推定口径約１３.６ｃｍ、底径約２.１ｃｍを測る。口縁部はやや内湾したのち、ゆるやかに外反する。口唇部はほぼ面を成形するが、端部をつまみ、外方に向ける。胴部はやや張りをもち、胴部上位に最大径を測る。外面は縦方向のナデまたはミガキを、内面は、口縁部で横方向、胴部から底部で斜め方向にハケ目調整を施す。底部は平底を呈し、やや厚みがある。１１１は口縁部から胴部の破片で、口径約２４ｃｍを測る。大きく外反する口縁部で、口唇部は平坦だが、端部を指でつまみ、外方へ向ける。内外面は横、斜め方向のハケ目調整を施す。１１２は口縁部から胴部の破片で、推定口径約２３ｃｍを測る。大きく外反する口縁部で、口唇部端部を丸く仕上げる。口縁部の内外面とも指押さえの痕が認められる。胴部の内外面は斜め方向のハケ目調整を施すが、調整は粗く粘土紐のつなぎもみられる。ススの付着もみられる。１１３は口縁部から胴部の破片である。口縁部はわずかに外反する。口縁部と頸部の境は明瞭ではない。口唇部は面を成形するが粗い。外面は、口縁部が斜め方向のハケ目、胴部は縦方向のナデ調整を施し、ススも付着する。内面はナデ調整を施す。１１４は口縁部から胴部の破片である。推定口径は約１８.４ｃｍで口縁部はわずかに内湾する。口唇部は丸く仕上げる。口縁部と頸部の境は明瞭ではなく、胴部は最大径で約１８.９ｃｍを測り、上位に最大径をもつ。内外面に指押さえの痕が認められ、横、斜め方向のハケ目調整を施す。ススの付着もみられる。１１５は口縁部の破片である。推定口径は約１５.８ｃｍを測る。口縁部はほぼ直行し、口唇部はハケ目調整を施して面を成形するが、口唇端部をわずかに外方につまむ。内外面ともに縦、斜め方向のハケ目調整を施す。１１６は口縁部の破片である。推定口径は約１４.６ｃｍを測る。口縁部はほぼ直行し、口唇部はハケ目調整を施して面をなすが、口唇端部をわずかに外方につまむ。内外面ともに斜め方向のハケ目調整を施す。１１７は口縁部から頸部の破片である。推定口径は約１５ｃｍである。口縁部は「く」の字に外反する。口唇部は内面側が丸みを帯び、外面側はつまんで外方に向ける。内外面はわずかにハケ目調整が残る。１１８は口縁部の破片である。わずかに外反する。口唇部は平坦であるが、面をつくるために粘土が押しつぶされて内面側がふくらみをもつ。１１９は口縁部の破片である。わずかに外反し、口唇部は面を成形する。内外面とも斜め方向にハケ目調整を施す。外面にはススが付着する。１２０は口縁部の破片である。わずかに外反し、口唇部は面を成形する。内外面とも風化により調整が不明である。１２１は口縁部の破片である。口縁部分は短めでやや強く外反する。口唇部は丸みを帯びる。外面は縦、内面は横方向のハケ目調整を施し、頸部には指押さえの痕を残す。



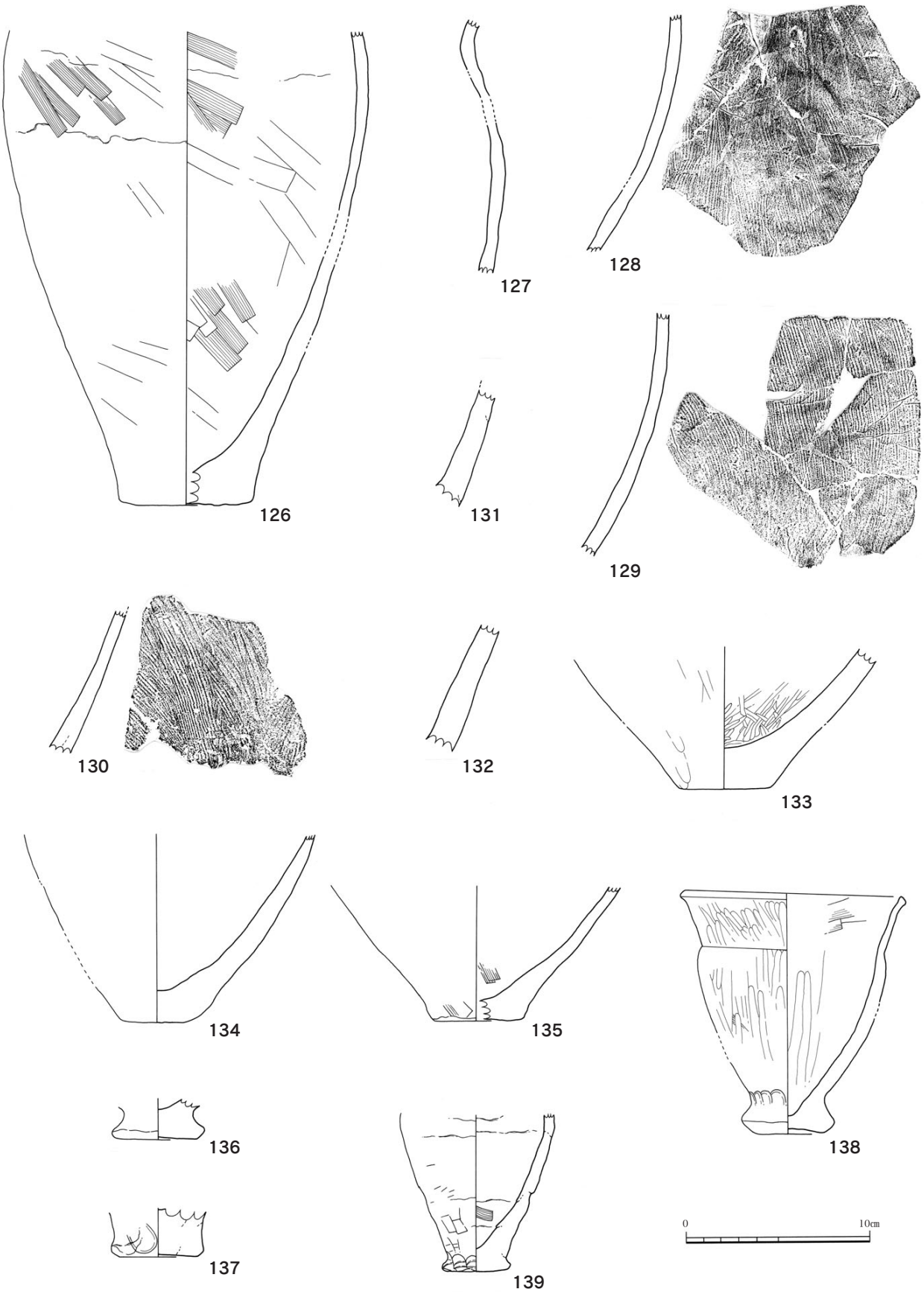
【第２１図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図①　Ｓ＝１／３】

１２２は口縁部の破片である。やや強めに外反し、口唇部は面を成形する。外面はハケ目、内面はミガキ調整を施す。１２３は口縁部破片である。やや強めに外反し、口唇部は面をなす。内外面とも風化が著しく、調整は不明。外面は指押さえの痕が認められる。１２４は口縁部破片で、外反する。口唇部は面を成形するが、端部をわずかにつまみ、外方に向ける。内外面は斜め方向のハケ目調整を施す。１２５は口縁部から頸部の破片である。頸部でわずかに内湾し、口縁部はほぼ直行する。口唇部は面を成形する。外面は縦方向のハケ目、内面は斜め方向のハケ目調整を施すが、全体的に風化する。１２６は頸部から底部の破片である。胴部最大径は約１９.８ｃｍ、底径７.３ｃｍを測る。内外面とも斜め方向のハケ目やナデ調整を施し、粘土紐のつなぎも認められる。底部は平底で、端部はやや丸みを帯びて上方に向く。１２７は頸部から胴部の破片である。内外面は、ハケ目やナデ調整を施す。１２８、１２９は胴部の破片である。どちらも外面上部は縦・斜め方向のハケ目、下部は工具によるナデ調整を施し、ススが付着する。内面は、斜め方向のナデ調整を施す。同一個体の可能性が考えられる。１３０は胴部の破片である。外面は縦・斜め方向、内面は斜め方向のハケ目調整を施す。１３１は胴部の破片である。内外面等ナデ調整を施す。１３２は底部付近の破片である。外面は縦方向のハケ目、内面は一部ハケ目調整が残る。１３３は胴部から底部の破片である。平底で推定底径は約５ｃｍを測る。外面は風化しており、縦方向のミガキ調整や丁寧なナデ調整を施すが、わずかに残るのみである。内面は丁寧な縦方向のナデ調整のあとミガキを施す。１３４は胴部から底部の破片である。底部は平底で底径は約４ｃｍである。端部はやや丸みを帯び、ゆるやかに立ち上がる。外面は縦方向のヘラケズリを、内面はナデ調整を施すが、いずれも風化が著しい。１３５は胴部から底部の破片である。底部は平底でわずかに上げ底気味となる。端部はやや丸みを帯びる。１３６は底部の破片である。平底で底径は約４.５ｃｍを測る。端部は突出気味につまみだし、脚台状を呈する。内外面ともナデ調整を施す。１３７は底部の破片である。底径は約４.３ｃｍを測り、平底を呈する。端部をわずかに外方につまみだす。指押さえの痕も認められるが、粗い仕上げで風化も著しい。１３８は小型の甕である。器高約１３ｃｍ、最大径は推定口径で約１１.７ｃｍ、胴部径は約１０.３cmを測る。口縁部はわずかに外反し、口唇部は面を成形する。端部はわずかに外方につまみ出す。外面は縦方向のミガキ、内面は口縁部が横方向のハケ目、頸部から底部が縦方向のミガキ調整を施す。底部は平底で底径約４ｃｍ。端部は外方につまみ出し、脚台を呈する。１３９は小型の甕の胴部から底部の破片である。底径は３.４cmを測り、平底を呈する。端部は外方へつまみだす。指頭痕が鮮明に残る。内外面ともナデ調整で、工具痕が残る。１４０は口縁部の破片である。甕か壺のどちらかと考えられるが判別しがたい。口唇部は外面側をなめらかに丸く仕上げる。外面はナデ、内面は斜め方向のハケ目調整を施す。１４１～１４５は壺をまとめた。１４１、１４２は複合口縁部の破片である。１４１は風化が著しいが、横方向のハケ目調整のあと、かすかに櫛描文が残る。１４２は口縁部が大きく外反したあと内傾する。屈曲部は粘土のつなぎによりつまみだされ下垂する。口縁端部は上方につまみ出す。櫛描文はなく、内外面ともハケ目調整を施す。１４３は頸部の破片である。外面は横方向のナデ、内面は斜め方向のナデ調整を施す。１４４、１４５は底部である。１４４は推定底径５.８ｃｍを測る。外面はナデ、内面はハケ目調整を施す。１４５は推定底径４.８ｃｍを測り、内外面とも縦方向のミガキもしくはナデ調整を施す。１４６～１５０は鉢である。１４６は口縁部から底部の破片である。口径は１３.８ｃｍを測る。直行する口縁部で口唇部を丸く仕上げる。外面は粗いケズリを、内面は縦・斜め方向のハケ目調整を施す。底部は欠損部分が多く底径は測れなかった。

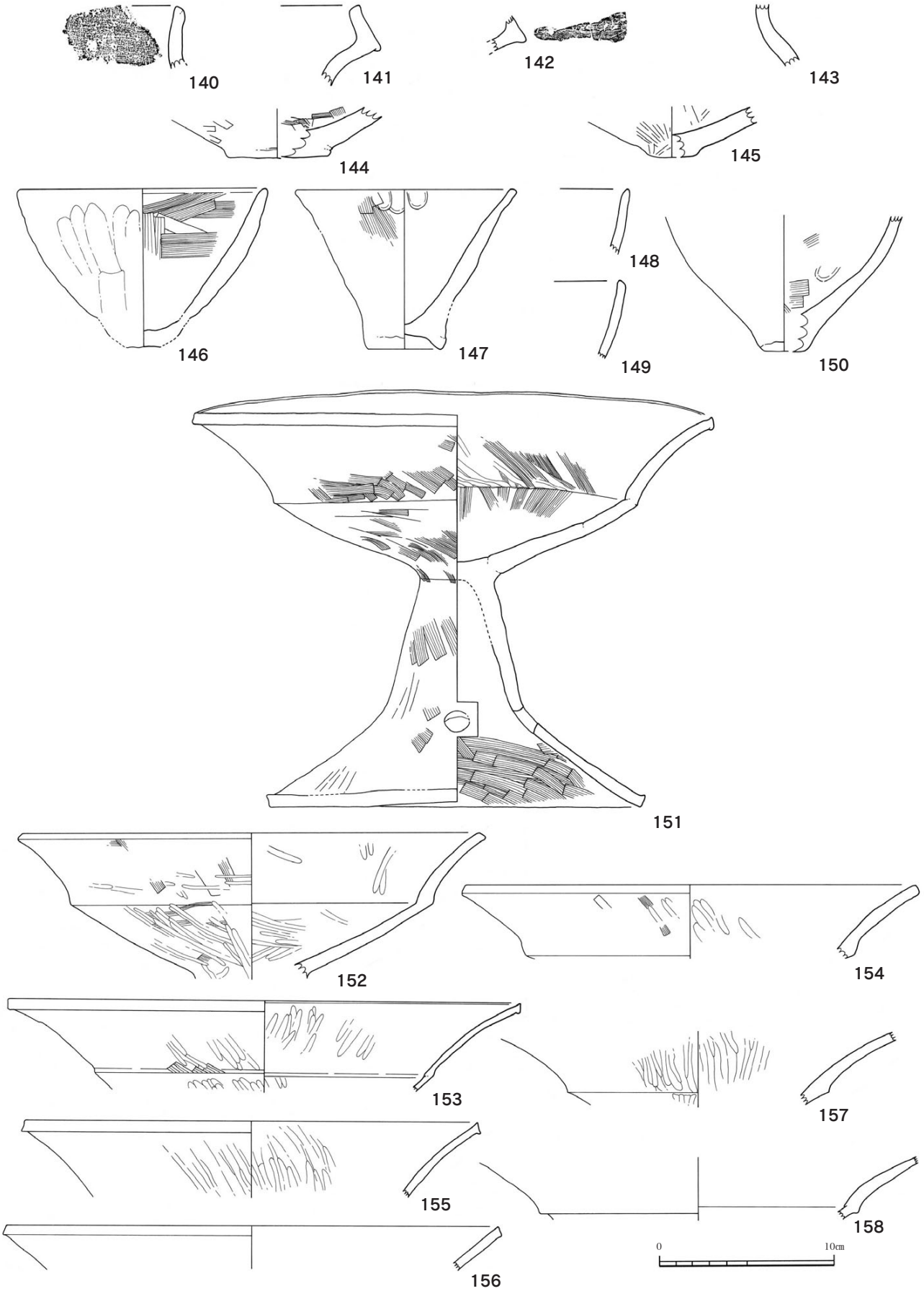


【第２２図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図②　Ｓ＝１／３】

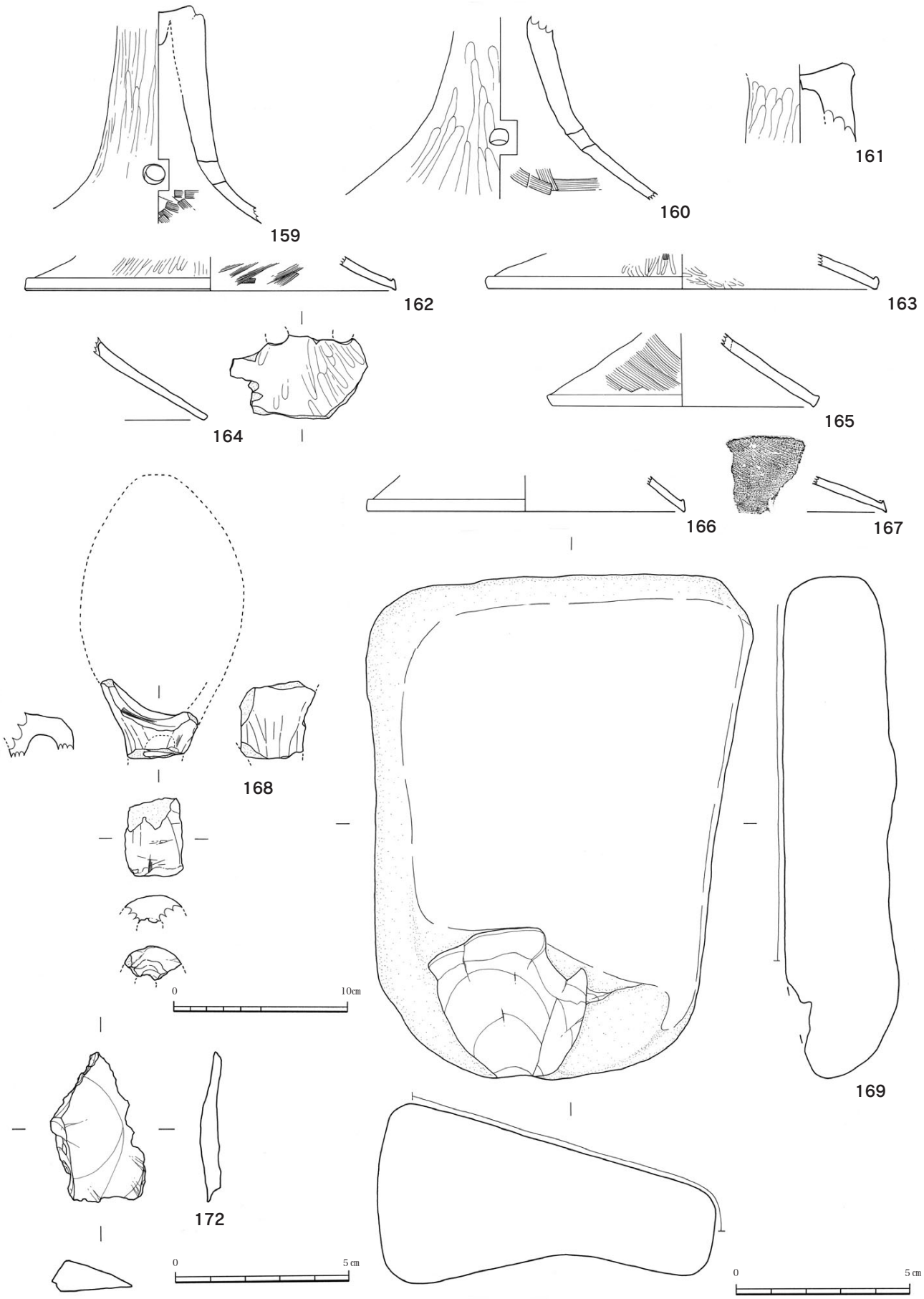
１４７は口縁から底部の破片である。直行する口縁部で口唇部はやや細く仕上げる。内外面とも風化が著しいが、斜め方向にハケ目調整を施す。底部はナデ調整を施し、上げ底を呈する。１４８は口縁部破片である。直行する口縁部で口唇部はすぼまる。外面は横・斜め方向にハケ目を、内面には丁寧なナデやハケ目調整を施し、指押さえの痕も認められる。１４９は口縁部破片である。わずかに内湾し、口唇部は先細る。外面は風化が著しく調整は不明。内面は横・斜め方向のハケ目調整を施す。１５０は胴部から底部の破片である。推定底径は約２.８ｃｍを測る。内外面とも風化や粗い仕上げのため調整はわかりづらい。一部にハケ目調整を残す。１５１～１６７は高坏をまとめた。１５１は器高約２３.８ｃｍ、口径２９.５ｃｍ、裾部径２１.２ｃｍを測る。坏部口縁部は大きく外反し、外面は横方向のナデ、内面はハケ目、ミガキ調整を施す。脚部はラッパ状に大きく外反し、脚外面は一部ハケ目調整がみられるが風化気味である。内面はナデや横・斜め方向のハケ目調整を施す。屈曲部に貫通した円形の透かしが入る。一部欠損しているが、間隔から推定して全部で４穴と考えられる。１５２～１５８は坏部の破片である。１５２は推定口径約２５.９ｃｍで、屈曲部からゆるやかに外反する。口唇部は面を成形する。外面はハケ目のあとミガキ、内面はミガキ調整を施す。１５３は他と比べて器壁が薄く、屈曲部から大きく外反する。口唇部はハケ目を施すことで面を成形する。内外面ともミガキを施す。１５４は屈曲部の器壁は厚く、口縁部はゆるやかに外反する。口唇部は面を成形する。内外面ともミガキを施す。１５５はゆるやかに外反する口縁部である。推定口径は約２５.８ｃｍを測る。口唇部は横方向のナデ調整を施して面を成形する。内外面ともミガキを施す。１５６は直行する口縁部で、推定口径は約２８ｃｍを測る。口唇部はナデ調整を施すことで面を成形する。内外面とも丁寧なナデ調整を施す。１５７、１５８は屈曲部から大きく外反する破片である。いずれも内外面にミガキ調整を施すが、１５８は全体的に風化が目立つ。１５９は脚部の破片で、裾部は欠損する。円盤充填法と考えられる。脚部外面は縦方向のミガキ、内面上半部はナデ、下半部は横・斜め方向のハケ目調整を施す。屈曲部には円形の透かしが４箇所認められる。１６０は脚部の破片で、裾部、接合部は欠損する。外面は縦方向のミガキ、内面は横、斜め方向のハケ目調整を施す。屈曲部に円形の透かしが４箇所認められる。１６１は脚部の破片である。受部はナデまたはミガキ、脚外面は縦方向のミガキ調整を施す。内面はナデ調整を施す。内面の天井部には径０.２ｍｍほどの未穿孔が認められる。１６２～１６７は脚部の裾部破片である。１６２の裾部は大きく外反し、端部は平坦に仕上げ、丁寧なナデ調整を施す。外面は縦方向のナデ、内面は斜め方向のハケ目調整を施す。１６３の破片は推定裾部径が約２２ｃｍを測る。裾部は大きく外反し、口唇部はナデ調整を施して面を成形するが上方がややふくらむ。内外面は主に縦方向のミガキ調整を施す。１６４の破片は大きく外反し、端部は平坦面を成形する。外面は縦方向のミガキ、内面は斜め方向のハケ目調整を施す。上端部は脚の屈曲部と考えられるが、円形透かしが２箇所認められる。間隔が約３.５ｃｍである。１６５の破片は推定裾部径約１５ｃｍを測り、端部は面を成形する。外面は横方向のナデ調整を縁に沿って施し、上部に斜め方向のハケ目、内面は丁寧なナデ調整を施す。１６６の破片は推定底径約１８.２ｃｍを測る。外面がミガキ、内面は横方向のナデ調整を施す。１６７の破片は大きく外反し、端部は鋭角に仕上げ、ナデ調整を施す。外面は丁寧なナデ、内面は横、斜め方向にハケ目を施す。１６８は杓子状土器と考えられる。杓子部分はナデ調整を施す。取手部分を空洞とし、工具痕が認められる。端部は丸みを帯び、中央にくぼみを設ける。１６９は砂岩製の砥石である。表面と右側面を砥面として使用する。重量は２.５kgを超える。１７０はホルンフェルス製の剥片である。



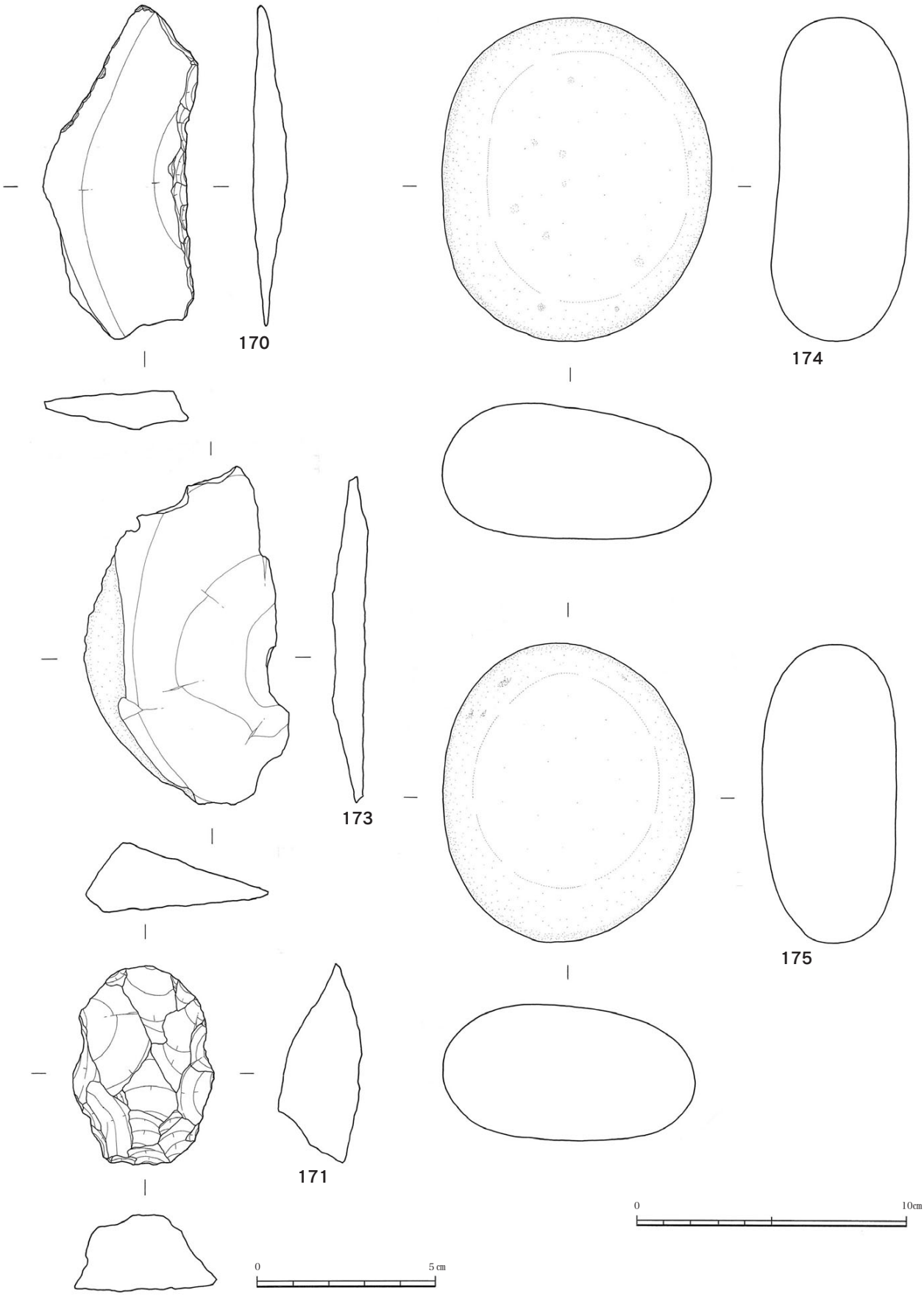
【第２３図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図③　Ｓ＝１／３】



【第２４図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図④　Ｓ＝１／３】



【第２５図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図⑤　Ｓ＝１／３（１５９～１６８）　Ｓ＝２／３（１６９　１７２）】



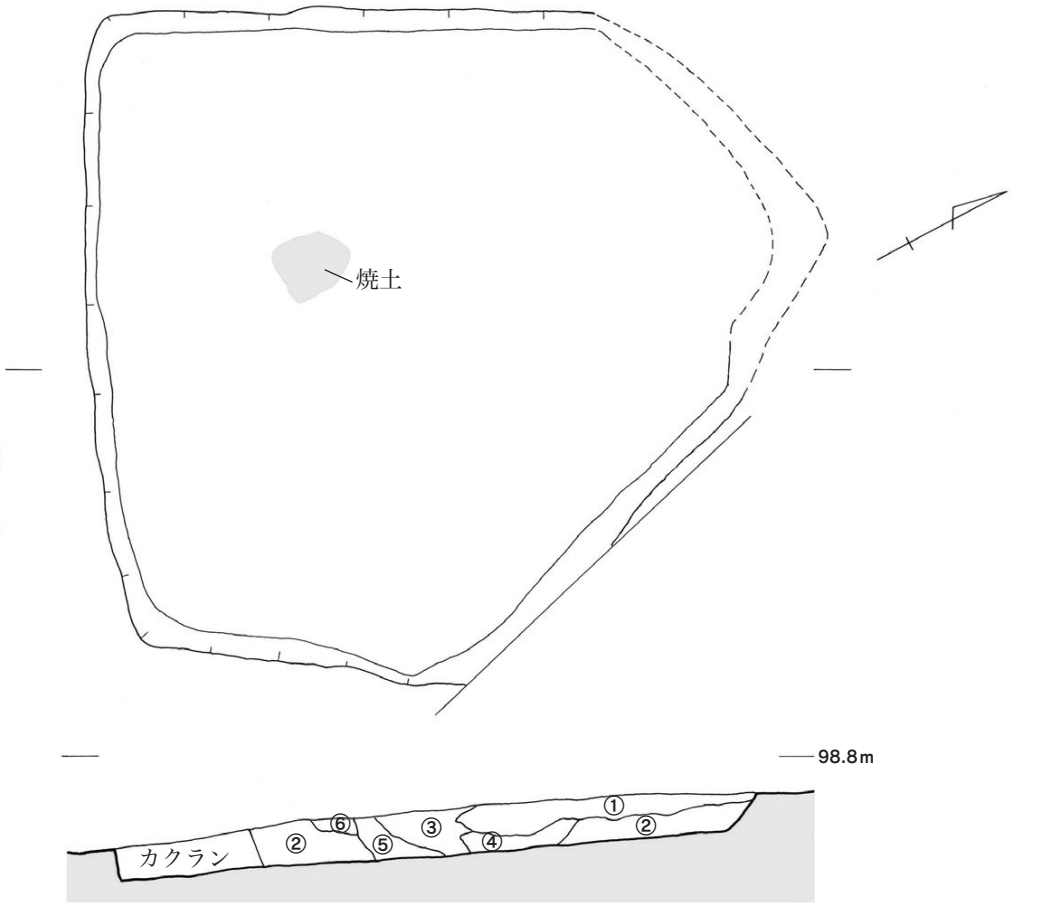
【第２６図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図⑥　Ｓ＝２／３（１７０～１７４）　Ｓ＝１／２（１７５）】

右側辺に連続した剥離痕が認められるが、風化が激しく刃部等と判断するには困難である。１７１はホルンフェルス製の剥片である。剥離痕が数カ所認められるが、風化が激しい。１７２はホルンフェルス製の剥片である。右側辺、左側辺上部などに敲打痕が認められる。１７３はホルンフェルス製の剥片である。上部、右側辺下部、下部にそれぞれ敲打痕が認められる。１７４、１７５は尾鈴山酸性岩類の円礫である。使用形態は不明であるが、全面が砥面のような様相を呈し、石材のもつ性質とは異なる。河川による摩耗か人的使用によるものかその要因は不明である。

１７０～１７５までの遺物は、住居埋土中の出土であるが、遺物の形状や石材などから、住居下層の包含層（第Ⅳ、Ⅴ層）からの出土の可能性も考えられる。

５号竪穴住居跡と出土遺物

この住居跡は調査区北側Ｂ３～Ｃ３グリッドに位置する。一部が調査区外にあるものと考えられる。西側や南側などの撹乱により、全容は不明であるが、長辺約３ｍ、短辺約２.８ｍ、検出面からの深さは約１５ｃｍで方形プランを基調とすると考えられる。柱穴は確認できなかった。なお、中央部から南西部分にかけて約０.１２ｃ㎡程度の焼土がみられた。遺物は５３点を掲載した。

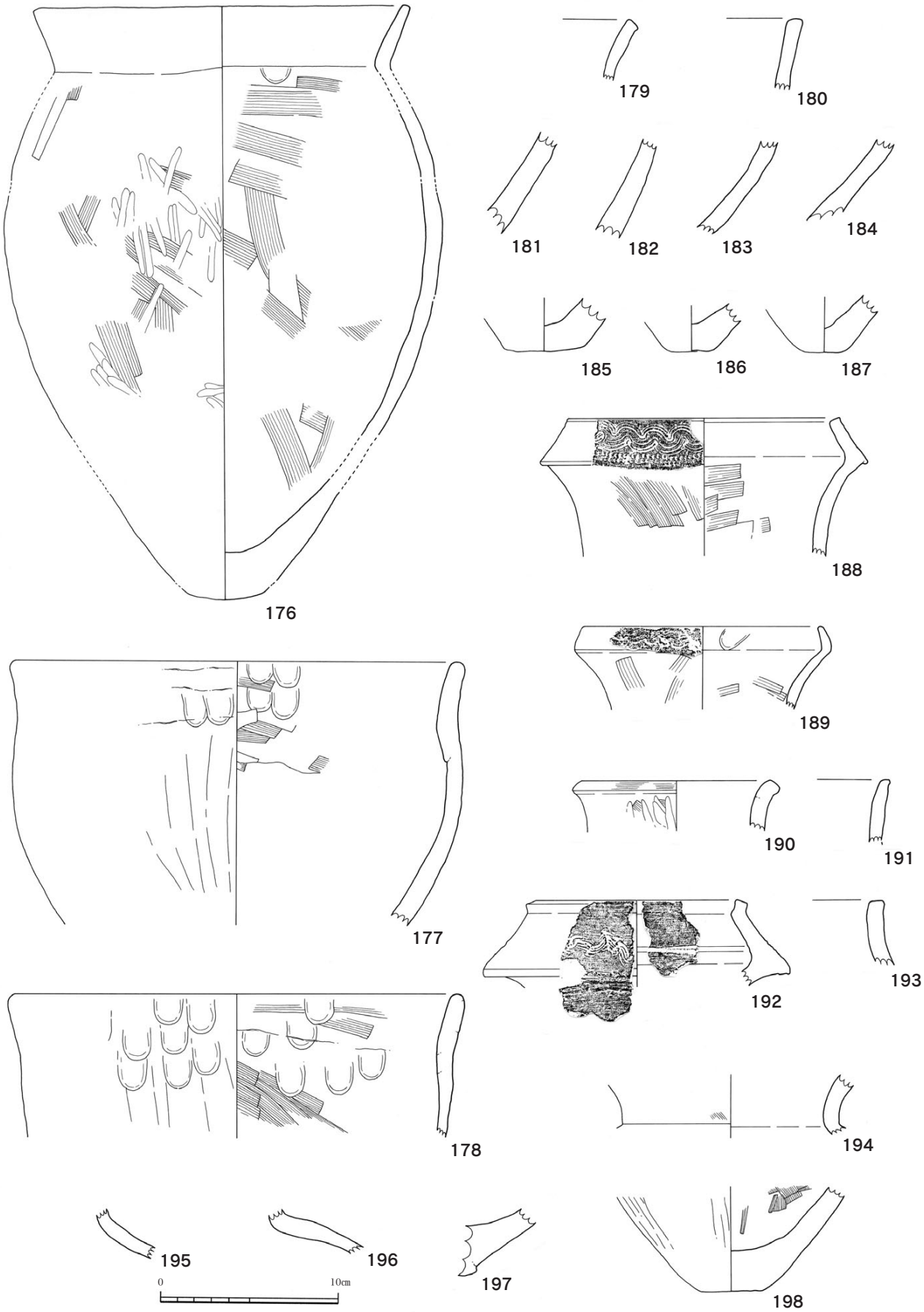


【SA5】
①橙色土（5YR6／6） アカホヤに褐色粘性土が混じる。二次的堆積土である。（平面では不整円形状に堆積）
②暗褐色土（7. 5YR3／3） 硬くしまり、粘性がある。
③にぶい褐色土（7. 5YR5／3） アカホヤ、褐色土、暗褐色土がブロック状に混じる。
④褐色土（7. 5YR4／3） 褐色土、暗褐色土がブロック状に混じる。
⑤にぶい褐色土（7. 5YR5／4） 褐色土、暗褐色土がブロック状に混じる。
⑥にぶい褐色土（7. 5YR5／4） 褐色・暗褐色土ブロックの粒子が細かに混じる。

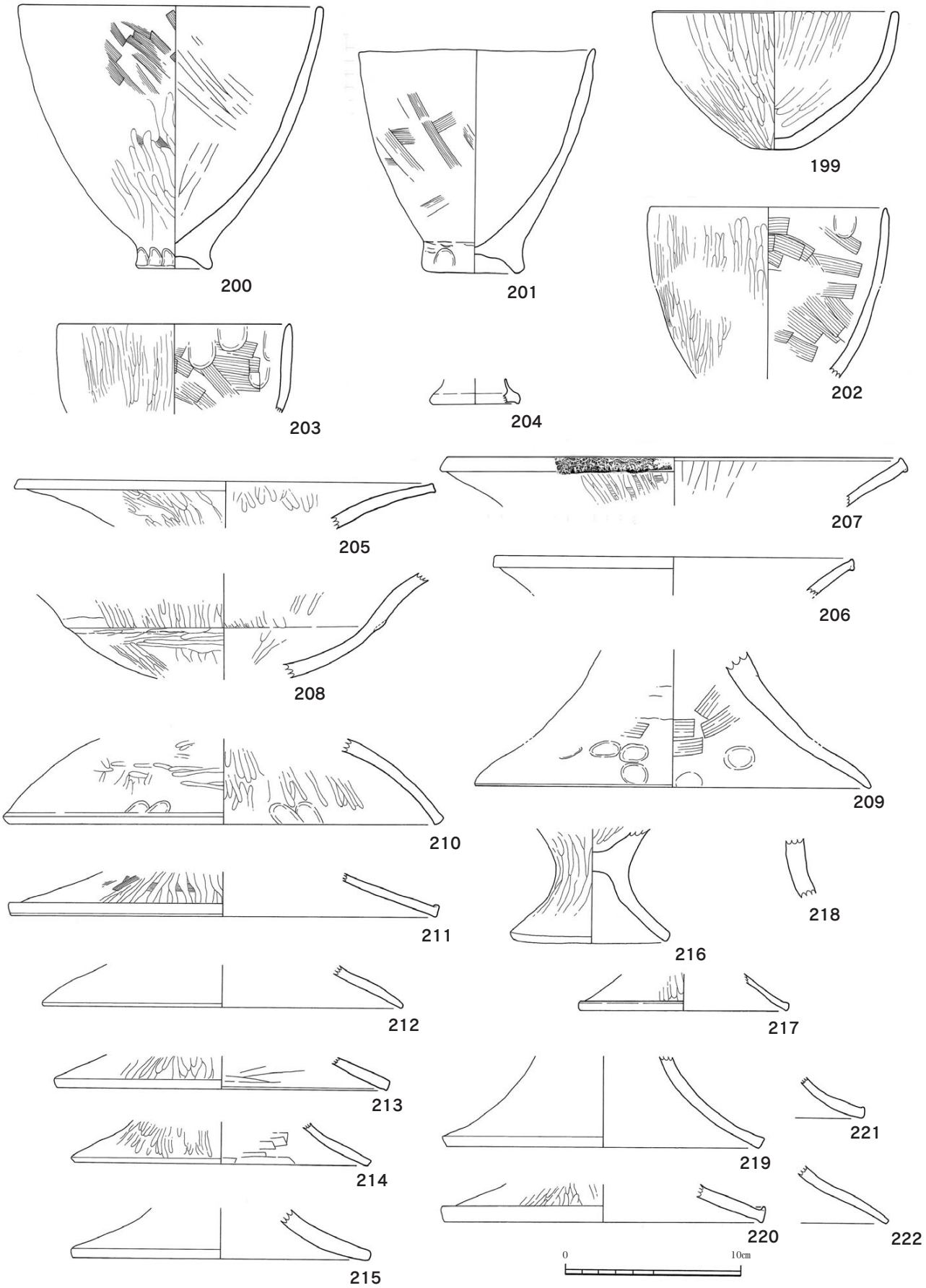
【第２７図　５号竪穴住居跡実測図　Ｓ＝１／４０】

１７６～１８７は甕である。１７６は口縁部から底部である。器高約３３.４ｃｍ、推定口径約２０.４ｃｍ、底径約４ｃｍである。口縁部は「く」の字に外反し口唇部は面を成形する。胴部は最大径が中位上部にあって、やや張りがある。底部は平底であるが、端部は丸みを帯びる。外面は縦、横方向のハケ目や一部ミガキ、内面は縦、横、斜め方向のハケ目調整を施す。１７７は口縁部から胴部の破片である。推定口径は約２４.８ｃｍ、口縁部はわずかに外反し、胴部もやや張る程度である。口唇部は丸く仕上げる。外面は横方向のナデ調整や縦方向の工具痕が認められ、内面はハケ目調整や指押さえの痕も残る。１７８は口縁部から胴部の破片で推定口径約２５ｃｍを測る。口縁部はわずかに外反し、胴部はほとんど張らない。口唇部は丸く仕上げる。外面は縦方向の工具痕や指押さえが認められる。内面は横方向のナデ、横、斜め方向のハケ目調整を施す。１７９は口縁部破片である。わずかに外反する口縁部で、口唇部は面をなす。外面は斜め方向のハケ目、内面は横方向のナデ、斜め方向のハケ目調整を施す。１８０は口縁部破片である。口縁部はほぼ直行し、口唇部はやや丸みを帯びて横ナデ調整を施す。口縁部外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のナデ調整を施す。１８１は胴部破片である。内外面に工具痕がみられるが、風化が著しい。遺物番号８９と同一個体の可能性が考えられる。１８２は底部付近の破片である。外面は縦方向のハケ目調整を施すが、内面は風化が著しく調整不明である。１８３は底部付近の破片である。内外面とも風化により調整は不明、外面に一部ススが付着する。１８４は底部付近の破片である。外面は風化気味で調整が不明だが、一部にススが付着する。内面はナデ調整を施す。１８５は底部破片である。底径は約４.５ｃｍを測り、端部がやや丸みを帯びる。内外面ともナデ、一部にハケ目調整を施す。１８６は底部破片である。底径は約２.２ｃｍで端部は丸みを帯びる。内外面ともナデ調整であるが、風化や粗い仕上げとなっている。１８７は底部破片である。底径は約２.５ｃｍを測り、端部は丸みを帯びる。外面はナデ、内面はハケ目調整を施す。１８８～１９９は壺である。１８８は複合口縁壺の口縁部から頸部の破片である。推定口径は約１５.２ｃｍを測り、逆「く」の字状の形状で、口縁部は下部に半裁竹管刺突文を２段に、上部に櫛描波状文を上下２段に施す。口唇部は面を成形する。屈曲部下の外面は横方向のナデ、縦方向のハケ目調整、内面は横方向のハケ目調整を施す。１８９は複合口縁壺の口縁部から頸部の破片である。外面は口縁部に櫛画波状文を２段に施すが、風化が著しい。頸部は縦方向のハケ目調整を施す。内面は風化気味である。１９０は口縁部の破片である。ゆるやかに外反する口縁部で推定口径は約１０.６ｃｍを測る。口唇部は風化がみられるが、やや丸みを帯びた成形でハケ目調整を施す。外面はミガキ、内面はナデ調整を施す。１９１は口縁部の破片である。やや外反する口縁部で、口唇部は面を成形するが、外方にややつまみだす。外面は横方向のハケ目、内面は斜め方向のハケ目調整を施す。１９２は複合口縁壺の口縁部破片である。推定口径は約１１.２ｃｍを測る。外反したあと内湾する口縁部はさらに端部を上方につまみ出すように調整される。口唇部は横方向のナデ調整を施して面を成形する。内外面とも横方向のナデ調整を施す。外面は櫛描波状文を施すが、施文は粗い。内面は沈線と考えられる条痕が一条認められる。１９３は口縁部破片である。ほぼ直行する口縁部で、口唇部は面を成形する。外面は横方向のナデ調整を施す。１９４は頸部の破片である。内外面に丁寧なナデ調整を施す。１９５、１９６は頸部の破片である。いずれも内外面に斜め方向のハケ目調整を施す。１９７、１９８は底部の破片である。１９７の破片は内外面ともナデ調整を施す。１９８の破片は推定底径約３.４ｃｍを測り、平底である。外面は縦方向にミガキ、内面には斜め方向のハケ目調整を施す。１９９～２０３は鉢としてまとめた。１９９の破片は推定口径約１４.０ｃｍ、底径約２.７ｃｍ

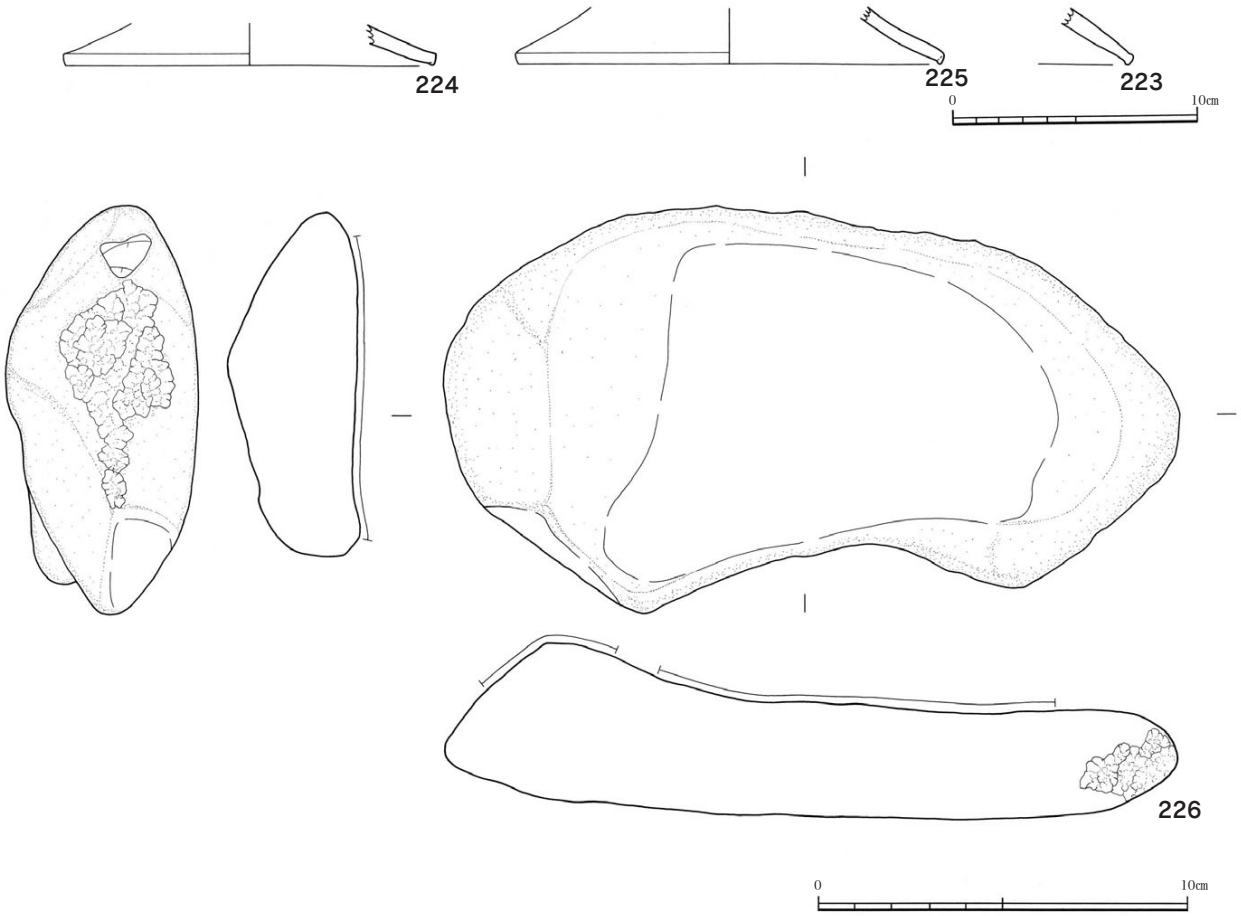
を測り、平底である。内外面ともミガキ調整を施す。２００の破片は器高約１４.９ｃｍ、推定口径約１７.４ｃｍ、底径約４.１ｃｍを測る。口唇部は面を成形するが、端部はわずかに丸みを帯びる。底部は上げ底で、指押さえの痕も明瞭に残る。調整は外面が斜め方向のハケ目や縦方向のミガキを施し、内面は横方向のナデや斜め方向のミガキを施す。２０１の破片は器高約１２.８ｃｍ、口径１３.２ｃｍ、底径５.４ｃｍを測る。口縁部はわずかに外反し、口唇部は先細る。調整は外面が縦、横、斜め方向にハケ目を内面は横方向のハケ目が一部に認められるが、全体的に風化により不明である。底部は上げ底を呈し、端部はやや外方に向かい、わずかに丸みを帯びる。２０２、２０３は口縁から胴部の破片である。推定口径は１３.２ｃｍでやや内湾する。口唇部は先細る。外面は縦方向のミガキ、内面は横、斜め方向のハケ目調整を施し、内面には指押さえの痕も認められる。同一個体の可能性も考えられる。２０４の破片は小型の甕または鉢の底部破片である。小片だが、内外面ともナデ調整と考えられる。推定底径は約４.９ｃｍである。２０５～２２５は高坏をまとめた。２０５～２０８は坏部の破片である。２０５の破片は推定口径約２３.６ｃｍを測る。内外面にミガキを、口唇部にナデ調整を施す。２０６の破片はゆるやかに外反する口縁部で推定口径約２０.３ｃｍを測る。口唇部はナデ調整を施して面を成形する。外面は斜め方向のミガキ、内面は横方向のナデ調整を施す。２０７の破片はゆるやかに外反する口縁部で推定口径約２５.８ｃｍを測る。口唇部は櫛描波状文を施す。外面はハケ目のあと縦方向のミガキ、内面は縦方向のナデ調整を施す。２０８の破片は受部からゆるやかに口縁部下に向けて外反する。屈曲部が明瞭である。内外面は横、縦方向のミガキ調整を施す。２０９～２２５は脚部の破片である。２０９の破片は先細りする裾部で、脚裾部径は推定約２２.４ｃｍを測る。外面の仕上げが粗く、指押さえの痕が残る。内面はハケ目調整を施す。２１０の破片は脚部中位から内湾する裾部である。脚裾部径は推定約２４ｃｍである。端部は平坦に仕上げる。内外面とも横方向のナデ、ミガキ調整を施す。２１１の破片は脚裾部径約２４.１ｃｍを測る。内面は風化により不明だが、外面は横方向のハケ目のあとミガキ調整を施す。２１２の破片は先細りする裾部で、脚裾部径は推定で約２０.３ｃｍである。外面の仕上げが粗く、指押さえの痕が残る。内面はハケ目調整を施す。推定径が異なるが、胎土、形状とも２０９の遺物と酷似しており、同一個体の可能性も考えられる。２１３の破片の裾部端部は横方向のミガキを施して面を成形する。脚部裾径は推定約１８.６ｃｍを測る。外面は縦方向のミガキ、内面は横、斜め方向に工具痕を残す。２１４の破片の裾部端部はナデ調整を施して面を成形する。脚裾部径は推定で約１６.６ｃｍを測る。外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のナデを施す。２１５の破片の裾部端部はナデ調整を施して面を成形する。脚裾部径は推定で約１６.８ｃｍを測る。外面はナデ、内面はハケ目を施すと考えられるが、風化が著しい。２１６の破片は裾部端部をやや丸みをもたせて、上方に反らせる。端部の調整はナデを施す。脚裾部径は推定で約８.７ｃｍを測る。外面は縦方向のミガキ、内面はナデを施す。２１７の破片は脚裾部である。裾部径は推定で約１１.８ｃｍを測り、端部はナデ調整を施して面を成形する。外面はミガキ、内面は丁寧なナデ調整を施す。２１８の脚部破片は内外面ともナデ調整を施す。２１９の破片は脚裾部である。推定の裾部径は約１７.６ｃｍを測る。端部はナデ調整を施して面を成形する。外面は端部を横方向のミガキ、その上方は斜め、縦方向のミガキ、内面は斜め方向のミガキ調整を施す。２２０の破片は脚裾部である。裾部径は推定で約１８ｃｍである。裾端部はナデ調整を施して面を成形する。それによって端部が押しつぶれたような形状を呈する。外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のナデ調整を施す。２２１の破片は、裾端部がナデ調整を施すことで面を成形し、それによって端部が上方に盛



【第２８図　５号竪穴住居跡出土遺物実測図①　Ｓ＝１／３】



【第２９図　５号竪穴住居跡出土遺物実測図②　Ｓ＝１／３】

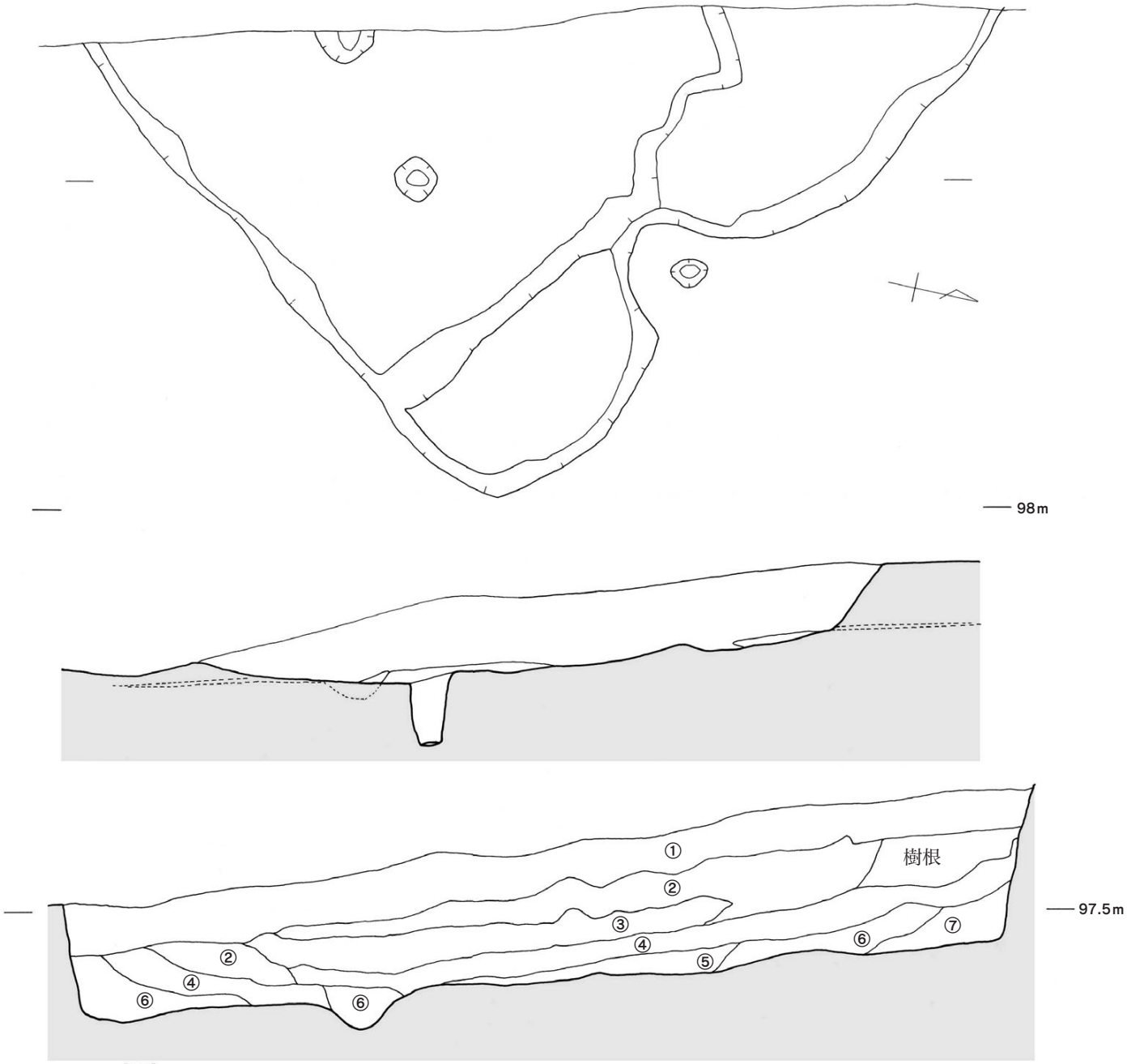


【第３０図　５号竪穴住居跡出土遺物実測図③　Ｓ＝１／３（２２４　２２５）Ｓ＝１／２（２２６）】

り上がる。外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のハケ目調整と考えられるが、風化が著しい。２２２の破片は裾部片で端部は先細り、指押さえの痕も認められる。外面は粗い仕上げで、内面も不定方向にハケ目調整を施す。２２３、２２４の破片は脚裾部である。２２３は、裾端部にナデ調整を施すことで面を成形する。２２４は裾端部がナデ調整で面を成形されることによって、端部が押しつぶれたような形状を呈する。２２５は裾端部をナデ調整によって平坦に仕上げ、それによって端部が下方に下がるような形状を呈する。外面は縦方向のミガキ、内面はナデ調整を施す。２２６は砂岩製の砥石である。表面の下半分、下側面を砥面として使用し、下側面はさらに敲打痕が認められる。

６号竪穴住居跡と出土遺物

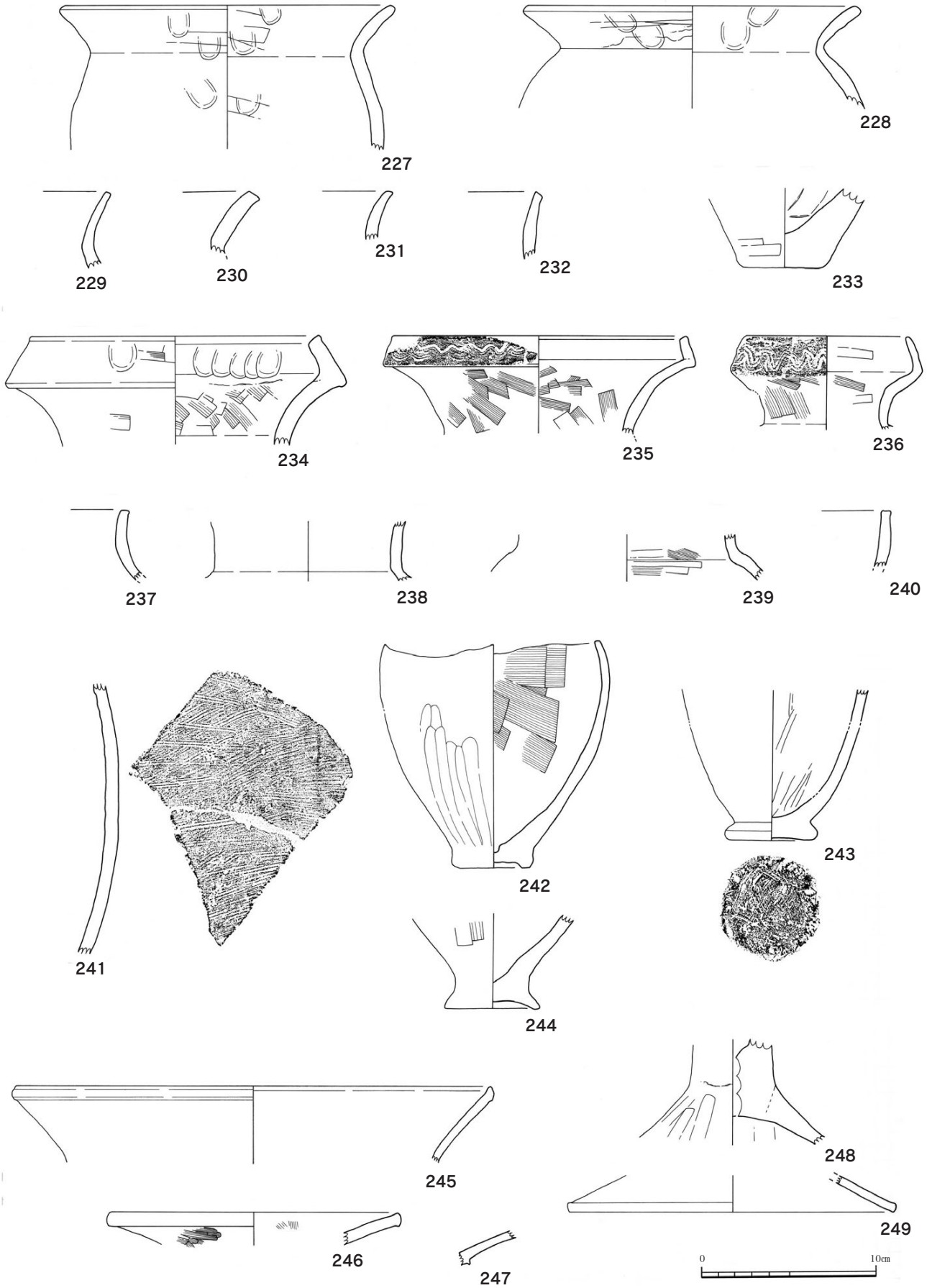
この住居跡は、調査区中央部の西側に位置し、一部が調査区外に存在する。長軸約５ｍ、短軸約４．３ｍ、検出面からの深さは最深部で約７０ｃｍを測り、内部突出壁とベッド状遺構をもつ。ベッド状遺構部分の床面積は約３．２㎡で、これらを含む総床面積は約９．６㎡である。突出壁は、床面からの現行約０．５ｍで北東隅より約１．８ｍの位置に築かれ南へ向けて約０．６ｍ突出する。柱穴は、径約３０ｃｍ～４０ｃｍで床面からの深さは、約４０～５０ｃｍである。なお、土層断面は西側の調査区壁面を記したものである。



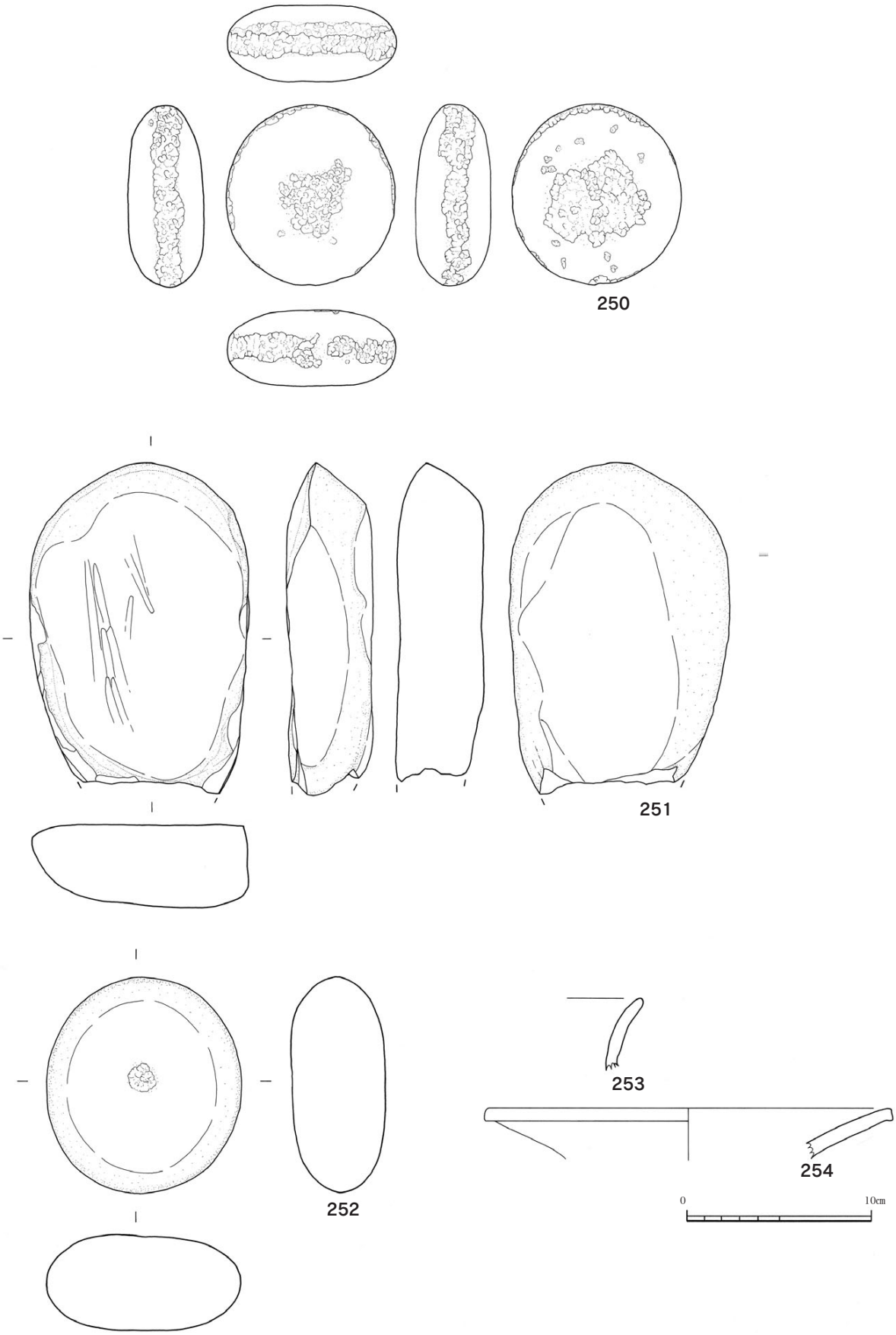
【SA6】
①表土
②黒色土（7．5YR2／1） しまりは弱くやわらかい。粘りがある。
③褐色土（7．5YR4／6） しまりは弱く、やわらかい。粘りがある。アカホヤ火山灰の二次堆積
④黒褐色土（7．5YR3／2） ②よりしまりは強い。やや粘りがある。
⑤黒褐色土（7．5YR3／2） ④よりしまりがあり硬い。粘りがあり、アカホヤブロックを含む。
⑥暗褐色土（10YR3／4） ⑤よりしまりが強く硬い。アカホヤのブロックを2%程度含む。
⑦黒褐色土（7．5YR2／2） ②，③，⑤よりも粘りが強く、硬くしまっている。アカホヤブロックの極小から大を5%程度含む。

【第３１図　６号竪穴住居跡　実測図１／４０】

遺物は、２６点を掲載した。２２７～２３２は甕をまとめた。２２７は口縁部から胴部の破片である。「く」の字状に外反する口縁部で、推定の口径は約１８.６ｃｍを測る。口唇部は平坦に仕上げ、胴部の張りは強くはない。外面は横方向のナデ、内面は横、斜め方向にナデを施す。外面にはススが付着し、指押さえの痕も認められる。２２８は口縁部から頸部の破片である。推定の口径は約１８.６ｃｍを測る。口唇部は面を成形し、頸部は２２７よりも強く内傾する。内外面ともナデを施す。外面にはススが付着し、指押さえの痕も認められる。２２９は口縁部から頸部の破片である。外反する口縁部はわずかに先細り気味で端部は面を成形する。外面は斜め方向のナデ、内面は斜め方向のハケ目を施す。２３０は「く」の字状を呈する口縁部の破片で、口唇部は面を成形する。外面は縦方向のハケ目、内面は斜め方向のハケ目を施す。２３１は口縁部の破片でわずかに外反する。内外面とも横、斜め方向のハケ目を施す。２３２は口縁部破片である。ほぼ直行の口縁部で、口唇部は面を成形する。内外面ともナデを施すが、風化が著しい。２３３は甕または壺の底部破片である。底径は約４.７ｃｍを測る。平底で端部はやや丸みを帯びる。外面に横方向のハケ目、内面はナデ調整を施すと考えられるが、風化により不明な箇所が多い。２３４は複合口縁壺の口縁部から頸部の破片である。推定口径は約１６.２ｃｍを測る。外反したのち内湾する口縁部で、口唇部は面を成形する。外面側の端部をつまみあげている。外面に櫛描は認められず、指押さえの痕が残る。内面は指押さえの痕、斜め方向のハケ目調整を施す。２３５は複合口縁壺の口縁部から頸部の破片である。外反したのち、わずかに内湾する口縁部で、推定口径は約１６.４ｃｍを測る。外面は口縁部に５条の櫛描文を施し、頸部外面はハケ目、内面はハケ目調整を施す。２３６は複合口縁壺の口縁部から頸部である。推定口径は約９ｃｍである。外反したのちゆるやかに内湾する口縁部で、口唇部は先細る。外面には櫛描文が施される。頸部外面は斜め、縦方向のハケ目、内面は横方向のハケ目調整を施す。２３７は壺の口縁部破片である。ほぼ直行する口縁部で、口唇部はナデ調整を施して面を成形する。内外面ともハケ目調整を施す。２３８は壺の頸部破片である。内外面ともハケ目調整を施す。２３９は壺の頸部から肩部の破片である。外面はナデ、内面は横・斜め方向のハケ目調整を施す。２４０は鉢の口縁部破片である。ほぼ直行する口縁部で、口唇部は面を成形する。内外面ともナデ調整を施し、指押さえの痕も認められる。２４１は甕または壺の胴部破片である。内外面とも横・斜め方向のハケ目調整を施す。２４２は鉢である。ほぼ完形で器高約１２.８ｃｍ、口径は約１２.１ｃｍを測る。内湾する口縁部で、口唇部を面成形する。外面は縦方向のミガキ、内面はハケ目調整を施す。底部は上げ底で、底径約４.２ｃｍを測る。端部は丸みを帯びる。２４３は胴部から底部の破片である。底径は約４.８ｃｍを測り、端部は丸みを帯びて外方に向かう。底部外面には植物の繊維痕が認められる。外面はハケ目、内面はミガキ調整を施す。２４４は小型甕の胴部から底部の破片である。底径は約５.４ｃｍを測る。上げ底で、端部は外方へ向かう。内外面とも一部ハケ目調整が認められるが、全体的に風化している。２４５～２４７は高坏の破片である。２４５の坏部破片は推定口径約２６.８ｃｍを測る。口唇部は凹線文的な成形を施す。外面はミガキ、内面は横方向のナデ調整を施す。２４６の坏部破片は推定口径約１６.２ｃｍを測る。口唇部は丸みを帯び、横方向のナデ調整を施す。外面は横・斜め方向のハケ目、内面は端部が横方向のナデ、端部以外は斜め方向のハケ目調整を施す。２４７は坏部の屈曲部分である。内外面とも縦方向のミガキ調整を施す。２４８は脚部の破片である。全体的に風化し調整は不明であるが、一部にミガキまたはナデ調整がみられる。外面に柱部と脚部とのつなぎ目が認められる。２４９は脚裾部の破片である。推定の裾部径は約１８.４ｃｍを測る。



【第３２図　６号竪穴住居跡出土遺物実測図①　Ｓ＝１／３】



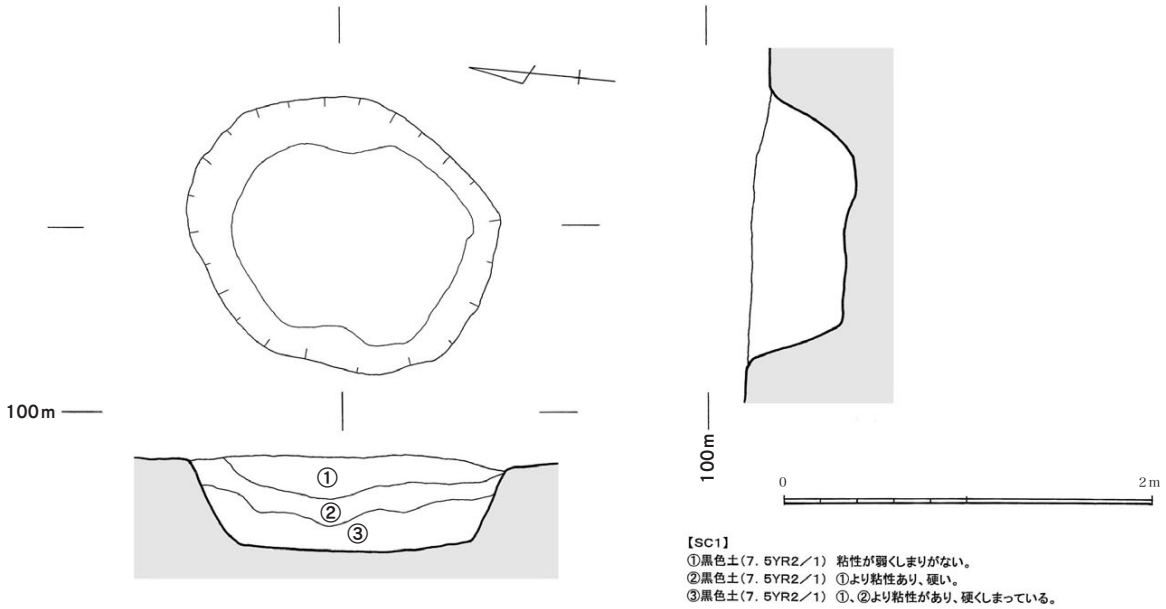
【第３３図　６号竪穴住居跡出土遺物実測図②　２号土坑出土遺物実測図　Ｓ＝１／３】

外面はミガキを施すが、風化が著しい。内面は調整不明である。２５０は尾鈴山酸性岩類製の敲石・磨石である。磨石として使用していたものを敲石に転用したものと考えられる。表・裏面の敲打痕以外の部分はすべて磨面であり、表・裏・側面全面に敲打痕が認められる。２５１は砂岩製の砥石である。表面と右側面を砥面としている。表面にはくぼみも認められる。２５２は尾鈴山酸性岩類製の磨石・敲石である。表・裏面とも中央付近には敲打痕が認められる。２５３は２号土坑出土の甕の口縁部破片である。口縁部はゆるやかに外反し、口唇部は先細る。内外面とも横方向のハケ目調整を施す。２５４は２号土坑出土の高坏の坏部破片である。推定口径は約２１.５ｃｍを測る。口唇部は横方向のナデ調整を施して面を成形する。外面はミガキ、内面は横方向のナデ調整を施す。外面は朱を塗布している。

（２）土坑

１号土坑

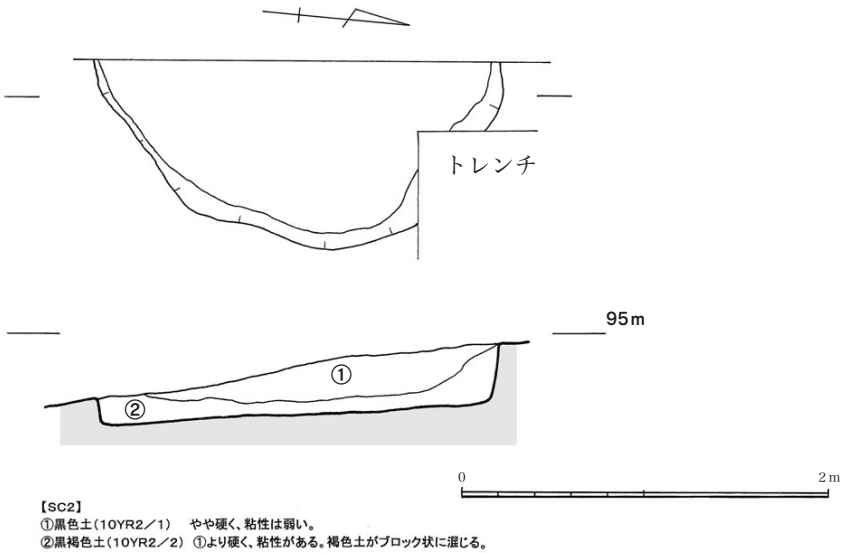
この遺構は、調査区北側ＳＡ１の南側に検出した。長軸約１.７ｍ、短軸約１.５ｍ、検出面からの深さは、約６０ｃｍを測る。床面積は約１.１㎡である。遺物は土器細片数点で掲載するほどではなかった。



【第３４図　１号土坑実測図　Ｓ＝１／４０】

２号土坑

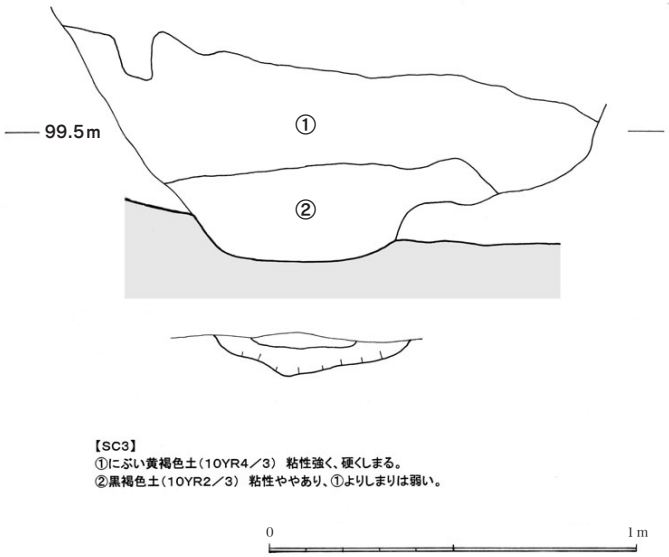
この遺構は、調査区南側ＳＰ１の西側に位置し、一部は調査区外である。長軸は約２.１ｍで、短軸は不明である。検出面からの深さは、３０～４０ｃｍを測る。床面積は約１.４㎡である。遺物は土器を２点掲載した。



【第３５図　２号土坑実測図　Ｓ＝１／４０】

３号土坑

この遺構は、調査区北側の第Ⅳ層の調査の段階で確認したものである。壁面の位置にあったことからＳＡ１の検出時には判別が困難であった。第Ⅳ層面での検出時にはほとんどが調査区外にあり、わずかに一部（床上）を確認できたにすぎない。出土した遺物の位置や弥生土器の特徴をもつこと、遺構検出面のレベルなどから、ＳＡ１内の土坑の可能性も考えられる。



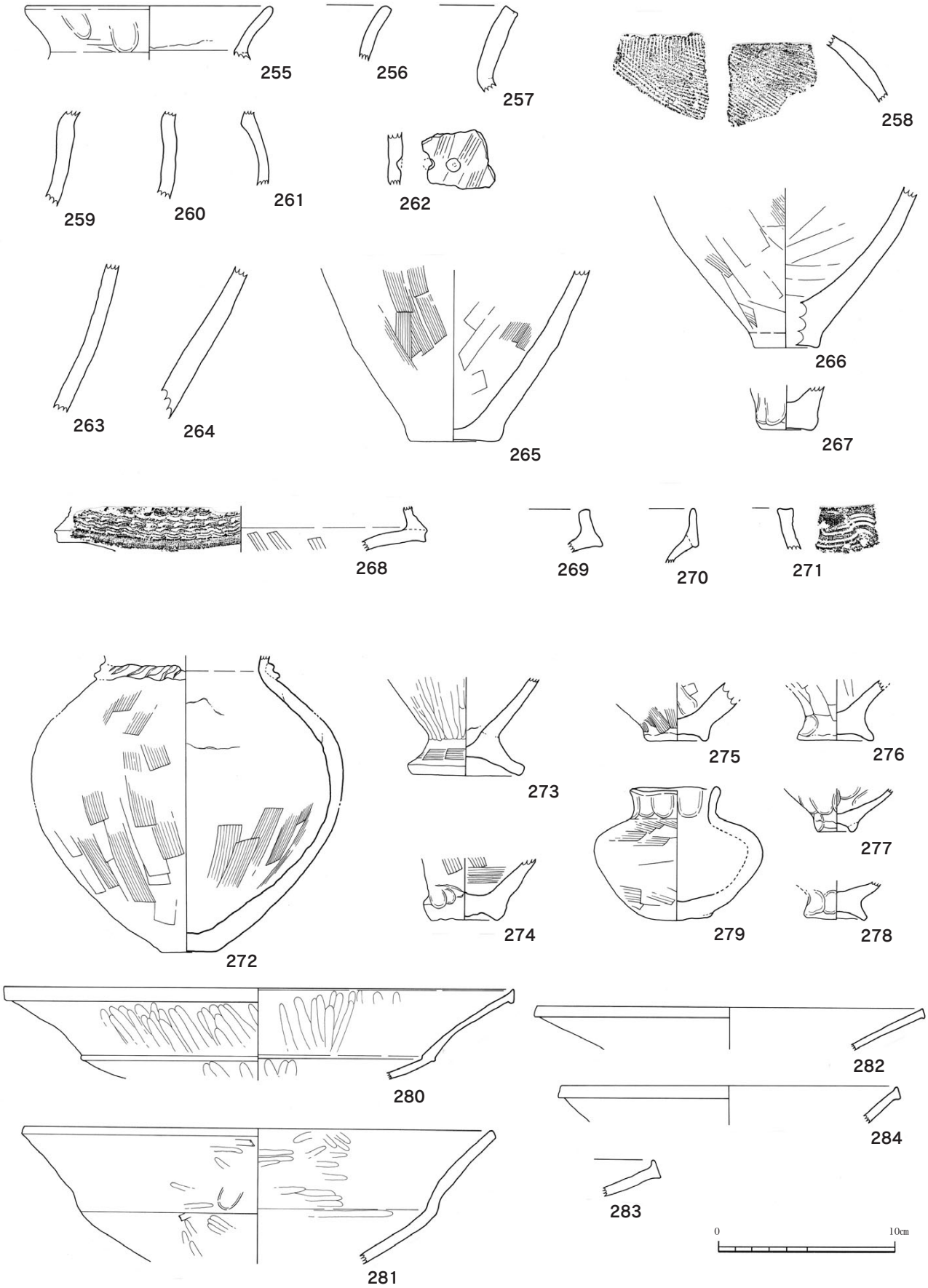
【第３６図　３号土坑実測図　Ｓ＝１／２０】

（３）　第Ⅱ層出土の遺物

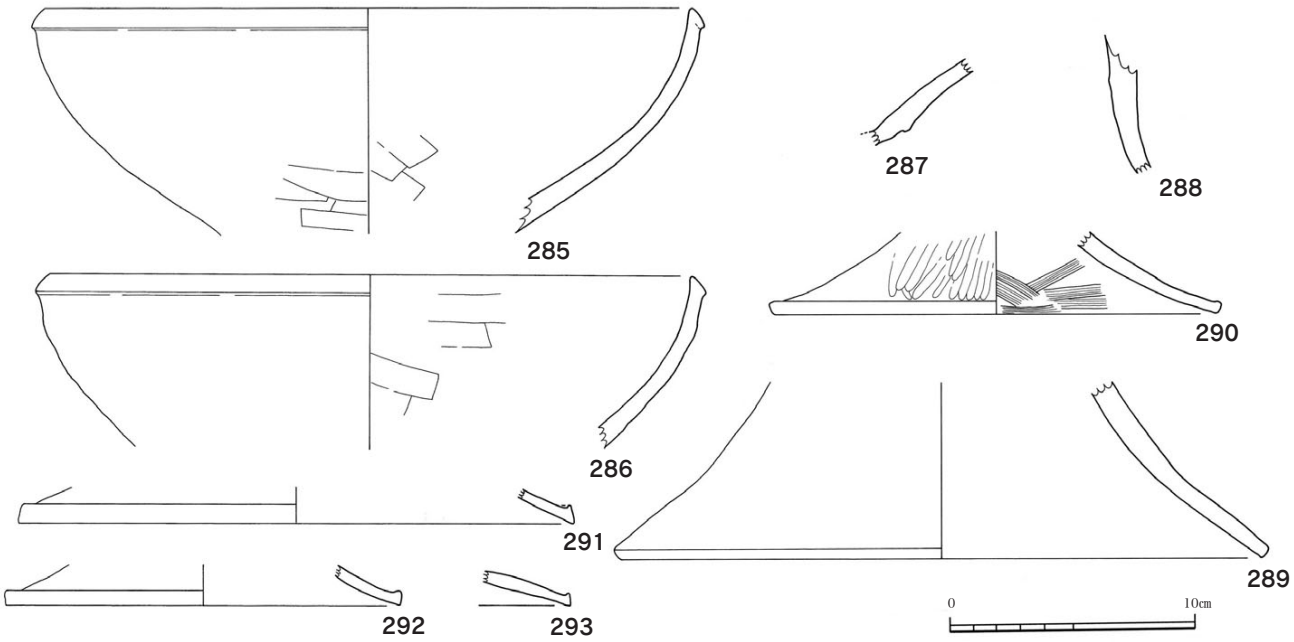
第Ⅲ層の鬼界アカホヤ火山灰層上面までの掘削において出土した遺物から３９点を掲載した。２５５は甕の口縁部破片である。推定口径は１３.８cmを測る。外反する口縁部で、口唇部は先細る。外面は横方向のハケ目を施すが、風化により不明な箇所が多い。内面は風化により調整不明である。２５６は甕または壺の口縁部破片である。口縁部はわずかに外反し、口唇部はナデ調整を施して面をなす。外面

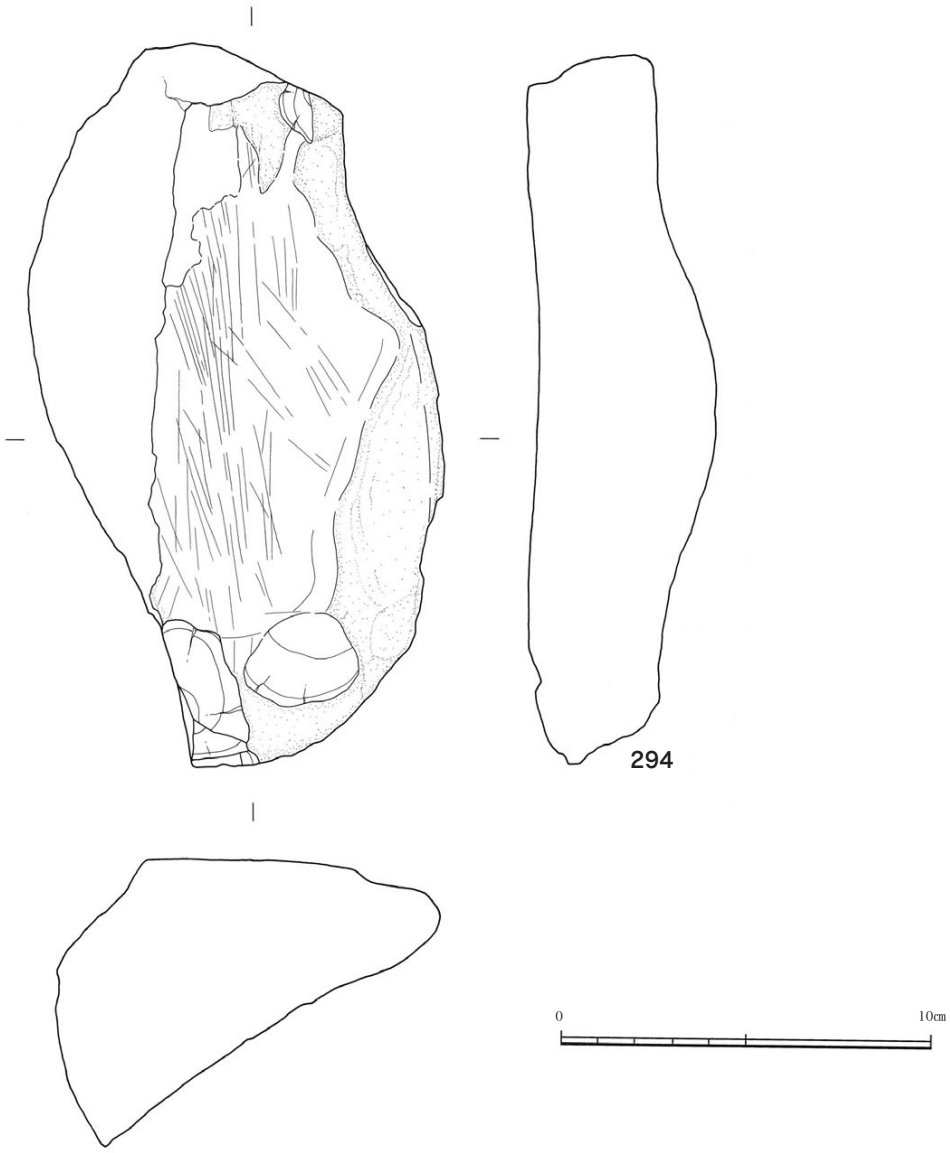
は横方向のナデ、内面は横方向のハケ目調整を施す。２５７は甕または壺の口縁部破片である。口縁部はわずかに外反し、口唇部は面をなす。内外面は風化により調整は不明である。２５８は甕または壺の胴部の破片である。内外面は斜め方向のハケ目調整を施す。２５９は小型の甕の頸部から胴部の破片である。内外面はナデ調整を施す。内面には指押さえの痕も認められる。２６０は甕の頸部から胴部の破片である。外面は頸部にハケ目調整のあとが認められるが、胴部は風化が著しく不明である。内面は斜め方向のハケ目調整を施す。２６１は甕の頸部から胴部の破片である。やや張りのある胴部である。外面はナデやハケ目調整を施すが、粗い仕上げである。内面は横方向のハケ目調整を施す。２６２は甕または壺の胴部片である。内外面は一部ハケ目調整を残すが風化が著しい。外面には未貫通の穿孔が一箇所残り、端部には穿孔した箇所の折損がみられる。２６３は甕の胴部破片である。内外面は斜め方向のハケ目調整を施す。２６４は甕または壺の胴部破片である。外面は粗い仕上げで、一部ハケ目調整が認められる。内面は縦方向のハケ目調整を施す。２６５は甕の胴部から底部の破片である。底径は約５ｃｍを測り、平底を呈する。底部外面はナデ、胴部外面は縦方向のハケ目を内面は斜め方向のハケ目調整を施すが、両面とも全体的に風化している。外面はススも付着する。２６６は甕の胴部から底部の破片である。底部はやや上げ底で推定底径は約３.６ｃｍを測る。底部外面はナデ調整を、胴部内外面は斜め・横方向のナデ調整を施す。２６７は甕の底部破片である。底部は平底で底径は約２.６ｃｍを測る。内外面ともナデ調整を施す。２６８は複合口縁壺の口縁部破片である。推定口径は約１８.４ｃｍを測る。大きく外反したのちやや内湾気味に立ち上がるが、外反した頸部に口縁部を貼り付けた成形が認められる。また、端部は丁寧なナデ調整を施す。口縁部外面は櫛描波状文を、頸部外面は縦方向のハケ目を施す。内面はミガキ調整を施す。２６９は複合口縁壺の口縁部破片である。大きく外反したのちやや内湾気味に立ち上がる。２７０は複合口縁壺の口縁部破片である。口縁部は外反したのち直行する。口唇部は先細る。外面は一部に櫛描波状文が残るが風化しており不明。内面も風化により不明。２７１は壺の口縁部破片であるが、複合口縁と考えられる。口唇部は凹線状の浅いくぼみをもつ。外面は櫛描波状文、内面は横方向のナデ調整を施す。２７２は壺の頸部から底部の破片である。胴部最大径は中位にあり、約１７.６ｃｍを測る。頸部には刻み突帯を貼り付ける。底部は底径約３.５ｃｍをはかり、平底を呈する。内外面とも縦方向のハケ目調整を施すが、全体的に風化気味である。２７３は小型土器の胴部から底部の破片である。底部は上げ底で、底径約６ｃｍを測る。底部裏面はナデやハケ目調整を施し、外面は底部がハケ目、胴部は縦方向のミガキ調整を、内面はナデ調整を施す。２７４は小型土器の底部破片である。底径約３.８ｃｍであるが、指押さえの痕が明瞭で、製作途中であるかのような粗い成形である。そのため、外面の調整は不明である。内面はハケ目調整が認められる。２７５は甕または壺の底部破片である。上げ底で底径約３.４ｃｍを測る。底部裏面はナデ調整、外面は縦方向のハケ目調整を施す。指押さえの痕も認められる。内面は一部で工具痕、主にナデ調整を施す。２７６も甕または壺の底部破片である。上げ底で端部は外方に向かう。底径は約４.２ｃｍを測る。底部裏面はナデ調整、外面は縦方向の工具痕、内面は主にナデ調整を施す。外面には指押さえの痕も明瞭に残る。２７７は小型土器の底部破片である。底部は上げ底で高台状を呈し、径は約２ｃｍを測る。外面は指押さえの痕がみられ、内面も指ナデの調整を施す。２７８は小型土器の底部破片である。上げ底で端部は外方に向く。径は約３.３ｃｍを測る。内外面とも風化が著しく調整は不明であるが、わずかに指押さえの痕が認められる。２７９はほぼ完形の小型の壺である。器高約７.５ｃｍ、口径は約４.７ｃｍ、最大径は肩部もしくは胴部上位で

９.５ｃｍを測る。口縁部はわずかに外反し、口唇部を平坦に仕上げる。底部は成形が完全ではないものの基本的には丸底と考えられる。外面はハケ目、内面はナデ調整が施される。２８０は高坏の坏部破片である。推定口径は約２９.０ｃｍを測る。屈曲部から大きく外反し、口唇部はナデ調整により面をなす。内外面ともにミガキ調整を施す。２８１は高坏の坏部破片である。推定口径は約２６.４ｃｍを測る。屈曲部の稜はなだらかで、ゆるやかに外反する。口唇部はナデ調整を施し、面をなす。内外面とも横・斜め方向にミガキ調整を施す。２８２は高坏の坏部破片である。口唇部はナデ調整により面をなす。外面はミガキ調整が一部残るが、内面は風化により調整は不明である。２８３は高坏の坏部破片である。口唇部はナデ調整を施すが、調整によって断面がＬ字状の成形をなす。内外面とも縦方向のミガキ調整を施す。２８４は高坏の坏部破片である。推定口径は約１９ｃｍを測る。口唇部はナデ調整により面をなすが、一部は外方にはみ出る。内外面とも縦方向のミガキ調整を施す。２８５、２８６は鉢の破片である。口径は約２６.２ｃｍをはかる。口唇部はナデ調整を施す。内外面は風化により調整は不明である。胎土、形状などから同一個体の可能性が高い。２８７は高坏の坏部破片である。屈曲部周辺で外面は横方向のハケ目、内面は縦方向のミガキ調整を施す。２８８は高坏の脚部破片である。外面はハケ目、内面はナデ調整と考えられるが風化が著しい。２８９は高坏の脚部破片である。裾部径は推定約２６ｃｍを測る。端部は面を成形する。内外面とも一部にミガキ調整が残るが、風化が著しい。２９０は高坏の脚裾部破片である。推定底径は約１８.２ｃｍを測る。裾部端部は平面に仕上げ、端部は上方に盛り上がる。丁寧なナデ調整を施す。外面は縦方向のミガキ、内面は横、斜め方向のハケ目調整を施す。２９１は高坏の脚部破片である。脚裾部はナデ調整を施し平坦に仕上げる。外面は縦方向のミガキ、内面はハケ目調整であるが、端部付近は丁寧なナデ調整を施す。２９２は高坏の脚裾部破片である。裾部径は推定約１６ｃｍである。裾部端部はナデ調整を施して平面に仕上げ、端部は上方に盛り上がる。外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のハケ目を施す。２９３は高坏の脚裾部破片である。裾部端部はナデ調整を施して平面に仕上げ、一部は上方に盛り上がる。外面は風化により調整は不明。内面は横、斜め方向のハケ目調整を施す。２９４はホルンフェルス製の砥石である。表面のみが使用され、縦や斜めに細い条痕が残る。



【第３７図　第Ⅱ層出土遺物①　Ｓ＝１／３】





【第３８図　第Ⅱ層出土遺物②　Ｓ＝１／３（２８５～２９３）Ｓ＝１／２（２９４）】

番号	種別	器種 部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
8	縄文土器	深鉢 口縁部	SP1	23．6			斜め方向の貝殻条痕文 風化気味	丁寧なナデ	良好	にぶい黄橙	浅黄	1mm大の橙色粒をわずかに含む。 1mm大の白色粒を多く含む。	残存率 口縁部　1／6
9	〃	深鉢 胴部	〃				横方向の貝殻条痕文 風化気味 指押さえ	丁寧なナデ 一部指押さえ	〃	にぶい黄橙	褐灰	微細な透明の光沢粒を含む。 微細な灰白色粒を含む。	スス付着
10	〃	深鉢 胴部	〃				横方向の貝殻条痕文 全体的に風化	丁寧なナデ	〃	にぶい黄橙	黒褐	微細な透明の光沢粒を含む。 1mm以下の灰白色粒を含む。	スス付着
11	〃	深鉢 胴部	〃				横、斜め方向の貝殻条痕文 一部風化	丁寧なナデ	〃	にぶい黄橙	灰黄褐	2mm以下のにぶい黄橙色粒を含む。 微細な白色粒を含む。	
12	〃	小型鉢 胴部～底部	〃		5．2		風化著しい	丁寧なナデ	〃	浅黄橙	にぶい黄橙	微細な白色粒をわずかに含む。	残存率　1／2 底部　100%
13	〃	深鉢 口縁部	Ⅴ層				条痕のあと指押さえ	条痕のあと指押さえ	〃	にぶい黄褐	にぶい褐	2mm以下の黄灰色・にぶい赤褐色・2mm程度の白色粒・黒色光沢粒を含む。	隆帯文
14	〃	深鉢 口縁部	〃				横方向のナデ	横方向のナデ　指頭痕	〃	にぶい橙	にぶい橙	微細な白色粒を含む。 1mm大の黒色光沢粒を含む。	隆帯文 スス付着
15	〃	深鉢 胴部	Ⅳ層				ナデ	ナデ	〃	にぶい黄橙	灰黄褐	1mm以下のにぶい黄褐色粒を含む。 2mm以下の灰白色粒を含む。	隆帯文
16	〃	深鉢 胴部	一括				ナデ 指押さえ	ナデ 指押さえ	〃	褐灰	にぶい橙	2．5mm以下の灰白色粒、黒色光沢粒を含む。 2mm以下のにぶい橙色粒を含む。 1mm以下の灰褐色粒を含む。	隆帯文
17	〃	深鉢 胴部	カクラン				ナデ	ナデ 指押さえ	〃	にぶい黄褐	褐灰	6mm以下のにぶい褐色粒、灰白色粒を含む。 1mm程度の黒色・不透明の光沢粒を含む。	隆帯文
18	〃	深鉢 胴部	一括				一部剥離	やや風化	〃	にぶい橙	にぶい橙	1mm大の橙色粒を含む。 微細な白色粒、透明の光沢粒を含む	隆帯文
19	〃	深鉢 胴部	Ⅴ層				著しい風化	著しい風化 工具痕	〃	浅黄橙	浅黄橙	微細な白色粒を含む。	隆帯文
20	〃	深鉢 胴部	〃				指押さえ	ナデ 指押さえ	〃	褐	にぶい褐	1mm大の橙色粒を含む。 微細な白色粒を含む。	スス付着
21	〃	深鉢 胴部	〃				斜め方向のナデ 指押さえ 全体的に風化	ナデ 著しい風化	〃	にぶい褐	にぶい褐	1mm以下の透明な光沢粒を含む。 1mm以下の灰白色粒を含む。	
22	〃	深鉢 口縁部	Ⅳ層				貝殻腹縁刺突文 横方向の貝殻条痕文	横方向の貝殻条痕文 赤色顔料	〃	にぶい黄橙	にぶい橙	1．5mm以下の灰白色、浅黄橙色粒、黒色光沢粒を含む。	赤色顔料塗布
23	〃	深鉢 口縁部	カクラン				貝殻腹縁刺突文 横方向の貝殻条痕文	横方向の貝殻条痕文 赤色顔料	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の灰白色、にぶい橙色、浅黄橙色、褐白色の粒を含む。	赤色顔料塗布 スス付着
24	〃	深鉢 口縁部	一括				貝殻腹縁刺突文 著しい風化	丁寧なナデ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm大のにぶい橙色粒を含む。 微細な白色粒を含む。	
25	〃	深鉢 口縁部	Ⅳ層				横、斜め方向の貝殻条痕文	丁寧なナデ 風化気味	〃	にぶい黄橙	浅黄橙	1mm大の白色粒を含む。 黒色、透明の光沢粒を含む。	スス付着
26	〃	深鉢 口縁部	〃				横方向の貝殻条痕文 貝殻腹縁刺突文	丁寧なナデ 著しい風化	〃	にぶい黄橙	灰黄褐	1～2mm大のにぶい橙色、白色粒を含む。 微細な透明の光沢粒を含む。	
27	〃	深鉢 口縁部	〃				斜め方向の貝殻条痕文 風化気味	丁寧なナデ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1～2mm大の橙色粒を含む。 1mm大の白色粒を含む。	
28	〃	深鉢 口縁部	〃				丁寧なナデ 風化気味 貝殻条痕文	ナデ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm大の白色粒を含む。 微細な透明の光沢粒を含む。	
29	〃	深鉢 口縁部	〃				著しい風化	丁寧なナデ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰白色粒を含む。 1mm以下の灰色粒を多く含む。 微細な乳白色粒を多く含む。	
30	〃	深鉢 口縁部	〃				斜め方向の貝殻条痕文	丁寧なナデ 指押さえ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の透明な光沢粒を含む。 1mm以下の灰白色粒を含む。 微細な透明の光沢粒を多く含む。	
31	〃	深鉢 口縁部	〃	(25．0)			横方向に貝殻条痕文	丁寧なナデ	〃	浅黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の白色、褐白色粒を含む。 1mm以下の透明、黒色の光沢粒を含む。	残存率 口縁部　1／8

【土器観察表①】

番号	種別	器種 部位	出土 地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
32	縄文 土器	深鉢 口縁部	Ⅳ層				横方向に貝殻条痕文	丁寧なナデ	良好	灰黄	灰黄	1mm以下の浅黄橙色、灰白色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	
33	〃	深鉢 口縁部～胴部	〃				横方向に貝殻条痕文 指押さえ	丁寧なナデ 指押さえ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1～2mmの浅黄橙色を含む。 1mm以下の白色粒を含む。 微細な透明光沢粒、黒色光沢粒を含む。	
34	〃	深鉢 胴部	〃				横方向のナデ 横方向に貝殻条痕文	丁寧なナデ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1～2mmの浅黄橙色粒を含む。 微細な白色粒、透明光沢粒を含む。	
35	〃	深鉢 胴部	〃				横方向のナデ 貝殻条痕文	丁寧なナデ	〃	にぶい黄橙	灰黄褐	1～2mmの浅黄橙色粒を含む。 微細な白色粒、透明光沢粒を含む。	
36	〃	深鉢 胴部	〃				横方向に貝殻条痕文	丁寧なナデ	〃	にぶい赤褐	にぶい橙	1～3mmのにぶい黄橙色粒を含む。 1mm以下の黒色光沢粒、微細な白色粒を含む。	
37	〃	深鉢 胴部	一括				横方向に貝殻条痕文	丁寧なナデ	〃	にぶい黄橙	黄橙	1～2mmの橙色粒を含む。 微細な白色粒を含む。	
38	〃	深鉢 胴部	Ⅳ層				横方向に貝殻条痕文 全体的に風化	丁寧なナデ	〃	にぶい黄橙	灰黄褐	3mm以下の赤色粒をわずかに含む。 3mm以下の明黄褐色粒を含む。 微細な灰白色粒、透明光沢粒を含む。	
39	〃	深鉢 胴部	〃				斜め方向に貝殻条痕文全体的に風化	ナデ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄褐	1mm大の橫橙色粒を含む。 微細な灰白色粒及び透明光沢粒を含む。	
40	〃	深鉢 胴部	〃				横方向に貝殻条痕文	ナデ	〃	にぶい黄橙	灰黄褐	微細な黒色光沢粒、灰白色粒、褐灰色粒を含む。	
41	〃	深鉢 胴部	〃				横方向のナデ	横方向のナデ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1～3mm浅黄橙色粒を含む。 1mm以下の褐灰色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	
42	〃	深鉢 胴部	〃				貝殻条痕文(一部剥離)	丁寧なナデ 指押さえ	〃	にぶい黄橙	灰黄褐	1～2mmの浅黄橙色粒、灰白色を多く含む。 1mm以下の黒色光沢粒、透明光沢粒を含む。	
43	〃	深鉢 胴部	Ⅴ層				斜め方向の貝殻条痕文	ナデ	〃	にぶい赤褐	にぶい橙	1mm大の褐色粒を含む。 微細な白色粒を含む。	
44	〃	深鉢 口縁部	Ⅳ層				粗いナデ 横方向のナデ	横方向のナデ	〃	にぶい黄橙	黄灰	1mm以下のにぶい黄橙色、赤褐色、白色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	
45	〃	深鉢 口縁部	〃				ナデ 指押さえ	ナデ 指押さえ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1～2mmの橙色粒を含む。 1mm以下の白色粒を含む。	
46	〃	深鉢 口縁部	Ⅴ層				横方向のナデ 未貫通の穿孔	ナデ	〃	にぶい黄橙	にぶい灰黄褐	2mm大の灰色粒を含む。 微細な灰白色粒、透明光沢粒を含む。	
47	〃	深鉢 底部付近	Ⅳ層				横方向のナデ やや風化	ナデ	〃	明黄褐	黄橙	1～2mmの橙色粒を含む。 微細な白色粒を含む。	
48	〃	深鉢 胴部～底部	〃		(5.9)		ナデ	ナデ 風化	〃	にぶい黄橙	橙	1～2mmの白色・黒褐色粒を含む。 微細な白色粒を含む。	残存率 底部1／2
49	〃	深鉢 胴部	Ⅱ層				ナデ　風化	ナデ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の白色、褐灰色粒を含む。 微細な黒色光沢粒、不透明光沢粒を含む。	
50	〃	深鉢 底部	Ⅳ層		(3.8)		ナデ	ナデ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄	1mm以下の灰白色粒を多く含む。 微細な透明光沢粒を多く含む。	残存率 底部　1／6
51	〃	深鉢 底部	〃		(6.6)		ナデ 全体的に風化	ナデ 風化	〃	にぶい黄橙	褐灰 にぶい黄橙	10mm大の灰色小石、1mm大の赤褐色粒、1mm以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を多く含む。	残存率 底部　1／5
52	〃	深鉢 底部	〃		(8.4)		丁寧なナデ	丁寧なナデ	〃	橙	橙	1～2mmの褐灰色粒、1mm以下の白色、灰白色粒を含む。 微細な不透明の光沢粒を含む。	残存率 底部　1／6
53	〃	深鉢 底部付近	〃				丁寧なナデ	丁寧なナデ	〃	橙	橙	1mm以下の白色、にぶい橙色粒を含む。 微細な透明・不透明・黒色光沢粒を含む。	
54	〃	深鉢 底部	〃				丁寧なナデ 風化	丁寧なナデ	〃	にぶい黄橙	灰黄	1mm以下の黄灰色、浅黄橙色粒を含む。 微細な白色粒を含む。	
55	〃	深鉢 胴部	〃				楕円押型文	丁寧なナデ	〃	にぶい赤褐	にぶい褐	1mm以下の褐色粒を含む。 微細な白色粒、透明な光沢粒を含む。	

【土器観察表②】

番号	種別	器種 部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
56	縄文土器	深鉢 胴部	カクラン				山形押型文	ナデ 風化	良好	橙	褐灰	2mm以下の灰白色粒、1～2mmの黒色光沢粒、1mm以下の黒色粒を含む。	
68	弥生土器	甕 口縁部～底部	SA1 SA4	24．4	4．0	32．1	斜め方向のハケ目 底部付近は縦方向のハケ目	斜め方向のハケ目	〃	にぶい黄褐	黄褐	4mm大の灰白色粒、3mm以下の暗灰色粒、1mm以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む。	スス付着 残存率　2／3
69	〃	甕 口縁部～底部	SA1	(17．0)	2．8	21．1	斜め方向のハケ目	斜め方向のハケ目 植物痕	〃	灰黄褐	にぶい黄褐	3mm大の灰白色、灰褐色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	スス付着 ほぼ完形
70	〃	甕 口縁部～底部	〃	(19．0)	4．2	22．5	縦方向のハケ目 著しい風化	斜め方向のハケ目 風化	〃	浅黄橙	浅黄橙	2mm大の褐色、乳白色、黒色粒を含む。	ほぼ完形
71	〃	甕 口縁部～胴部	SA1 SA2	(15．3)			ナデ 指押さえ	ナデ 指押さえ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm大の灰白色粒を含む。	スス付着 残存率　1／6
72	〃	甕 口縁部	SA1	(22．0)			斜め方向のハケ目	斜め方向のハケ目	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の褐色粒、1mm大の褐灰色粒、1mm以下の灰白色粒を含む。	スス付着 残存率　口縁部 1／10
73	〃	甕 頸部～胴部	〃				斜め方向のハケ目 底部付近は縦方向のハケ目	斜め方向のナデ	〃	橙 にぶい黄橙	にぶい黄褐	4mm大の赤褐色粒をわずかに含む。 4mm以下の白灰色、微細な透明光沢粒を多く含む。	スス付着
74	〃	甕 胴部～底部	〃		4．2		縦・斜め方向のハケ目　指押さえ	縦・斜め方向のハケ目　指押さえ	〃	浅黄橙	にぶい黄橙	2mm大の白色粒をわずかに含む。 微細な白色・褐色粒を含む。	スス付着
75	〃	甕 底部	〃		4．2		工具痕	ナデ 工具痕	〃	にぶい橙	黒褐	2mm大の灰色・橙色粒を含む。 1mm以下の白色・橙色粒、透明な光沢粒を含む。	スス付着
76	〃	壺 口縁部～底部	〃	(10．7)	3．5	26．3	斜め方向のナデ 縦方向のミガキ 指押さえ	ナデ 工具痕	〃	にぶい橙	にぶい橙	8mm以下の褐灰色粒、5mm以下の灰白色粒、微細な不透明光沢粒を含む。	スス付着 残存率4／5
77	〃	壺 口縁部	〃				工具による横方向のナデ	工具による横方向のナデ	〃	浅黄橙	浅黄橙	4mm大の灰赤色粒、2mm大の褐灰色粒を含む。	
78	〃	壺 頸部～胴部	〃				斜め・横方向のハケ目	斜め方向のハケ目	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm大の灰白色、にぶい赤褐色粒、1mmの黒色光沢粒を含む。 微細な透明の光沢粒を含む。	スス付着
79	〃	小型壺 胴部	〃				斜め・横方向のハケ目	丁寧なナデ	〃	黄灰	黄灰	2mm大の白色粒をわずかに含む。 1mm以下の不透明・透明の光沢粒を含む。	
80	〃	高坏 裾部	〃		(24．0)		ナデ	斜め方向のハケ目	〃	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の白色粒、黒色粒を含む。	残存率 裾部1／14
81	〃	小型手づくね 脚部	〃		(6．2)		ナデ(手づくね)	ナデ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の灰白色の光沢粒をわずかに含む。	残存率 裾部1／6
83	〃	甕 口縁部～底部	SA2	17．3	(2．4)	19．1	ハケ目	ハケ目	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の灰白色粒、2mmの透明光沢粒、1mmの褐灰色粒を含む。	スス付着 完形
84	〃	甕 口縁部～胴部	〃	(20．4)			縦・斜め・横方向のハケ目	斜め・横方向のハケ目	〃	浅黄橙	にぶい黄橙	2．5mm以下の乳白色、褐色粒を含む。	残存率 口縁部1／6 スス付着
85	〃	甕 口縁部	〃	(19．6)			ハケ目 丁寧な横ナデ	横方向のハケ目 ナデ	〃	灰黄褐	にぶい黄	2mm大の灰白色粒をわずかに含む。 2mm以下の赤褐色粒、微細な透明光沢粒を少し含む。	残存率 口縁部1／6
86	〃	甕 口縁部	〃				斜め方向のハケ目	横方向のハケ目	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下のにぶい橫橙色粒を含む。 1mm大の黒褐色粒、微細な透明光沢粒をわずかに含む。	
87	〃	甕 胴部	〃				縦方向のハケ目	ナデ 風化	〃	にぶい褐	にぶい橙	2mm大の赤色粒をわずかに含む。 微細な透明光沢粒、灰白色粒を含む。	
88	〃	甕 胴部～底部	〃		(5．3)		縦方向のハケ目 ナデ	縦方向の工具のナデ 全体的に風化	〃	にぶい橙	にぶい橙	3mm以下の黒褐色、にぶい褐色粒を含む。 2mm以下の赤褐色、褐灰色、灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む。	残存率 底部　100%
89	〃	甕 胴部～底部	〃		(4．7)		著しい風化 わずかな工具痕	著しい風化 わずかな工具痕	〃	にぶい橙	にぶい黄橙	3mm大の暗灰色粒を含む。 1mm以下の灰白色粒を含む。	残存率 底部　1／2
90	〃	壺 口縁部	〃	(15．0)			櫛描波状文 ナデ ハケ目	横方向のナデ ハケ目	〃	にぶい橙	にぶい黄橙	4mm大の灰褐色粒、2mm以下のにぶい赤褐色粒を含む。 1mm以下の黒褐色粒を含む。	残存率 口縁部　1／8
91	〃	壺 頸部～胴部	〃				縦・斜め方向のハケ目	丁寧なナデ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰白色・にぶい橙色を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	

【土器観察表③】

番号	種別	器種 部位	出土 地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
92	弥生 土器	壺 底部	SA2		(3．2)		著しい風化のため不明	ナデ 指押さえ	良好	浅黄橙	褐灰	1mm大の乳白色、橙色、透明な光沢粒を含む。	残存率 底部 2／3
93	〃	高坏 坏部	〃	(34．0)			縦・横・斜め方向のハケ目	ハケ目 丁寧なナデ	〃	浅黄橙	橙	1mm以下の白色粒を含む。	残存率 口縁部 1／8
94	〃	高坏 坏部	〃	(22．6)			丁寧なナデのあと縦方向のハケ目	丁寧なナデのあと斜め方向のハケ目	〃	にぶい橙	にぶい赤褐	2mm以下の赤褐色粒、1mm以下の灰白色粒を含む。 微細な光沢粒をわずかに含む。	残存率 坏部 1／17
95	〃	高坏 坏部	〃	(18．5)			ハケ目 丁寧なナデ	斜め方向のハケ目	〃	橙	橙	3mm以下の白灰色粒を含む。 1mm以下の透明光沢粒、赤褐色粒を含む。	残存率 坏部 1／15
96	〃	高坏 坏部	〃	(23．4)			工具によるナデ	丁寧なナデ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm大の灰褐色粒を含む。 微細な灰白色・透明光沢粒を含む。	残存率 坏部 1／7
97	〃	高坏 坏部	〃	(19．8)			縦・横・斜め方向のハケ目	丁寧なナデ	〃	浅黄橙	浅黄橙	微細な白色、橙色粒を含む。	残存率 坏部 1／18
98	〃	高坏 坏部	〃				縦・横方向のハケ目 横方向のナデ	ハケ目	〃	浅黄橙	橙	微細な灰色、橙色、白色粒を含む。	
99	〃	高坏 坏部	〃				ナデ	ナデ	〃	にぶい黄橙 灰黄褐	にぶい黄褐	1mm以下の乳白色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	
100	〃	高坏 裾部	〃		(23．1)		縦方向のミガキ ハケ目 透孔	ハケ目	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰白色粒を含む。 2mm以下の褐灰色、にぶい橙色粒を含む。	残存率 裾部 1／5
102	〃	甕 口縁部～頸部	SA3	(19．2)			横方向のナデ 指押さえ	斜め方向のナデ 横方向のハケ目	〃	橙	にぶい橙 にぶい黄橙	2mm以下の灰白色粒、赤褐色粒を含む。 微細な透明光沢粒、黒色粒を含む。	残存率 口縁部 1／6
103	〃	甕 胴部～底部	〃		(3．0)		縦方向の工具痕 ハケ目	縦方向のナデ 工具痕 指押さえ	〃	橙	橙	2mm以下の灰白色粒、赤褐色粒を含む。 微細な透明光沢粒、黒色粒を含む。	残存率 底部 100% スス付着
105	〃	甕 口縁部～底部	SA4	(22．6)	4．2	36．6	斜め方向のハケ目	斜め方向のハケ目	〃	にぶい黄橙	灰黄褐	3mm以下のにぶい橙色、灰褐色、灰白色粒、1mm大の黒色光沢粒、微細な透明光沢粒を含む。	残存率 口縁部1／4
106	〃	甕 口縁部～底部	〃	19．8	5．1	32．7	横方向のナデ 斜め方向のハケ目	斜め方向のハケ目 指押さえ	〃	にぶい橙	にぶい橙	5mm大の灰黄褐色、褐灰色粒を含む。 2mmの赤褐色、灰白色粒を含む。 微細な透明光沢粒を多く含む。	ほぼ完形
107	〃	甕 口縁部～底部	〃	21．0	5．5	21．6	ハケ目 工具痕	工具によるナデ 指押さえ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5～8mm大の灰色粒を含む。 5mm大の灰白色、褐灰色粒を多く含む。 微細な透明光沢粒を多く含む。	スス付着
108	〃	甕 口縁部～底部	〃	15．6	3．9	18．2	横・斜め方向のハケ目　指押さえ	横・斜め方向のハケ目　指押さえ	〃	淡橙	にぶい橙	2mm大の黒色、灰色、褐色粒を含む。 1mm大の乳白色粒を含む。	ほぼ完形
109	〃	甕 口縁部～底部	〃	14．3	5．7	19．2	斜め方向のハケ目 縦方向のナデ 指押さえ	ハケ目 指押さえ 底部付近は著しい凹凸	〃	浅黄橙	浅黄橙	6mm大の褐灰、灰褐色粒を含む。 4mm大の灰色粒、7mm大の褐色粒を含む。	残存率 口縁部 2／3 底部 100%
110	〃	甕 口縁部～底部	〃	13．6	2．1	18．9	縦方向のハケ目 縦方向のナデまたはミガキ	横・斜め方向のハケ目	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm大のにぶい赤褐色、黒褐色粒を含む。 4mm大の灰白色粒、1mm大の透明光沢粒を含む。	残存率 1／4
111	〃	甕 口縁部～胴部	〃	(24．0)			横・斜め方向のハケ目	斜め方向のハケ目	〃	にぶい橙	淡橙	2mm大の黒色、灰色、乳白色の粒を含む。 1mm以下の橙、乳白色、透明光沢粒を含む。	残存率 1／3
112	〃	甕 口縁部～胴部	〃	(23．0)			粗い仕上げで一部ハケ目あり 指押さえ	斜め方向のハケ目 指押さえ	〃	褐灰	灰黄褐	7mm大の灰白色粒、3mm大の褐、にぶい橙色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	残存率 頸部 1／2 スス付着
113	〃	甕 口縁部～胴部	〃	18．2			斜め方向のハケ目 縦方向の工具によるナデ	ナデ ハケ目	〃	淡黄	淡黄	6mm大の灰白色粒を含む。 3mm大の灰褐色粒を含む。	残存率 口縁部 100% スス付着
114	〃	甕 口縁部～胴部	〃	(18．4)			縦・斜め方向のハケ目　指押さえ	横・斜め方向のハケ目　指押さえ	〃	にぶい橙	にぶい黄橙	3mm大の褐灰色、灰白色粒を含む。 2mm大の黒褐色粒、1mm大の透明光沢粒を含む。	残存率 口縁部 4／5 スス付着
115	〃	甕 口縁部	〃	(15．8)			横・斜め方向のハケ目口唇部付近は縦方向のハケ目	斜め方向のハケ目	〃	灰黄	灰黄褐	1mm大の灰白色、褐色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	残存率 口縁部1／8
116	〃	甕 口縁部	〃	(14．6)			斜め方向のハケ目 指押さえ 工具によるナデ	斜め方向のハケ目	〃	灰黄	灰黄褐	3mm大のにぶい黄橙色粒、2mm大の灰白色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	残存率 口縁部1／8
117	〃	甕 口縁～頸部	〃	(15．0)			全体的に風化し、一部ハケ目残り	風化が進み、一部斜め方向のハケ目残り	〃	浅黄橙	浅黄橙	1～2mm大の灰色、褐色粒を含む。 微細な白色粒を含む。	残存率 口縁部1／12 頸部1／4

【土器観察表④】

番号	種別	器種 部位	出土 地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
118	弥生 土器	甕 口縁部	SA4				斜め方向のハケ目 指押さえ	斜め方向のハケ目 指押さえ	良好	淡橙	浅黄橙	1～2mm大の褐色、灰色粒を含む。 微細な白色粒を含む	
119	〃	甕 口縁部	〃				斜め方向のハケ目	斜め方向のハケ目	〃	浅黄	浅黄	4mm大の褐灰色粒、2mm大の灰白色粒を含む。 微細な黒色光沢粒を含む。	スス付着
120	〃	甕 口縁部	〃				著しい風化のため調整不明	著しい風化のため調整不明	〃	浅黄橙	黄橙	1mm～2mm大の灰色、橙色粒を含む。 微細な乳白色粒、透明光沢粒を含む。	
121	〃	甕 口縁部	〃				縦方向のハケ目 指押さえ	丁寧ナデ	〃	灰白	浅黄橙	2mm大の橙色、灰色、褐色粒を含む。 1mm以下の乳白色粒を含む。	
122	〃	甕 口縁部	〃				ハケ目	ミガキ	〃	淡橙	にぶい橙	1～2mm大の褐色粒をわずかに含む。 微細な白色粒を含む。	残存率 口縁部1／12 スス付着
123	〃	甕 口縁部	〃				ナデ 指押さえ	著しい風化	〃	浅黄橙	浅黄橙	3mm大の灰褐色粒を含む。 1mm大の褐色粒を含む。	スス付着 口縁部　1／10
124	〃	甕 口縁部	〃				斜め方向のハケ目	斜め方向のハケ目 端部は横方向のハケ目　指押さえ	〃	浅黄橙	にぶい橙	微細な乳白色粒をわずかに含む。	
125	〃	甕 口縁部	〃				縦方向のハケ目	斜め方向のハケ目	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm大の黒褐色、褐灰色、灰白色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	
126	〃	甕 頸部～底部	〃		(7．3)		斜め方向のハケ目 工具によるナデ	斜め方向のハケ目	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm大の明赤灰色、灰白色粒を少し含む。 微細な透明光沢粒を多く含む。	
127	〃	甕 頸部～胴部	〃				ハケ目 工具による縦方向のナデ	斜め方向のハケ目 工具によるナデ	〃	灰黄	灰黄	3mm大の灰褐色、灰白色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	
128	〃	甕 胴部	〃				縦・斜め方向の丁寧なハケ目 底部は縦方向のナデ	斜め方向のナデ	〃	にぶい黄橙	灰黄	3mm大の褐灰色粒、2mm大の灰白色粒を含む。	スス付着
129	〃	甕 胴部	〃				縦・斜め方向の丁寧なハケ目 底部は縦方向のナデ	斜め方向のナデ	〃	にぶい黄橙	灰黄	3mm大の褐灰色粒、2mm大の灰白色粒を含む。	スス付着
130	〃	甕 胴部	〃				縦・斜め方向の丁寧なハケ目	斜め方向のハケ目、ナデ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3～5mm大の褐灰色粒、にぶい褐色粒を含む。 微細な灰白色粒、透明光沢粒を含む。	
131	〃	甕 胴部	〃				ナデ	ナデ	〃	灰黄	にぶい黄橙	5mm大の灰白色粒、3mm大の黒褐色粒を含む。 1mm大のにぶい黄橙色粒を含む。	
132	〃	甕 底部付近	〃				縦方向のハケ目	ハケ目 ナデ	〃	にぶい黄橙	黒	3mm大の灰白色、黒褐色粒、2mm大の褐灰色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	
133	〃	甕 胴部～底部	〃		(5．0)		縦方向のミガキ	縦方向のナデ 縦・横・斜め方向のミガキ	〃	浅黄橙	灰白	3mm大の褐灰色、にぶい黄橙色粒を含む。 2mm大の黒褐色粒を含む。	残存率 底部　1／3
134	〃	甕 胴部～底部	〃		4．0		全体的に風化 縦方向のケズリ	全体的に風化 ナデ	〃	淡黄	浅黄	2mm大の褐色、灰色粒を含む。 1mm以下の乳白色粒、透明光沢粒を含む。	残存率 底部　100%
135	〃	壺 胴部～底部	〃		(5．0)		斜め方向のハケ目	斜め方向のハケ目	〃	黄灰	黄灰	1mm以下の灰白色粒を含む。 微細な光沢粒を含む。	残存率 1／3
136	〃	甕 底部	〃		4．5		ナデ	ナデ	〃	にぶい黄橙	にぶい橙	3mm大の灰白色、にぶい赤褐色粒を含む。 2mm大の灰褐色粒を含む。	残存率 底部　100%
137	〃	甕 底部	〃		4．3		指押さえ 風化	ナデ	〃	にぶい橙	にぶい黄橙	3mm大の灰白色、褐灰色粒を含む。 1mm大の橙色粒を含む。	残存率 底部　100%
138	〃	甕 口縁部～底部	〃	(11．7)	4．0	(13．0)	縦方向のミガキ ハケ目	ハケ目のあと縦方向のミガキ 横方向のハケ目	〃	灰黄	にぶい橙	1～5mm大の灰白色粒を含む。 2～4mm大の黒褐色粒、明黄褐色粒を含む。	ほぼ完形
139	〃	小型甕 胴部～底部	〃		3．4		工具痕	工具によるナデ ハケ目	〃	にぶい橙	にぶい橙	4mm以下の褐灰色、灰白色粒を含む。 3mm以下の褐色粒を含む。 1mm以下の黒色粒を含む。	残存率 底部100%
140	〃	甕or壺 口縁部	〃				粗いナデ 指押さえ	斜め方向のハケ目	〃	にぶい橙	にぶい橙	1mm大の灰白色、褐灰色粒を含む。 微細な透明光沢粒、赤褐色粒を含む。	
141	〃	壺 口縁部	〃				粗いナデ 指押さえ	斜め方向のハケ目	〃	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の灰白色、褐灰色粒を含む。 微細な赤褐色粒、透明な光沢粒を含む。	

【土器観察表⑤】

番号	種別	器種 部位	出土 地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
142	弥生 土器	壺 口縁部	SA4				横方向のハケ目 櫛描波状文 指押さえ	横方向のナデ 一部ハケ目	良好	にぶい橙	にぶい黄	2mm大の黒色粒をわずかに含む。	
143	〃	壺 頸部	〃				全体的に風化 横方向のナデ	全体的に風化 斜め方向のナデ	〃	灰黄	灰黄	1mm大の灰白色、黒褐色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	
144	〃	壺 底部	〃		(5.8)		ナデ 一部ハケ目	ハケ目	〃	灰黄	黒	2mm大の灰白色粒、3mm大の灰褐色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	残存率 底部 1／3
145	〃	壺 底部	〃		(4.8)		縦方向のミガキ 全体的に風化	全体的に風化 縦方向のナデまたは ミガキ	〃	浅黄橙	浅黄橙	3mm大の灰褐・灰白色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	残存率 底部 1／2
146	〃	鉢 口縁部～底部	〃	(13.8)			ヘラケズリ	縦・斜め方向のハケ目	〃	黄灰	黄灰	2～3mm大の褐色、灰色粒を含む。 1mm以下の乳白色、透明光沢粒を含む。	残存率1／2
147	〃	小型土器 口縁部～底部	〃	(12.5)	4.1	9.0	全体的に風化 斜め方向のハケ目 指押さえ	全体的に風化 指押さえ	〃	灰黄	灰白	6mmの灰白色、5mmの灰黄色の粒を含む。 5mmの黒色の光沢粒、微細な透明の光沢粒を含む。	残存率 口縁部 1／10 底部 1／2
148	〃	鉢 口縁部	〃				横・斜め方向のハケ目	丁寧なナデ 一部ハケ目 指押さえ	〃	浅黄橙	浅黄橙	1mm大の褐色粒を含む。 微細な乳白色粒を含む。	
149	〃	鉢 口縁部	〃				風化が著しく調整不明	横・斜め方向のハケ目	〃	灰黄	にぶい黄橙	1mm大の灰白色、灰褐色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	残存率 1／12
150	〃	鉢 胴部～底部	〃		(2.8)		全体的に風化 一部工具のナデ	斜め方向のハケ目 指ナデ	〃	黄灰 黒褐	灰黄褐	微細な透明光沢粒、灰白色粒を含む。	残存率 底部 1／3
151	〃	高坏 坏部～脚部	〃	29.5	21.2 (裾部径)	23.8	坏部～横方向のナデ 横・斜め方向のハケ目 脚部～ハケ目	坏部～ハケ目 ミガキ 脚部～ナデ 横・斜め方向のハケ目	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙 浅黄橙	5mm大の灰白色粒を含む。 1mm大の褐灰色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	残存率 坏部 3／4 脚裾部 100%
152	〃	高坏 坏部	〃	(25.9)			ハケ目のあとミガキ	ミガキ	〃	にぶい橙	にぶい橙	1mm大の灰白色粒をわずかに含む。 微細な透明光沢粒を含む。	残存率 坏部1／5
153	〃	高坏 坏部	〃	(29.4)			斜め方向のミガキ 一部ハケ目	縦・斜め方向のミガキ	〃	浅黄橙	にぶい橙	1mm大の灰色、褐色粒を含む。 微細な白色、黒色光沢粒を含む。	残存率 頸部1／5
154	〃	高坏 坏部	〃	(25.6)			斜め方向のミガキ 一部ハケ目	斜め方向のミガキ	〃	淡橙	にぶい橙	4mm大の灰色粒を含む。 1mm以下の白色粒を含む。	残存率 口縁部1／7
155	〃	高坏 坏部	〃	(25.8)			全体的に風化 横方向のナデ 縦方向のミガキ	全体的に風化 縦方向のミガキ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm大の灰白色、褐色粒を含む。 微細な黒色粒を含む。	残存率 口縁部1／16
156	〃	高坏 坏部	〃	(28.0)			全体的に風化 丁寧なナデ	全体的に風化 丁寧なナデ	〃	にぶい橙	にぶい黄橙	2～3mm大の灰白色粒を含む。 微細な黒褐・褐色粒を含む。	残存率 口縁部1／12
157	〃	高坏 坏部	〃				横方向のハケ目のあと縦方向のミガキ	横方向のハケ目のあと縦方向のミガキ	〃	にぶい橙	にぶい橙	2mm大の灰白色、褐白色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	残存率 坏部1／12
158	〃	高坏 坏部	〃				全体的に風化 縦方向のミガキ	全体的に風化 縦方向のミガキ	〃	にぶい橙	にぶい橙	2mm大の灰白色粒を含む。 微細な透明光沢粒、黒色粒を含む。	残存率 坏部 1／12
159	〃	高坏 脚部	〃				全体的に風化 縦方向のミガキ ナデ 透孔あり	横・斜め方向のハケ目	〃	橙	橙	2～3mm大の灰白色、褐灰色粒を含む。 1mm大の褐色、灰褐色、赤褐色、黒褐色粒を含む。	
160	〃	高坏 脚裾部	〃				縦方向のミガキ 透孔あり	横・斜め方向のハケ目	〃	浅黄橙	にぶい黄橙	1mm大の黒色粒、微細な乳白色粒を含む。	残存率 脚部1／2
161	〃	高坏 脚部	〃				全体的に風化 縦方向のミガキ	直径2mm幅の穿孔 1箇所あり ナデ	〃	浅黄橙	浅黄橙	2mm大の灰白色、褐灰色粒を含む。 1mm大の透明光沢粒、黒褐色粒を含む。	
162	〃	高坏 脚裾部	〃		(21.2) (裾部径)		ナデのあと縦方向のミガキ	横方向のナデのあと斜め方向のハケ目	〃	にぶい橙	にぶい橙	1mm大の灰白色、黒褐色、橙色の粒を含む。	残存率 裾部1／8
163	〃	高坏 脚裾部	〃		(22) (裾部径)		横方向のナデのあと縦方向のミガキ	横方向のナデのあとミガキ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm大の灰白色粒を含む。 1mm大の褐配色の粒を含む。 微細な黒色粒を含む。	残存率 裾部1／9
164	〃	高坏 脚裾部	〃				斜め方向のハケ目のあとミガキ 透孔が一部残り	斜め方向のハケ目	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な灰白色粒を含む。 微細な灰色光沢粒を含む。	
165	〃	高坏 脚裾部	〃		(15) (裾部径)		横方向のナデ 斜め方向ハケ目	丁寧なナデ	〃	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の乳白色粒を含む。	残存率 裾部1／12

【土器観察表⑥】

	種別	器種 部位	出土 地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
166	弥生 土器	高坏 脚裾部	SA4		(18. 2) (裾部径)		全体的に風化 ナデのあとミガキ	全体的に風化 横方向のナデ	良好	にぶい橙	にぶい橙	3mm大の灰白色粒、1mm大の褐色粒を含む。 微細な黒色粒を含む。	残存率 裾部1／10
167	〃	高坏 脚裾部	〃				丁寧なナデ	横・斜め方向のハケ目	〃	淡橙	にぶい橙	1mm大の乳白色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	
168	〃	杓子状土器 取手部	〃				ナデ　凹凸あり	指押さえ	〃	にぶい黄橙	灰黄褐	1mm大の灰白色、褐白色の粒を含む。 微細な透明光沢粒、黒色粒を含む。	
176	〃	甕 口縁部～底部	SA5	(20. 4)	4. 0	33. 4	縦・斜め方向のハケ目ー部ミガキ	縦・横・斜め方向のハケ目 指押さえ	〃	にぶい橙	淡橙	2mm以下の褐色粒をわずかに含む。 微細な乳白色粒、透明光沢粒を含む。	残存率 口縁部　1／2 胴部2／3
177	〃	甕 口縁部～胴部	〃	(24. 8)			横方向のナデ 縦方向の工具痕 指押さえ	工具による横方向のナデ 指押さえ	〃	浅黄橙	にぶい黄橙	4mm大の褐色、褐灰色粒を含む。 2mm大の灰白色粒を含む。	残存率 口縁部1／7
178	〃	甕 口縁部～胴部	〃	(25. 0)			全体的に風化 縦方向の工具痕 指押さえ	横・斜め方向のハケ目　工具による横方向のナデ	〃	浅黄橙	にぶい黄橙	6mm大の灰黄褐色、4mmの灰白色粒を含む。 2mmの褐灰色粒、微細な透明光沢粒を含む。	残存率 口縁部1／8
179	〃	甕 口縁部	〃				ナデ	横方向のナデ 斜め方向のハケ目	〃	浅黄橙	浅黄橙	4mmの褐灰色、赤褐色粒を含む。 1mmの灰白色、黒褐色粒を含む。	
180	〃	甕 口縁部	〃				横方向のナデ 縦方向のミガキ	横方向のナデ	〃	にぶい橫橙	にぶい黄橙	1mm大の灰白色粒を含む。 1mmの不透明の光沢粒、黒色光沢粒を含む。	
181	〃	甕 胴部	〃				全体的に風化 工具痕	全体的に風化 工具痕	〃	にぶい橙	にぶい黄橙	2mm以下の暗配色粒を含む。 微細な灰白色粒を含む。	
182	〃	甕 底部付近	〃				縦方向にハケ目	全体的に風化	〃	にぶい橫橙	黒	3mm大の褐灰色粒を含む。 1mm大の灰白色粒、にぶい橫橙色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	
183	〃	甕 底部付近	〃				全体的に風化	全体的に風化 ナデ	〃	にぶい橙	にぶい橙	1mm～2mm大の褐色、黒色、乳白色粒を含む。 微細な乳白色粒、黒色光沢粒を含む。	
184	〃	甕 底部付近	〃				全体的に風化	ナデ	〃	淡橙	浅黄橙	1mm大の褐色、白色粒を含む。 微細な黒色粒、透明光沢粒を含む。	
185	〃	甕or壺 底部	〃		4. 5		ナデ 部分的にハケ目	ナデ 部分的にハケ目	〃	褐灰	黒	3mm大の黒褐色粒を含む。 1mm大の灰白色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	残存率 底部　100%
186	〃	甕or壺 底部	〃		2. 2		粗い仕上げ	全体的に風化 ナデ	〃	灰黄褐	褐灰	2. 5mm大の灰白色粒を含む。 1mm大の褐灰色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	残存率 底部　100%
187	〃	甕or壺 底部	〃		2. 5		ナデ 一部工具痕	粗い仕上げ ハケ目	〃	浅黄	浅黄橙	3mm大の灰白色、褐灰色粒を含む。 1mm大の黒褐色粒を含む。	残存率 底部　100%
188	〃	壺 口縁部	〃	(15. 2)			櫛描波状文 連続刺突文 横方向のナデ	横方向のハケ目 指押さえ	〃	にぶい黄橙 にぶい橙	浅黄	4mm大の灰白色、2. 5mmの褐色の粒を含む。 1mm大の黒褐色の粒を含む。 微細な黒色の光沢粒を含む。	残存率 口縁部1／10
189	〃	壺 口縁部	〃	(13. 4)			櫛描波状文 縦方向のハケ目	全体的に風化 指押さえ	〃	浅黄橙	浅黄橙	1mm大の灰色、乳白色の粒を含む。 微細な透明の光沢粒を含む。	残存率 口縁部　1／8
190	〃	壺 口縁部	〃	(10. 6)			斜め方向のハケ目 縦方向の工具痕やミガキ	ナデ	〃	暗灰黄	灰黄	5mm大の浅黄橙色粒を含む。 4mm大の灰白色粒を含む。 3mm大の黒褐色粒を含む。	残存率 口縁部　1／6
191	〃	壺 口縁部	〃				ナデ 横方向のハケ目	斜め方向のハケ目 工具によるナデ	〃	浅黄橙	にぶい黄橙	2mm大の灰白色粒を含む。 微細な黒褐色・にぶい黒褐色粒を含む。	
192	〃	壺 口縁部	〃	(11. 2)			横方向のナデ 櫛描波状文	横方向のナデ	〃	にぶい黄橙	灰黄褐	2mm大のにぶい黄橙色の粒を含む。 1mm大の灰白色、褐灰色の粒を含む。 微細な透明の光沢粒を含む。	
193	〃	壺 口縁部	〃				横方向のナデ	風化が著しく調整不明	〃	浅黄橙	浅黄橙	3mm大のにぶい褐色粒を含む。 2mm大の褐灰色粒を含む。 1mm大の黒褐色粒を含む。	
194	〃	壺 頸部	〃				ハケ目 丁寧なナデ	ハケ目 丁寧なナデ	〃	にぶい橙	にぶい黄橙	2mm大の灰白色の粒を含む。 1mmの橙色、黒褐色の粒を含む。	
195	〃	壺 頸部	〃				全体的に風化 斜め方向のハケ目	全体的に風化 斜め方向のハケ目	〃	浅黄	橙	2mm以下の灰色粒、灰赤色粒を含む。 微細な灰色透明光沢粒、灰白色粒を含む。	
196	〃	壺 頸部	〃				斜め方向のハケ目	斜め方向のハケ目	〃	灰白	浅黄橙	3mm以下のにぶい赤褐色粒を含む。 1mm以下の灰色透明光沢粒を含む。	

【土器観察表⑦】

番号	種別	器種 部位	出土 地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
197	弥生 土器	壺 底部	SA5				ハケ目	工具によるナデ	良好	灰黄	黒	6mm大の灰白色粒を含む。 3mm大の灰色・灰褐色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	
198	〃	壺 底部	〃		(3.4)		全体的に風化 縦方向のミガキ	斜め方向のハケ目 一部工具痕	〃	にぶい黄橙	浅黄橙	3mm大の灰褐色粒を含む。 1mm大の灰白色、黒褐色粒を含む。 微細な透明、不透明の光沢粒を含む。	残存率 底部 1／3
199	〃	鉢 口縁部～底部	〃	(14.0)	2.7	7.9	縦方向のミガキ	斜め方向のミガキ	〃	にぶい橙	にぶい橙	3mm大の赤褐色粒を含む。 1mm大の灰白色、褐灰色、黒褐色粒を含む。	残存率 底部 1／2
200	〃	鉢 口縁部～底部	〃	(17.4)	4.1	14.9	全体的に風化 斜め方向のハケ目 縦方向のミガキ	横・斜め方向のナデ、ミガキ	〃	にぶい黄橙	浅黄橙	7mm大の灰白色粒、5mm大のにぶい黄褐色粒、3mm大の黒褐色、にぶい褐色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	残存率 底部 100%
201	〃	鉢 口縁部～底部	〃	13.2	5.4	12.8	縦・横・斜め方向のハケ目 指押さえ	全体的に風化 一部横方向のハケ目	〃	浅黄橙	浅黄橙	2mm大の灰色粒、橙色粒を含む。 1mm以下の乳白色粒、黒色光沢粒を含む。	完形
202	〃	鉢 口縁部～胴部	〃	(13.2)			縦方向のミガキ	各方向にハケ目 指押さえ	〃	にぶい橙	にぶい橙	3mm大の灰白色粒を含む。 3mm大の灰褐色粒を含む。	残存率 口縁部1／12
203	〃	鉢 口縁部～胴部	〃	(13.2)			縦方向のミガキ	各方向にハケ目 指押さえ	〃	にぶい橙	にぶい橙	3mm大の灰褐色粒を含む。 1mm大の灰白色粒を含む。	残存率 口縁部1／8
204	〃	小型甕or壺 底部	〃		(4.9)		全体的に風化 ナデ 一部工具痕	全体的に風化 ナデ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm大のにぶい褐色粒を含む。 微細な灰白色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	残存率 底部 1／5
205	〃	高坏 坏部	〃	(23.6)			縦方向のミガキ	縦方向のミガキ 工具によるナデ	〃	にぶい橙	にぶい赤褐	2mm大の灰白色粒、微細な白灰色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	残存率 坏部 1／8
206	〃	高坏 坏部	〃	(20.3)			斜め方向のミガキ ナデ	横方向のナデ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm大の褐灰色粒を含む。 1mm大の灰白色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	残存率 坏部1／10
207	〃	高坏 坏部	〃	(25.8)			縦・横方向のミガキ 櫛描波状文	縦方向のハケ目	〃	にぶい橙	にぶい黄橙	1mm大の灰白色、褐灰色の粒を含む。 微細な黒褐色の粒、黒色光沢粒を含む。	
208	〃	高坏 坏部	〃				縦・横方向のミガキ	縦方向のハケ目 ミガキ	〃	にぶい黄橙	にぶい橙	1mm大の灰白色、褐灰色の粒を含む。 微細な黒褐色の粒を含む。 黒色の光沢粒を含む。	
209	〃	高坏 脚裾部	〃		(22.4) 裾部径		工具による粗い仕上げ指押さえ	ハケ目 指押さえ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm大の褐灰色、にぶい赤褐色粒を含む。 微細な灰白色粒、黒褐色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	残存率 裾部 1／6
210	〃	高坏 脚裾部	〃		(24.0) 裾部径		横方向の工具によるナデ ミガキ	横方向の工具によるナデ 縦方向のミガキ	〃	黒褐色	黒	2mm大の白灰色粒、微細な白灰色粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	残存率 裾部 1／6
211	〃	高坏 脚裾部	〃		(24.1) 裾部径		ハケ目のあと縦方向のミガキ	ハケ目	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm大の灰白色の粒を含む。 1mm大の黒色の光沢粒を含む。 微細な黒褐色の粒を含む。	残存率 裾部 1／4
212	〃	高坏 脚裾部	〃		(20.3) 裾部径		工具による粗い仕上げ指押さえ	ハケ目 指押さえ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm程度のにぶい赤褐色粒を含む。 微細な灰白色、黒褐色の粒を含む。	残存率 裾部 1／7
213	〃	高坏 脚裾部	〃		(18.6) 裾部径		縦・横方向のミガキ	横・斜め方向のナデ 工具痕	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm大のにぶい黄橙色の粒を含む。 1mmの透明の光沢粒、褐色の粒を含む。	残存率 裾部 1／8
214	〃	高坏 脚裾部	〃		(16.6) 裾部径		縦方向のミガキ ナデ	横方向のナデ	〃	橙	橙	2mm大の灰褐食の粒を含む。 2mmの灰白色、褐灰色の粒を含む。 微細な透明の光沢粒を含む。	残存率 裾部 1／8
215	〃	高坏 脚裾部	〃		(16.8) 裾部径		全体的に風化 ナデ	全体的に風化　一部ハケ目またはミガキ	〃	浅黄橙	浅黄橙	4mm大のにぶい橙色、灰褐色の粒を含む。 2mm大の赤褐色の粒を含む。	残存率 裾部 1／8
216	〃	高坏 脚裾部	〃		(8.7) 裾部径		縦方向のミガキ	ミガキ ナデ 斜め方向の工具ナデ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm大の黒褐色、灰白色の粒を含む。 4mm大の褐色の粒を含む。 微細な透明の光沢粒を含む。	残存率 底部 1／5
217	〃	高坏 脚裾部	〃		(11.8) 裾部径		ミガキ	丁寧なナデ	〃	にぶい橙	にぶい橙	2mm大の褐色、灰色の粒を含む。 微細な乳白色の粒を含む。	残存率 裾部 1／7
218	〃	高坏 脚裾部	〃				ナデ 一部横方向の工具によるナデ	ナデ	〃	にぶい黄橙	暗灰	1mmの灰白色、黒色、褐灰色の粒を含む。 1mmの透明の光沢粒を含む。	
219	〃	高坏 脚裾部	〃		(17.6) 裾部径		縦・斜め方向のミガキ 横方向のミガキ、ナデ	斜め方向のミガキ	〃	橙	橙	2mm大の灰白色、褐灰色の粒を含む。 1mm大の黒褐色、赤褐色の粒を含む。	残存率 裾部 1／14
220	〃	高坏 脚裾部	〃		(18.0) 裾部径		縦方向のミガキ 工具痕	横方向のナデ	〃	橙	にぶい橙	2mm大の褐灰色、黒褐色の粒を含む。 3mm大の灰白色の粒を含む。 微細な透明の光沢粒を含む。	残存率 裾部 1／14

【土器観察表⑧】

番号	種別	器種 部位	出土 地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
221	弥生 土器	高坏 脚裾部	SA5				全体的に風化 縦方向のハケ目	全体的に風化 横方向のハケ目	良好	浅黄	浅黄	3mm大の灰褐色粒を含む。 微細な赤褐色、灰白色、黒褐色粒を含む。	残存率 裾部1／10
222	〃	高坏 脚裾部	〃				工具による粗い仕上げ指押さえ	ハケ目 指押さえ	〃	褐灰	灰黄褐	1mm大の褐灰色の粒を含む。 微細な透明光沢粒、灰白色の粒を含む。	
223	〃	高坏 脚裾部	〃				ナデ	粗い仕上げ	〃	淡橙	にぶい橙	1mm以下の褐色、灰色、透明の光沢粒を含む。	残存率 裾部 1／18
224	〃	高坏 脚裾部	〃		(15. 0) 裾部径		斜め方向のハケ目 縦方向の工具ナデ	斜め方向のハケ目 横方向の工具ナデ	〃	にぶい橙	にぶい橙	1mm大の灰白色粒を含む。	残存率 裾部1／14
225	〃	高坏 脚裾部	〃		(17. 0) 裾部径		縦方向のミガキ	ナデ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm大の灰白色粒、にぶい黄橙色粒を含む。 微細な透明・黒色の光沢粒を含む。 微細な黒色粒を含む。	残存率 裾部1／10
227	〃	甕 口縁部～胴部	SA6	(18. 6)			横方向のナデ	横・斜め方向のナデ	〃	橙	橙	2mm大の灰白色、灰褐色、橙色の粒を含む。 1mm大の黒褐色の粒、透明の光沢粒を含む。	残存率 口縁部 1／8 スス付着
228	〃	甕 口縁部～頸部	〃	(18. 6)			横方向のナデ	横方向のナデ	〃	橙	橙	1mm大の橙色の粒を含む。 1mm大の褐灰色の粒を含む。 微細な透明の光沢粒、灰白色、黒色粒を含む。	残存率 口縁部 1／4 スス付着
229	〃	甕 口縁部～頸部	〃				斜め方向のナデ	斜め方向のハケ目	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm大の褐色、褐灰色の粒を含む。 微細な透明の光沢粒を含む。	
230	〃	甕 口縁部～頸部	〃				縦方向のハケ目	斜め方向のハケ目	〃	浅黄橙	にぶい黄橙	3mm大の褐灰色の粒を含む。 2mm大の灰褐色の粒を含む。 微細な黒色の光沢粒を含む。	スス付着
231	〃	甕 口縁部	〃				横・斜め方向のハケ目	横・斜め方向のハケ目	〃	浅黄橙	浅黄橙	5mm大のにぶい褐色の粒を含む。 3mm大の灰褐色の粒を含む。 微細な透明の光沢粒を含む。	残存率 口縁部 1／10
232	〃	甕 口縁部	〃				ナデ	ナデ	〃	灰褐	にぶい橙	4mm大の灰白色、黒色の粒を含む。 1mm以下の灰褐色の粒を含む。 微細な灰白色の粒を含む。	
233	〃	甕or壺 底部	〃		4. 7		全体的に風化 横方向のハケ目	縦方向の工具痕	〃	浅黄橙	黒	2mm大の灰色、褐色の粒を含む。 微細な乳白色の粒を含む。	残存率 底部 100%
234	〃	壺 口縁部～頸部	〃	(16. 2)			全体的に風化 横方向のナデ 指押さえ	横方向のナデ ハケ目 指押さえ	〃	にぶい黄橙	にぶい橙	4mm大～微細な灰白色の粒を含む。 3mm以下の赤褐色粒を含む。 微細な透明な光沢粒を含む。	残存率 口縁部 1／5
235	〃	壺 口縁部～頸部	〃	(16. 4)			櫛描波状文 縦・斜め・横方向のハケ目	横方向のナデ ハケ目	〃	浅黄	橙	1mm大の灰白色粒を含む。	残存率 口縁部 2／7
236	〃	壺 口縁部～頸部	〃	(9. 0)			櫛描波状文 縦・斜め方向のハケ目	横方向のハケ目	〃	浅黄橙	浅黄橙	2～3mm大の褐色、灰色の粒を含む。 1mm大の褐色、灰色の粒を含む。	残存率 口縁部 1／4
237	〃	壺 口縁部	〃				斜め方向のハケ目	縦・横・斜め方向のハケ目	〃	浅黄橙	浅黄橙	3mm大のにぶい褐色の粒を含む。 2mm大の橙色の粒を含む。 微細な黒色の粒を含む。	
238	〃	壺 頸部	〃				斜め方向のハケ目	横・斜め方向のハケ目	〃	淡橙	橙	2mm大の褐色の粒を含む。 微細な乳白色の粒を含む。	
239	〃	壺 頸部	〃				一部にナデ 風化	横・斜め方向のハケ目	〃	浅黄橙	浅黄橙	2mm大の褐色粒を含む。 微細な乳白色粒を含む。	
240	〃	鉢 口縁部	〃				横方向のナデ 指押さえ	丁寧なナデ	〃	にぶい橙	にぶい橙	1. 5mm大の褐灰色の粒を含む。 微細な灰白色、黒褐色の粒を含む。	残存率 口縁部 1／12
241	〃	甕or壺 胴部	〃				横・斜め方向のハケ目	横・斜め方向のハケ目	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の灰白色粒を含む。 微細な灰色光沢粒を含む。	
242	〃	鉢 口縁部～底部	〃	12. 1	4. 2	12. 8	縦方向のミガキ	縦・横・斜め方向のハケ目	〃	灰白	淡橙	1mm以下の褐色、乳白色の粒を含む。	完形
243	〃	小型土器 胴部～底部	〃		4. 8		ハケ目 底部はハケ目のあと工具ナデ	縦方向の工具痕 ミガキ	〃	明赤褐色	明赤褐色	3mm大の微細な灰白色の粒を含む。 2mm大の黒色の粒を含む。 微細な灰色光沢粒を含む。	残存率1／4 植物繊維痕 籾圧痕
244	〃	小型甕 胴部～底部	〃		5. 4		全体的に風化 縦方向のハケ目	全体的に風化 縦方向のハケ目	〃	橙	橙	2～4mm大の褐色、灰色の粒を含む。 1mm以下の褐色の粒を含む。	残存率 底部 100%
245	〃	高坏 坏部	〃	(26. 8)			横・斜め方向のハケ目 ミガキ	横方向のナデ	〃	灰黄	灰黄	1mm以下の灰白色の粒を含む。 微細な透明光沢粒を含む。	残存率 口縁部 1／14

【土器観察表⑨】

番号	種別	器種 部位	出土 地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
246	弥生 土器	高坏 坏部	SA6	(16．2)			横方向のナデ 斜め方向のハケ目	横方向のナデ 斜め方向のハケ目	良好	浅黄	にぶい黄橙	1mm以下の灰白色粒を含む。 2mm大の赤褐色粒を含む。	残存率 口縁部 1／10
247	〃	高坏 坏部	〃				縦方向のミガキ	縦方向のミガキ	〃	橙	橙	1mm大の乳白色粒、黒色粒を含む。 微細な透明の光沢粒を含む。	残存率 頸部 1／12
248	〃	高坏 脚裾部	〃				全体的に風化 縦方向の工具痕 指押さえ	全体的に風化 工具痕	〃	にぶい橙	にぶい橙	1mm大の乳白色の粒を含む。	残存率 裾部 1／2
249	〃	高坏 脚裾部	〃		(18．4) 裾部径		縦方向のミガキ	横方向のナデ	〃	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の灰白色粒を含む。 1mm以下の黒褐色粒を含む。	残存率 裾部 1／11
253	〃	甕 口縁部	SC2				ナデ 横方向のハケ目	横方向のハケ目	〃	浅黄橙	浅黄橙	1mm大の褐色粒を含む。 微細な乳白色粒を含む。	残存率 口縁部 1／12
254	〃	高坏 坏部	SC2	(21．5)			縦方向のミガキ 朱塗り	横方向のハケ目	〃	赤	浅黄橙	1mm大の褐色粒を含む。	残存率 口縁部 1／10
255	〃	甕 口縁部	一括	(13．8)			全体的に風化 工具痕 指押さえ	全体的に風化	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm大のにぶい黄橙色の粒を含む。 1mmの黒褐色、褐色、透明光沢の粒を含む。	残存率 口縁部 1／7
256	〃	甕or壺 口縁部	〃				横方向のナデ	横方向のハケ目	〃	浅黄橙	橙	1～2mm大の褐色粒、灰色粒を含む。 微細な乳白色粒、透明な光沢粒を含む。	残存率 口縁部 1／12
257	〃	甕or壺 口縁部	Ⅱ層				全体的に風化 横方向のナデ	全体的に風化 ナデ	〃	浅黄橙	灰白	2mm大のにぶい褐色粒、不透明の光沢粒を含む。 微細な黒褐色粒、透明の光沢粒を含む。	
258	〃	甕or壺 頸部～胴部	〃				ハケ目 指押さえ	ハケ目 指押さえ	〃	黄橙	黄橙	1～2mm大の褐色、灰色粒を含む。 1mm以下の乳白色粒を含む。	
259	〃	小型甕 頸部～胴部	〃				ナデ	工具痕	〃	にぶい橙 褐灰	灰黄褐	1mm大の灰白色、褐灰色、赤褐色の粒を含む。 微細な透明の光沢粒を含む。	
260	〃	甕 頸部～胴部	〃				斜め方向のハケ目	斜め方向のハケ目	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4～5mm大の灰白色、褐灰色、灰褐色の粒を含む。 2mm大の黒褐色、透明の光沢粒を含む。	
261	〃	甕 頸部～胴部	〃				縦・横・斜め方向の工具によるナデ ハケ目	横方向のハケ目	〃	にぶい黄橙	灰黄褐	1mm大の褐灰色、灰白色、黒褐色の粒を含む。 1mm大の不透明の光沢粒を含む。	
262	〃	甕or壺 胴部	カクラン				風化 一部ハケ目	風化 一部ハケ目	〃	橙	にぶい橙	1～2mm大の黒色、褐色、乳白色、黒色の光沢粒を含む。 微細な乳白色粒を含む。	
263	〃	甕 胴部	Ⅱ層				縦・横・斜め方向のハケ目	全体的に風化 斜め方向のハケ目	〃	にぶい橙	にぶい黄橙	7mm大の灰白色、にぶい橙色の粒を含む。 1mm大の褐灰色、黒褐色の粒を含む。 1mm大の透明な光沢粒を含む。	
264	〃	甕or壺 胴部	〃				粗い仕上げで凸凹 一部ハケ目	縦方向のハケ目	〃	にぶい黄橙	黒	4mm大の灰黄褐色の粒を含む。 5mm大の褐灰色の粒を含む。 1mm大の透明な光沢粒を含む。	
265	〃	甕 胴部～底部	〃		5．0		全体的に風化 縦方向のハケ目	全体的に風化 斜め方向のハケ目	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm大の灰白色、黒褐色、浅黄橙色の粒を含む。 1mm大のにぶい黄橙色、褐色の粒を含む。	残存率 底部 100%
266	〃	甕 胴部～底部	一括		(3．6)		工具による不定方向のナデ	横・斜め方向のナデ	〃	にぶい黄褐	暗灰	4～5mm大の灰白色、黄灰色、褐灰色の粒を含む。 2～3mm大のにぶい褐色、透明の光沢粒を含む。	残存率 底部 1／3
267	〃	甕 底部	Ⅱ層		2．9		ナデ	ナデ	〃	にぶい黄橙	浅黄橙	5mm大のにぶい黄橙色、3mm大の褐灰色の粒を含む。 1mm大の黒褐色、灰白色の粒を含む。	残存率 底部 100%
268	〃	壺 口縁部	〃				横方向のナデ 斜め方向のハケ目 櫛描波状文	ナデ 横方向のハケ目	〃	浅黄橙	浅黄橙	1～2mm大の褐色、灰色、黒色の粒を含む。	残存率 頸部1／5
269	〃	壺 口縁部	〃				全体的に風化 櫛描波状文	ナデ	〃	浅黄橙	浅黄橙	1～2mm大の褐色の粒を含む。 微細な乳白色粒を含む。	
270	〃	壺 口縁部	一括				全体的に風化 櫛描波状文	全体的に風化	〃	浅黄橙	浅黄橙	2～3mm大の褐色、灰色の粒を含む。 1mm大の褐色、乳白色粒を含む。	
271	〃	壺 口縁部	Ⅱ層				櫛描波状文 ナデ	横方向のナデ	〃	にぶい橙	にぶい赤褐	2mm大の灰白色の粒を含む。 1mm大の黒褐色粒を含む。 微細な透明の光沢粒を含む。	
272	〃	壺 頸部～底部	カクラン		3．5		縦方向のハケ目 刻目突帯	全体的に風化 縦方向のハケ目	〃	にぶい黄橙	にぶい黄	5mm大の灰白色、3mm以下の赤褐色粒を含む。 2mm大の橙色粒を含む。 微細な透明の光沢粒を含む。	残存率　1／3

【土器観察表⑩】

番号	種別	器種 部位	出土 地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
273	弥生 土器	小型土器 胴部～底部	Ⅱ層		6．0		縦方向のミガキ ハケ目	ナデ 一部工具痕	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mmの灰白色粒、2mmの灰褐色粒を含む。 微細な透明、黒色の光沢粒を含む。	残存率 底部　100%
274	〃	小型土器 底部	〃		3．8		縦方向のハケ目 指押さえ	縦・横方向のハケ目	〃	淡橙	淡橙	1～2mm大の褐色、黒色の粒を含む。	残存率 底部　100%
275	〃	甕or壺 底部	カクラン		3．4		縦方向のハケ目 工具痕 指押さえ	ハケ目 工具痕	〃	灰黄褐	黒	4mm大の灰黄褐色の粒を含む。 3mm大の灰白色、灰褐色の粒を含む。 1mm大の黒褐色、微細な透明の光沢粒を含む。	残存率 底部　100%
276	〃	甕or壺 底部	〃		4．2		縦方向の工具痕 指押さえ	丁寧なナデ 一部工具痕	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm大の灰白色、褐灰色、黒褐色の粒を含む。 微細な透明の光沢粒、黒色の光沢粒を含む。	残存率 底部　100%
277	〃	小型土器 底部	Ⅱ層		2．0		ナデ 指押さえ	ナデ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm大の灰黄褐色の粒を含む。 2mm大の透明な光沢粒を含む。 微細な灰白色、黒褐色の粒を含む。	残存率 底部　100%
278	〃	小型土器 底部	カクラン		3．3		全体的に風化 底部は指押さえ	風化により調整不明	〃	にぶい黄橙	橙	3mm大の橙色の粒を含む。 1mm大の赤褐色、黒色、灰白色、灰褐色の粒を含む。微細な透明光沢粒を含む。	残存率 底部　100%
279	〃	小型壺 口縁部～底部	Ⅱ層	4．7		7．5	ハケ目 指押さえ	ナデ 指押さえ	〃	にぶい黄橙	にぶい橙	1mm大の黒褐色、浅黄橙色、褐色、灰白色の粒を含む。 微細な透明の光沢粒を含む。	完形
280	〃	高坏 坏部	〃	(29．0)			縦方向のミガキ	縦方向のミガキ	〃	橙	橙	2mm大の黒色粒、褐色粒を含む。 1mm以下の乳白色粒、黒色粒を含む。	残存率 坏部　1／5
281	〃	高坏 坏部	〃	(26．4)			縦・横・斜め方向のミガキ ナデ	縦・横・斜め方向のミガキ	〃	浅黄橙	にぶい橙	2～6mm大の褐色、灰色の粒を含む。 1mm大の乳白色の粒を含む。	残存率 口縁部　1／4
282	〃	高坏 坏部	〃	(21．8)			全体的に風化 ナデ	全体的に風化 一部ミガキ	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm大の黒色の光沢粒を含む。 微細な黒色、灰色、褐灰色の粒を含む。	残存率 口縁部　1／12
283	〃	高坏 坏部	一括	(18．8)			縦方向のミガキ	縦方向のミガキ	〃	橙	にぶい橙	1mm以下の乳白色、灰色の粒を含む。	残存率 坏部　1／20
284	〃	高坏 坏部	Ⅱ層	(19．0)			ナデ 縦方向のミガキ	縦方向のミガキ	〃	橙	橙	3mm大のにぶい赤褐色の粒を含む。 1mm大の灰褐色の粒を含む。	残存率 坏部　1／24
285	〃	鉢 口縁部～胴部	〃	(26．2)			全体的に風化 横方向の工具痕または はハケ目	全体的に風化 斜め方向の工具痕	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm大の灰白色の粒を含む。 1mm大の褐色、褐灰色の粒を含む。 微細な透明の光沢粒を含む。	残存率 口縁部　1／10
286	〃	鉢 口縁部～胴部	〃	(26．2)			全体的に風化が著しく 調整不明	全体的に風化 横・斜め方向の工具痕	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm大の褐灰色の粒を含む。 1mm大の灰白色の粒を含む。 微細な透明の光沢粒を含む。	残存率 口縁部　1／14
287	〃	高坏 坏部	〃				横方向のハケ目	丁寧なナデ 一部縦方向のミガキ	〃	浅黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の乳白色、灰色の粒を含む。	
288	〃	高坏 脚部	カクラン				縦方向のハケ目	ナデ	〃	灰黄褐	にぶい黄橙	1～2mm大の褐色粒を含む。 微細な乳白色、透明な光沢粒を含む。	
289	〃	高坏 脚裾部	一括		(26．0) 裾部径		全体的に風化 一部ミガキ	全体的に風化 一部ミガキ	〃	橙	橙	2mm大のにぶい橙色、灰白色の粒を含む。 1mmの褐色、黒褐色の粒を含む。 微細な透明の光沢粒を含む。	残存率 裾部　1／12
290	〃	高坏 脚裾部	Ⅱ層		(18．2) 裾部径		縦方向のミガキ ナデ	横・斜め方向のハケ目	〃	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の乳白色粒を含む。	残存率 裾部　1／8
291	〃	高坏 脚裾部	カクラン		(22．6) 裾部径		縦方向のミガキ ナデ	ナデ 一部横方向のハケ目	〃	浅黄橙	にぶい橙	1mm以下の乳白色の粒を含む。	残存率 裾部　1／9
292	〃	高坏 脚裾部	Ⅱ層		(16．0) 裾部径		縦方向のミガキ	横方向のハケ目	〃	にぶい黄橙	浅黄橙	1mm大の乳白色、橙色の粒を含む。	残存率 裾部　1／16
293	〃	高坏 脚裾部	カクラン				全体的に風化 一部ミガキ	横方向のナデ 横・斜め方向のハケ目	〃	浅黄橙	黄橙	1～2mm大の黒色の粒を含む。	残存率 裾部　1／12

【土器観察表⑪】

番号	器　種	石　材	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	剥片尖頭器	ホルンフェルス	Ⅴ　層	9．7	3．1	1．3	36．3
2	縦長剥片	ホルンフェルス	Ⅴ　層	8．0	2．5	1．1	20．9
3	ナイフ形石器	ホルンフェルス	Ⅴ　層	2．9	1．7	0．6	1．8
4	細石刃核	ホルンフェルス	Ⅳ　層	2．1	2．0	1．8	7．2
5	細石刃核	黒　曜　石	Ⅴ　層	1．0	1．1	1．1	1．0
6	細石刃	ホルンフェルス	Ⅴ　層	1．5	1．0	0．3	0．4
7	細石刃	ホルンフェルス	Ⅴ　層	1．3	0．7	0．1	0．1
57	敲石・磨石	砂　　岩	Ⅴ　層	12．3	6．4	3．1	342．5
58	敲石・磨石	砂　　岩	Ⅳ　層	9．1	8．1	4．5	447．6
59	スクレイパー	ホルンフェルス	Ⅴ　層	6．6	9．0	1．8	120．5
60	スクレイパー	ホルンフェルス	Ⅴ　層	5．2	5．9	1．8	57．8
61	石　核	ホルンフェルス	Ⅴ　層	7．5	6．7	2．1	129．1
62	石　核	ホルンフェルス	Ⅴ　層	7．1	6．9	2．7	141．6
63	石　核	ホルンフェルス	Ⅳ　層	7．1	5．7	2．7	143．8
64	打製石鏃	ホルンフェルス	Ⅴ　層	2．0	1．7	0．5	0．9
65	打製石鏃	チャート	Ⅳ　層	1．5	1．4	0．3	0．4
66	打製石鏃	黒　曜　石	Ⅳ　層	1．5	1．3	0．5	0．6
67	打製石鏃	黒　曜　石	Ⅳ　層	2．6	1．8	0．3	1．0
82	敲　石	砂　　岩	1号竪穴住居跡	11．2	6．6	4．1	436．2
101	剥　片	ホルンフェルス	2号竪穴住居跡	5．0	5．6	1．9	46．6
104	石庖丁	ホルンフェルス	3号竪穴住居跡	4．8	8．1	1．2	68．1
169	砥　石	砂　　岩	4号竪穴住居跡	19．3	13．0	4．1	2510．0
170	剥　片	ホルンフェルス	4号竪穴住居跡	9．3	4．4	1．0	36．0
171	剥　片	ホルンフェルス	4号竪穴住居跡	5．6	4．0	2．3	47．0
172	剥　片	ホルンフェルス	4号竪穴住居跡	4．3	2．7	0．9	6．0
173	剥　片	ホルンフェルス	4号竪穴住居跡	9．4	5．8	1．9	65．7
174	円礫	尾鈴山酸性岩類	4号竪穴住居跡	11．9	10．0	4．9	955．2
175	円礫	尾鈴山酸性岩類	4号竪穴住居跡	11．0	9．3	5．0	797．6
226	砥石	砂　　岩	5号竪穴住居跡	19．8	10．8	5．3	1133．1
250	敲石・磨石	尾鈴山酸性岩類	6号竪穴住居跡	9．9	9．1	4．1	530．9
251	砥石	砂　　岩	6号竪穴住居跡	17．2	11．7	4．6	1590．0
252	磨石・敲石	尾鈴山酸性岩類	6号竪穴住居跡	11．7	10．6	5．2	1000．2
294	砥　石	ホルンフェルス	Ⅱ　層	19．7	11．1	7．8	1740．0

【石器計測表】

第Ⅳ章　自然科学分析

株式会社 古環境研究所

第１節　放射性炭素年代測定

１．はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約５万年前までの年代測定が可能である。

２．試料と方法

試料No.	地点・層準	種類	前処理	測定法
No. 1	SA６（弥生時代住居跡）	炭化材	超音波洗浄，酸-アルカリ-酸処理	AMS
No. 2	SP１（縄文時代早期の炉穴）	炭化材	超音波洗浄，酸-アルカリ-酸処理	AMS
No. 3	SA４（弥生時代住居跡）	土器付着炭化物	超音波洗浄，酸-アルカリ-酸処理	AMS

AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

３．測定結果

試料No.	測定No.（PLD-）	δ^{13}C（‰）	^{14}C年代（年BP）	暦年代（較正年代）	
				１σ（68.2%確率）	２σ（95.4%確率）
No. 1	13992	-26.62±0.15	1905±20	AD 70-125	AD 30-40, 50-140
No. 2	13993	-27.21±0.16	9055±35	BC 8290-8255	BC 8300-8235
No. 3	13994	-25.99±0.20	1935±20	AD 25-40, 50-85, 105-120	AD 20-130

（１）δ^{13}C（デルタ）測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料のδ^{13}C値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正する。

（２）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、現在（AD1950年基点）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いている。BP はBefore Physics（Present）を示す。

（３）暦年代（Calendar Age）

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中^{14}C濃度の変動および^{14}Cの半減期の違いを較正することで、より実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な^{14}C測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線データはIntCal 04、較正プログラムはOxCal 3.1である。

暦年代（較正年代）は、^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により１σ（シグマ）（68.2％確率）と２σ（95.4％確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の1σ・２σ値が表記される場合もある。()内の％表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

４．所見

加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定の結果、№１の炭化材では1905±20年BP（２σの暦年代でAD 30～40, 50～140年）、№２の炭化材では9055±35年BP（BC 8300～8235年）、№３の土器付着炭化物では1935±20年BP（AD 20～130年）の年代値が得られた。

文献

Bronk Ramsey C. (1995)Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy,The OxCal Program,Radiocarbon,37(2), p.425-430.

Bronk Ramsey C. （2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46,p.1029-1058.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代, p.3-20.

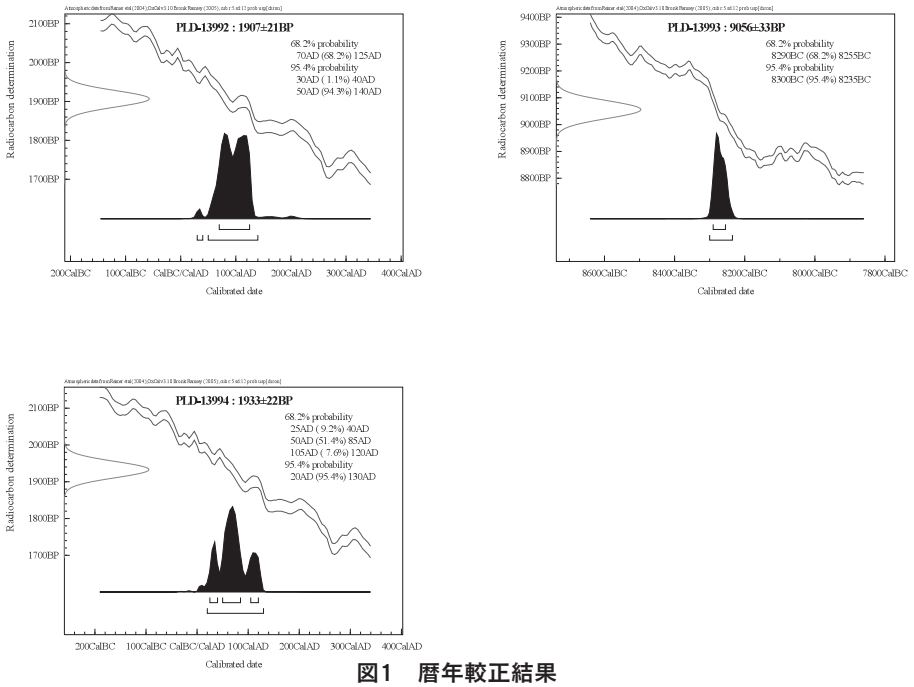


図１　暦年較正結果

第２節　蛍光Ｘ線分析

１．はじめに

物質にＸ線を照射すると、その物質を構成している元素に固有のエネルギー（蛍光Ｘ線）が放出され、この蛍光Ｘ線を分光して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類と量を調べることができる。

古代の赤色顔料としては、一般的に水銀朱（硫化水銀：HgS)、ベンガラ（酸化第二鉄：Fe_2O_3)、鉛丹（酸化鉛：Pb_3O_4）が知られている（市毛，1998，本田，1995)。蛍光Ｘ線分析では、水銀（Hg）・イオウ（S)、鉄（Fe)、鉛（Pb）の元素の検出状況から赤色顔料の種類を推定することが可能である。

２．試料と方法

分析試料は、B3グリッドから出土した縄文時代早期の土器に付着した赤色顔料である。

３．分析方法

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（堀場製作所製分析顕微鏡，XGT-5000TypeⅡ）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。測定の条件は、測定時間500秒、ビーム径100μm、電圧50kV、試料室内真空である。また、光学顕微鏡下で赤色顔料の粒子形状を観察した。

４．分析結果

図１に各元素の定量分析結果（wt%）およびＸ線スペクトル図を示す。また、写真図版に赤色顔料の顕微鏡写真を示す。

５．考察

土器に付着した赤色顔料について蛍光Ｘ線分析を行った。その結果、鉄（Fe）の明瞭なピークが認められ、水銀（Hg）や鉛（Pb）は検出されなかった。鉄（Fe）の含量は35.6%と高い値である。なお、光学顕微鏡による観察では、パイプ状粒子（大久保，2000）は認められなかった。

以上の結果から、縄文時代早期の土器に付着した赤色顔料はベンガラと考えられる。なお、地下水中などの鉄分が沈着した褐鉄鉱も同様の成分で構成されていることから、ベンガラをより確実に同定するにはＸ線回折分析による結晶構造の解析が必要である。

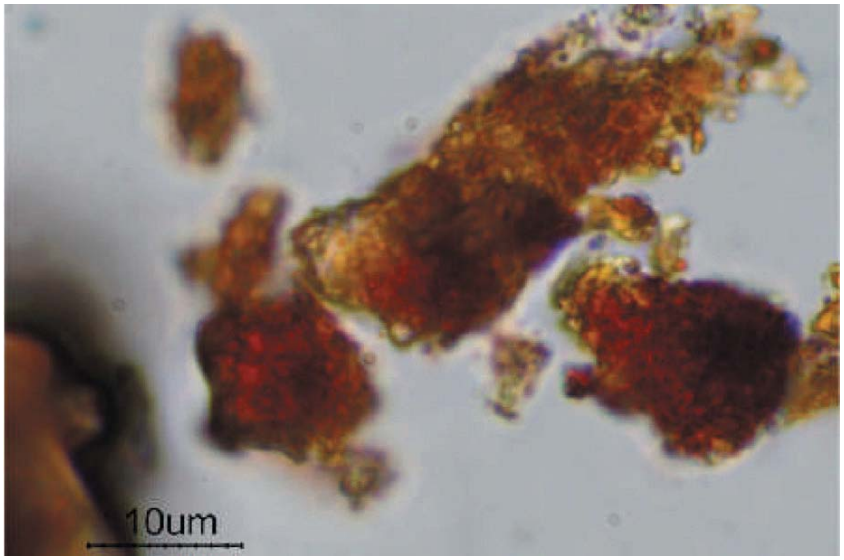
文献

市毛　勲（1998）新版朱の考古学．考古学選書．雄山閣出版

大久保浩二（2000）鹿児島県出土の赤色顔料－日本最古の赤彩土器をはじめとして．人類史研究12，p.163-169.

本田光子（1995）古墳時代の赤色顔料．考古学と自然科学．31･32，p.63-79.

土器内面付着の赤色顔料



赤色顔料の顕微鏡写真

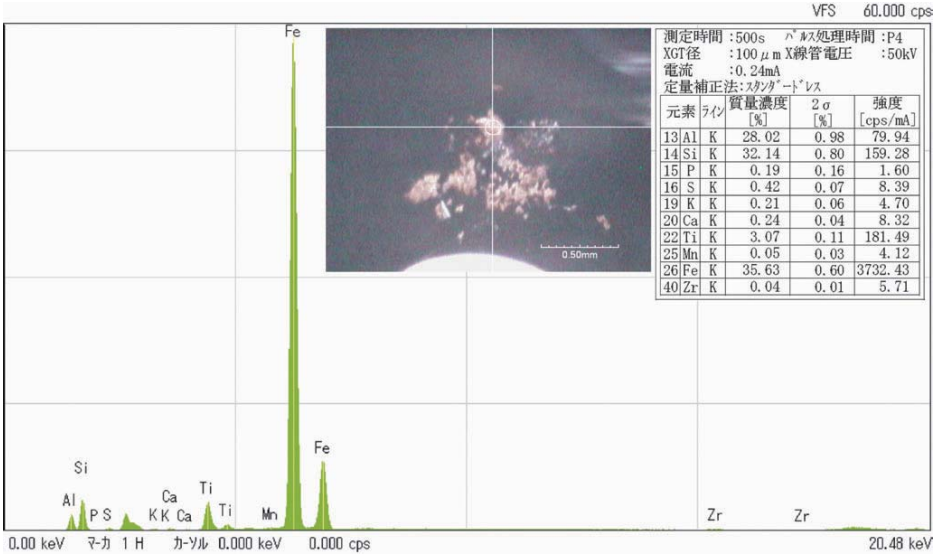


図１　赤色顔料の蛍光Ｘ線分析結果

第Ⅴ章　まとめ

旧石器時代

本遺跡の旧石器時代は姶良丹沢火山灰層上層より生活の跡が認められた。遺構は確認できなかったが、遺物については、これまでの資料蓄積によって該当時期とされる石器が、少量ながら本遺跡においても確認することができ、資料の集積に貢献できたと考える。ナイフ形石器は１点のみの出土ではあったが、宮崎編年の第７段階に相当すると考えられる。剥片尖頭器も当該時期におおむね該当する。また、細石器として細石刃２点と細石刃核２点をそれぞれ確認できた。黒曜石を石材とした細石刃核は、細石刃の剥ぎ取り方までも詳細に示すことはもとより、親指ほどのきわめて小さな細石刃核を細部まで丁寧に剥ぎ取った様子がうかがわれるもので、人々の石材に対する丁寧な取り扱い方までも想起させるものである。

縄文時代

遺構・遺物ともに縄文時代早期のものが大半を占めた。遺構は集石遺構と炉穴を確認した。集石遺構は調査区北側で数mも離れていないところに位置し、径１mほどの規模で堀込みは約１０ｃm～１５ｃmで浅いものであった。調査区外の地形の状況や南側で確認できなかったことなどを考慮すると、分布域は西側の調査区外に広がる可能性があるが、数量的には多くはないようである。炉穴は、１基のみの検出にとどまった。地形の傾斜を利用して炉穴をつくるという場合が多いなかで、本遺跡の場合、北から南へ傾斜する現地形とは異なり、当該時期はほぼ水平レベルの地形であったのだろうか、北東の炉口から南西へかけて煙道がのびる形状となっていたようである。なお、この炉穴から検出した炭化材を、ＡＭＳ法によって放射性炭素年代測定を行ったところ、^{14}Ｃ年代で９０５５±３５年ＢＰ、暦年代（２σ　９５.４％確率）でＢＣ８３００－８２３５の測定値を得られた。

遺物は草創期の土器として９点掲載した。このうち５点は隆帯文土器であり、草創期終わりから早期はじめの所産と考えられる。早期の土器では、貝殻条痕文土器が大半を占め、無文土器、押型文土器の順に出土量が減少する。貝殻条痕文土器は、口縁部の形状、口唇部の調整などから４類に分けたが、大きく分けると、直行するものと外反するものとに分けられ、どちらも数量的には同程度の割合で出土している。また、外面に横位もしくは斜位の条痕を施すものがほとんどであり、いわゆる別府原式タイプと考えられる。なお、器壁１ｃmを境に厚手と薄手に分けると、厚手のものの出土割合が高くなっている。また、赤色顔料を口縁内部に施したものが２点出土しているが、これは前平式土器と考えられる。

無文土器は、器壁の薄い１ｃm未満のものが多く、厚手のものは少量である。貝殻条痕文土器などとの前後関係は不明である。押型文土器は２点で、楕円形と山形文がそれぞれ1点ずつである。小破片であることから全体像はわからない。

弥生時代

遺構は竪穴住居跡６軒、土坑３基である。このうち３号土坑は前述のとおり、１号竪穴住居跡内の土坑と考えられる。いずれの竪穴住居跡も一部もしくは大半が調査区外にあるため、全容が不明という点は残念であるが、竪穴住居跡はいずれもおおむね弥生時代終末期に営まれたものと考えられる。

本遺跡では、集落跡として、居住域の確認ができた点は成果としてあげられるが、調査面積が狭小と

いうこともあり、生産域や墓域については遺構として直接確認できるものはなかった。しかし、住居埋土中から石庖丁が出土し、また土器胎土中にイネと推察できる圧痕なども見つかっており、間接的ながら、生業については確認することができ、生産域についても推察することができよう。

本遺跡の調査の成果から、遺構は本遺跡のみにとどまらず調査区の北側及び東西に住居跡等が続くものと推察できる。また本遺跡の東側には弥生時代後期～終末期の赤坂遺跡が存在することなどから、本遺跡は赤坂遺跡と併行して存在していた集落と考えられる。なお、赤坂遺跡は周溝墓を１基確認しており、このことから、赤坂遺跡の有力者が赤坂遺跡のみならず、本遺跡も治めていたと推察することができる。すなわち、同一集落の可能性を考えることもできる。さらに、同一時期の遺跡として、国光原遺跡、湯牟田遺跡など本遺跡周辺に所在していることから、国光原台地上の西端に、弥生時代後期～終末期にかけての一大集落が成立していたことが想定できる。

ＳＡ４およびＳＡ６から出土した炭化材の放射性炭素年代測定によると、ＳＡ４の炭化材は、^{14}Ｃ年代は１９３５±２０年ＢＰ、暦年代はＡＤ２０－１３０、ＳＡ６の炭化材は、^{14}Ｃ年代は１９０５±２０ＢＰ、暦年代はＡＤ３０－４０、５０－１４０、の数値が得られた。時期は、弥生時代である。

遺物は、甕、壺、高坏のほか、鉢、杓子状製品などの土器、砥石、敲石、石庖丁などの石器がみられる。土器では、２１２点を弥生土器として掲載した。そのうち甕の割合が最も高く約３９％を占め、次いで高坏が約３２.５％、壺が約１８.９％、鉢が約６.６％などとなった。高坏の掲載数が多くなったが、全出土量から考慮しても高い割合を示していた。石器は１０点を掲載した。尾鈴山酸性岩類は敲石、砂岩は砥石や磨石、ホルンフェルスは砥石や石庖丁として使用されたようである。

今回の調査では、前ノ田村遺跡は狭小な面積にもかかわらず、旧石器時代から弥生時代までの長期にわたって人々が生活を営んでいたことを確認することができた。また、広大な台地へと続く東側の地域には、数多くの同時期の遺跡が連綿と続いていることから、それらの遺跡と同時期に活動していた前ノ田村遺跡の人々の生活の一端を垣間見ることができた。とりわけ弥生時代の後期から終末期における集落の痕跡については、同時期の遺跡が周辺において数多く確認されており、一大集落跡が形成されていたと想定できることから、今後の調査において集落の構成という点から大きな指針を示すことにもなるだろう。さらに、古墳時代の代表的な遺跡である川南古墳群の造営との関わりという点においても今回の調査は大きな意味をもつと考えられる。

【参考文献】

（1）宮崎県　１９９８　『宮崎県史』通史編１　原始・古代１

（2）宮崎県埋蔵文化財センター２００１『松元遺跡・井手口遺跡・塚原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第４０ 集

（3）宮崎県埋蔵文化財センター２００２『別府原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第６１集

（4）宮崎県埋蔵文化財センター２００４『下那珂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第９０集

（5）宮崎県埋蔵文化財センター２００７『中ノ迫第１遺跡（一次　二次)』宮崎県埋蔵文化財センター　発掘調査報告書　第１４３ 集

（6）宮崎県埋蔵文化財センター２００７『中ノ迫第３遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第１４４集

（7）宮崎県埋蔵文化財センター２００７『国光原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第１４９ 集

（8）宮崎県埋蔵文化財センター２００７『赤坂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第１５１集

（9）宮崎県埋蔵文化財センター２００７『湯牟田遺跡（二次調査)』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査　報告書　第１５２ 集

(10) 宮崎県埋蔵文化財センター２００８『中ノ迫第２遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第１６７ 集

(11) 宮崎県教育委員会１９８３『東平下１号円形周溝墓』宮崎県文化財調査報告書　第２９集

(12) 埋蔵文化財研究会『弥生時代後期の社会変化』第５８回埋蔵文化財研究集会資料集　２００９年

(13) 宮崎県旧石器文化談話会２００５『宮崎県下の旧石器時代遺跡概観』旧石器考古学

(14) 川南町『川南町史』

(15) 川南町教育委員会『川南町の埋蔵文化財』

(16) 高鍋町教育委員会１９９１『大戸ノ口第二遺跡』高鍋町文化財調査報告書　第５集

(17) 新富町教育委員会１９８６『新田原遺跡』新富町文化財調査報告書　第４集

(18) 岩永　哲夫『南九州の押型文土器』宮崎考古第２０号　２００８年

(19) 石川　悦雄『宮崎平野における弥生土器編年試案』宮崎県総合博物館研究紀要　第８号　１９８３年

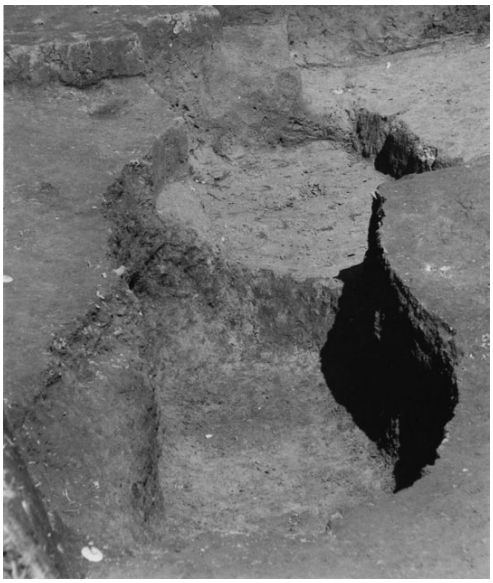
(20) 石川　悦雄『宮崎平野における弥生土器編年試案－素描－（Ｍｋ．Ⅱ)』宮崎考古　第９号　１９８４年

(21) 桒畑　光博『中溝式系土器の検討』九州古文化研究会　古文化談叢　第４５集　２０００年

(22) 本田　道輝『鹿児島県下の弥生後期土器』鹿児島考古　第２７号

(23) 秋成　雅博『宮崎１０段階編年の概要』九州旧石器　第９号　九州旧石器文化研究会　２００５年

図　　版



【１号炉穴】（南西より）

【１号集石遺構】（東より）

【２号集石遺構半裁】（南より）

図版5

【１号竪穴住居跡】（南より）

【２号竪穴住居跡】（南より）

【３号竪穴住居跡】（北東より）

【４号竪穴住居跡】（北より）

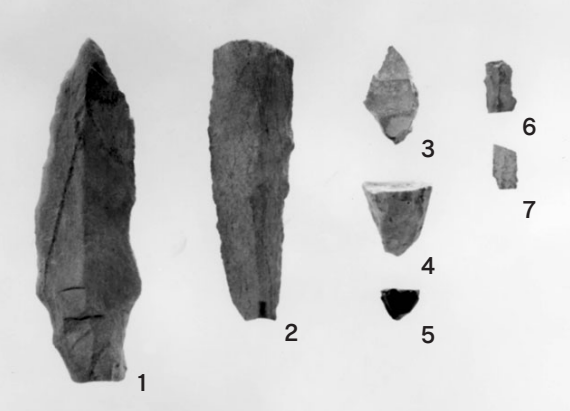
【５号竪穴住居跡】（北より）

【６号竪穴住居跡】（東より）

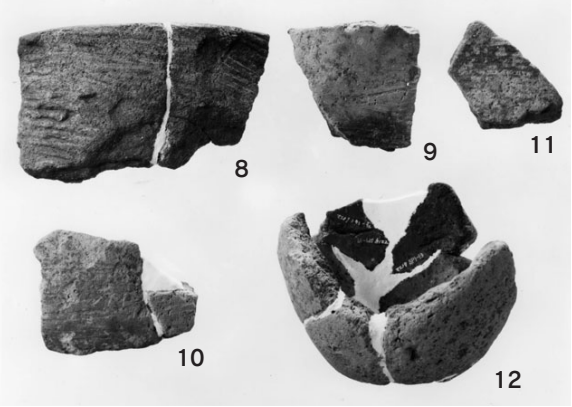
図版7

【１号土坑】（南より）

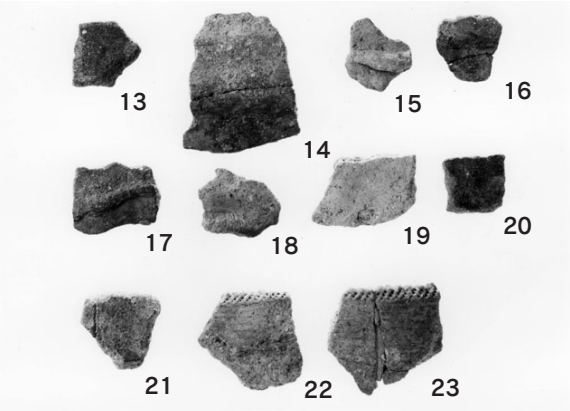
【２号土坑】（南東より）

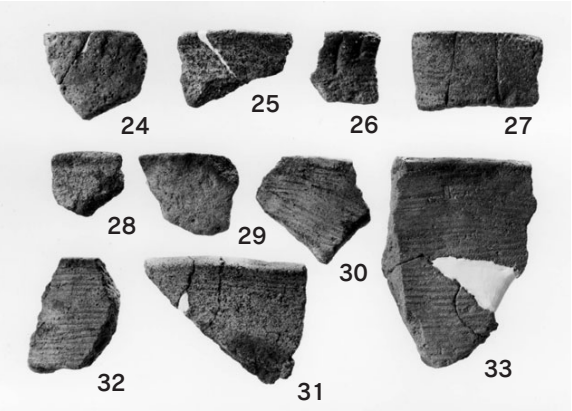


【旧石器時代石器】

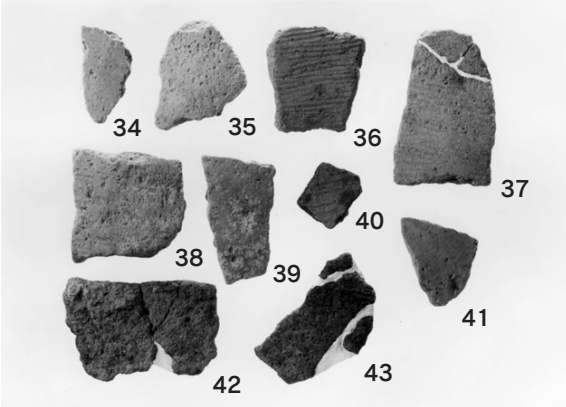


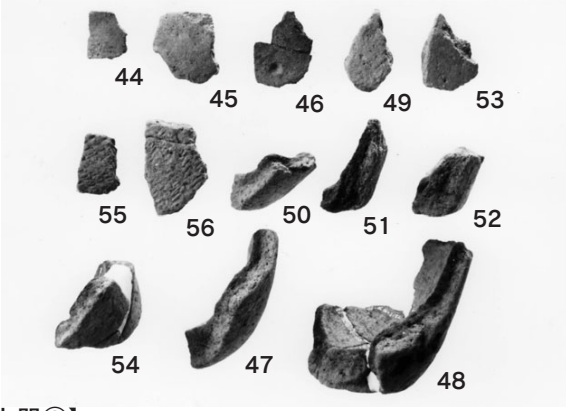
【縄文時代土器①】



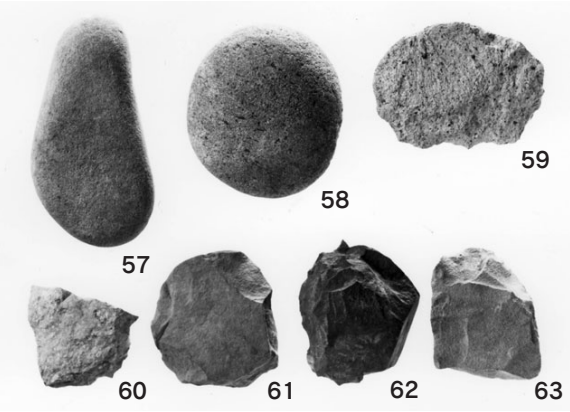


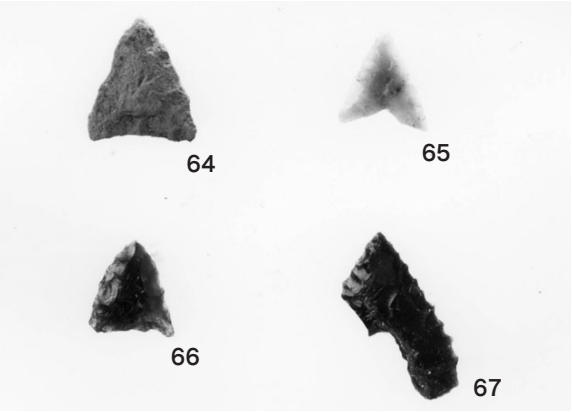
【縄文時代土器②】





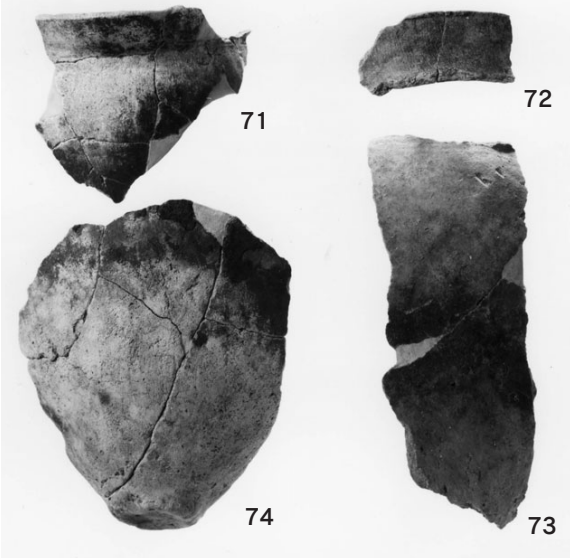
【縄文時代土器③】

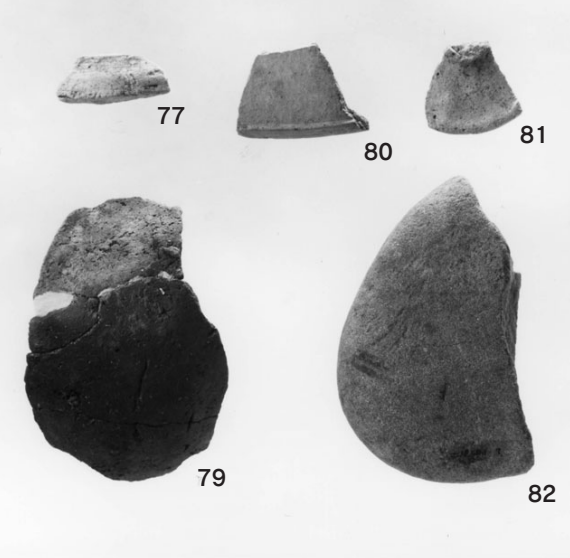




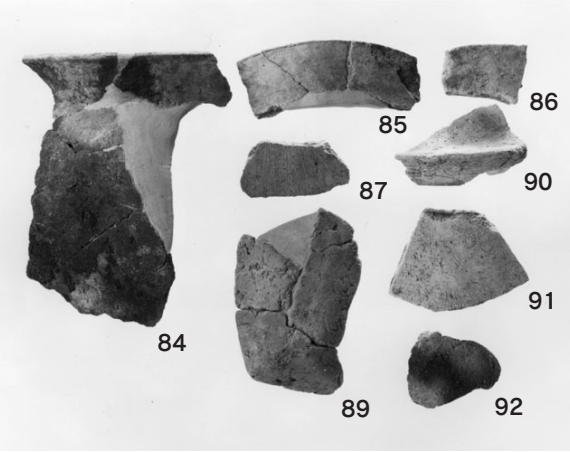
【縄文時代石器】

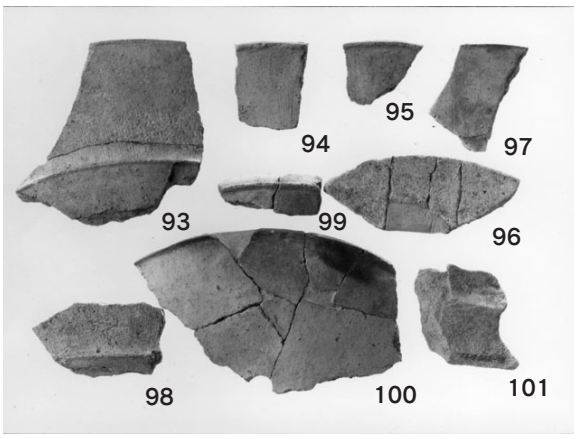
図版9





【ＳＡ１出土遺物①】



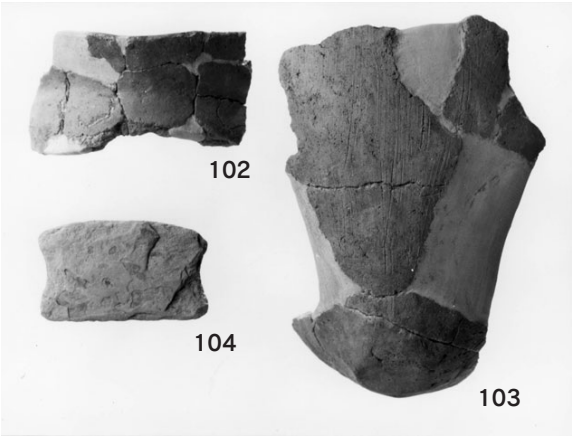


【ＳＡ２出土遺物①】

【ＳＡ１出土遺物②】

【ＳＡ２出土遺物②】

【ＳＡ２出土遺物③】

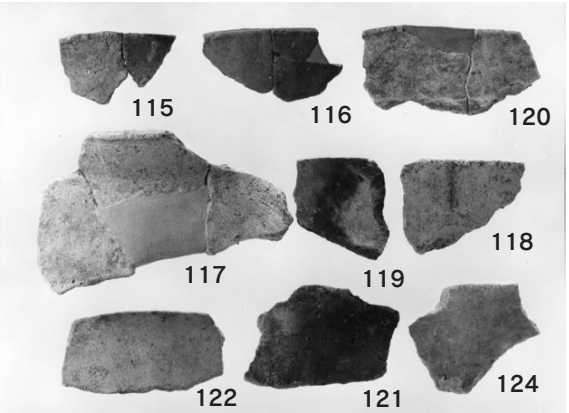


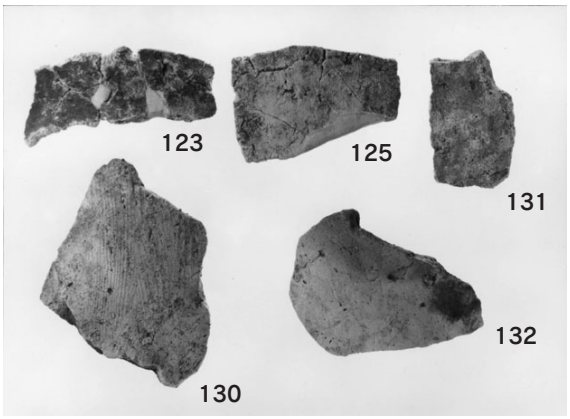
【ＳＡ３出土遺物】

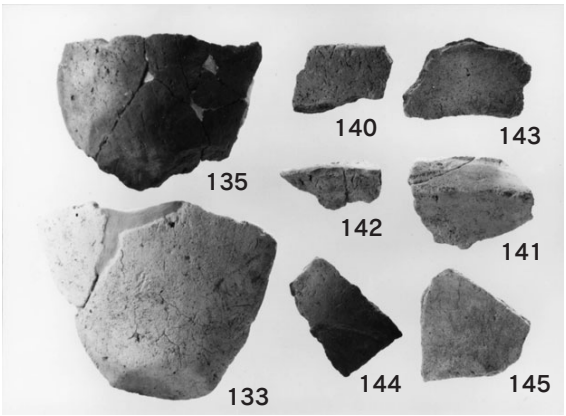
【ＳＡ４出土遺物①】

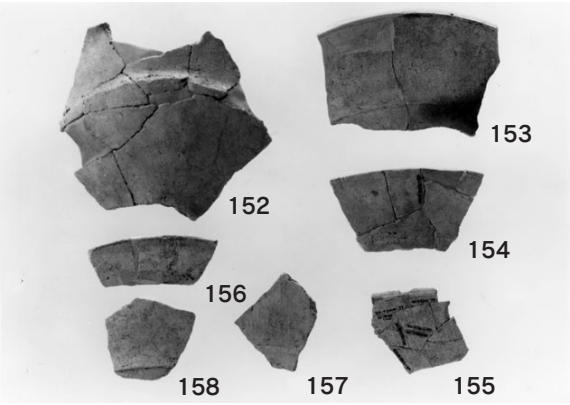
【ＳＡ４出土遺物②】

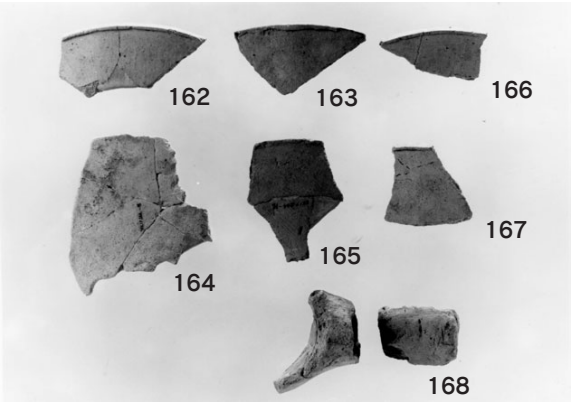
図版13

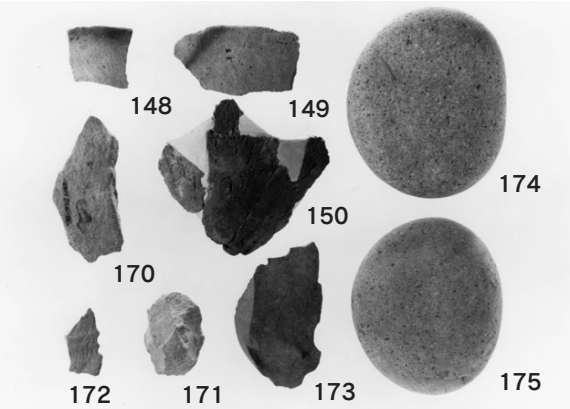


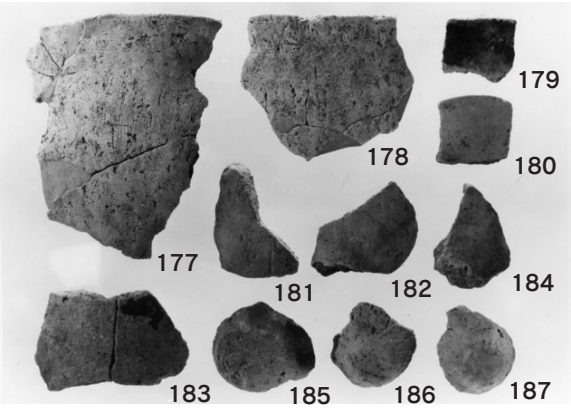


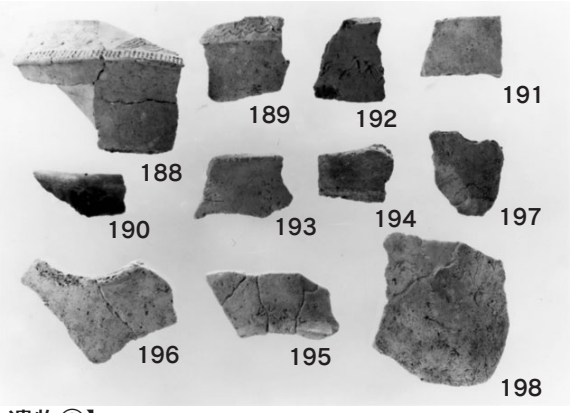












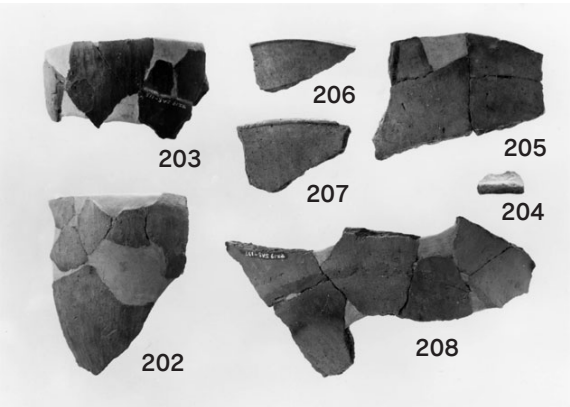
【ＳＡ４出土遺物③】

【ＳＡ４出土遺物④】

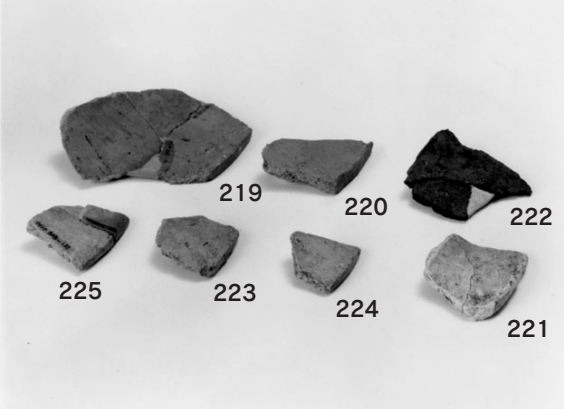
図版15

【ＳＡ４出土遺物⑤】

【ＳＡ５出土遺物①】

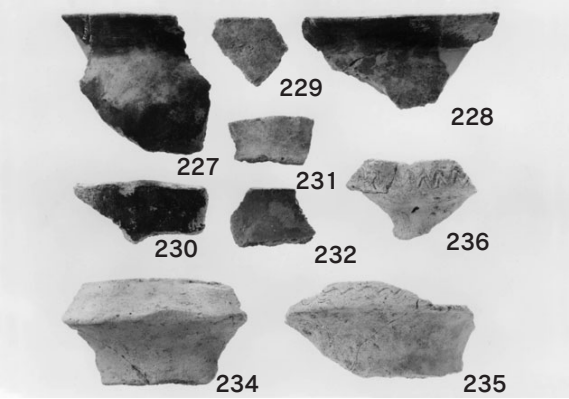


【ＳＡ５出土遺物②】



【ＳＡ５出土遺物③】

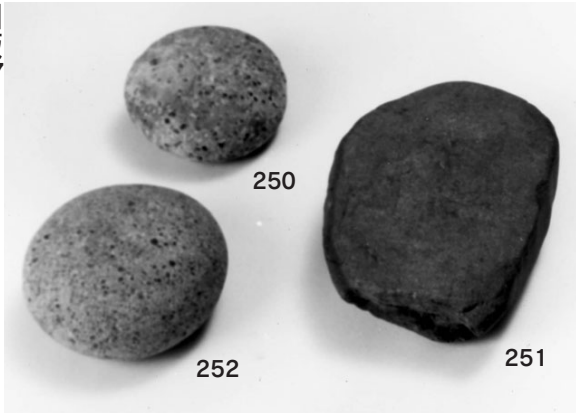
【ＳＡ５出土遺物④】

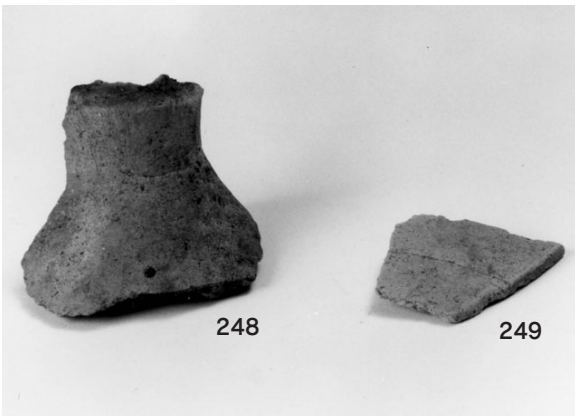


【ＳＡ６出土遺物①】

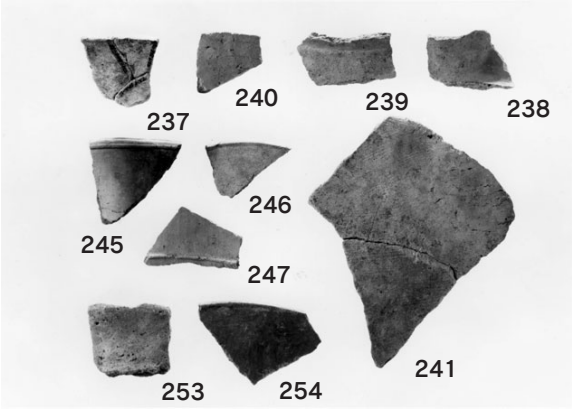
【ＳＡ６出土遺物②】

図版17

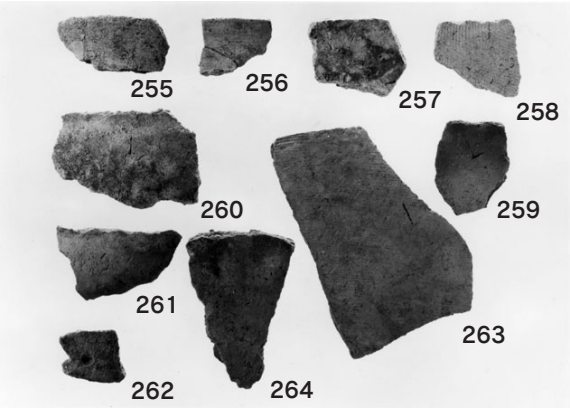




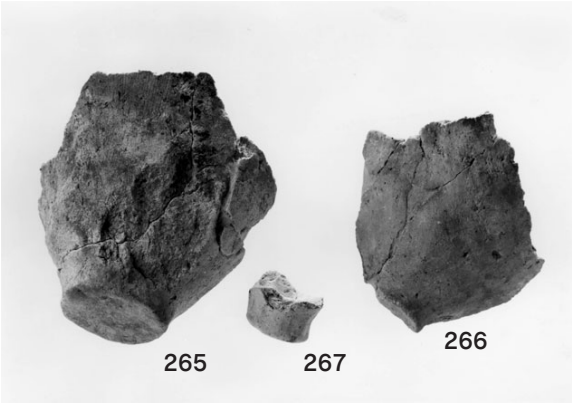
【ＳＡ６出土遺物③】

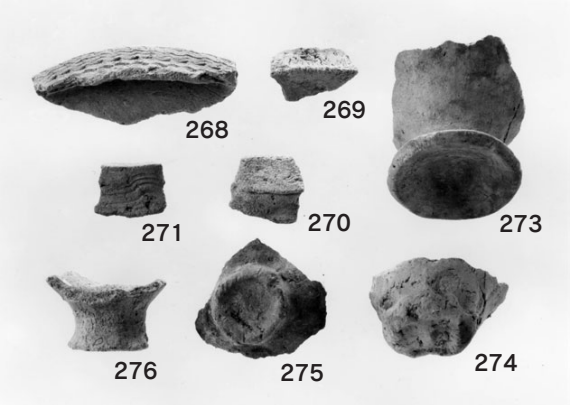


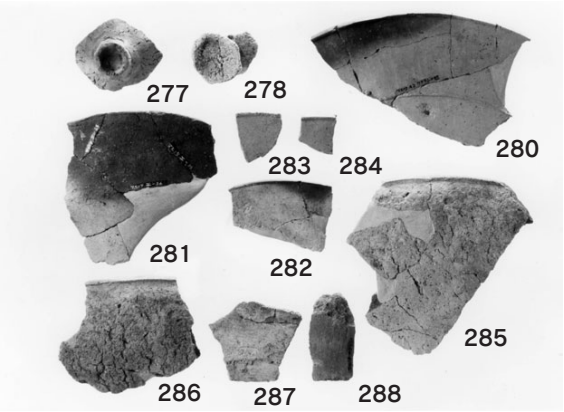
【ＳＡ６、ＳＣ２出土遺物】



【第Ⅱ層出土遺物①】







【第Ⅱ層出土遺物②】

【第Ⅱ層出土遺物③】

報　告　書　抄　録

ふりがな	まえのだむらいせき
書名	前ノ田村遺跡
副書名	国営尾鈴農業水利事業西光原調圧水槽工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第１９０集
編著者名	黒木　俊彦
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒880-0212　宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地　TEL 0985-36-1171
発行年月日	2010年２月２６日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まえのだむらいせき 前ノ田村遺跡	みやざきけんこゆぐん 宮崎県児湯郡 かわみなみちょうおおあざ 川南町大字 かわみなみあざにしこっこう 川南字西国光 25406－20	45－405		32°10′54″	131°29′24″	20080729 ～ 20081016	612㎡	国営尾鈴農業水利事業西光原調圧水槽工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前ノ田村遺跡		旧石器時代		剥片尖頭器 ナイフ形石器 細石刃	
	集落	縄文時代	集石遺構　２基 炉穴　１基	縄文土器 敲石　磨石	赤彩土器
	集落	弥生時代	竪穴住居跡６軒 土坑　３基	弥生土器 石庖丁　砥石	

要約	周知の包蔵地である前ノ田村遺跡の一部と考えられ、狭小ながらも旧石器時代から弥生時代までの生活の跡が確認できた。縄文時代早期の土器片には赤彩を施すものがあり、当時の人々の生活や祭祀との関連における貴重な一資料である。弥生時代の遺構や遺物は、甕や高坏の形状の特徴などから終末期のものと考えられ、周溝墓を検出した隣接する赤坂遺跡と同じ時期に共存または同一集落とも考えられる。

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第１９０集

前ノ田村遺跡

国営尾鈴農業水利事業西光原調圧水槽工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１０年　２月２６日

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212　宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地

TEL 0985(36)1171　　FAX 0985(72)0660

印　刷　藤屋印刷株式会社

〒883-0045　宮崎県日向市本町7-15

TEL 0982(52)7171　　FAX 0982(56)1208